2022年9月1日(木)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

10:30 ~ 12:20 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）
指定討論者：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

[健康福祉-SB-1] 運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

[健康福祉-SB-2] 認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋[1] (1. 神戸大学大学院保健学研究科)

[健康福祉-SB-3] 心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏[1] (1. 武庫川女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

10:30 ~ 12:20 | 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か ―身体・組織・支援の観点から―

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、髙尾 尚平（日本体育大学）
指定討論者：渡 正（順天堂大学）

[スポーツ文化-SB-1] 身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛[1] (1. 明星大学)

[スポーツ文化-SB-2] パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一[1] (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

[スポーツ文化-SB-3] パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子[1] (1. 国立スポーツ科学センター)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

10:30 ~ 12:20 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ―「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして―

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

[学校保健体育-SB-1] 「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹[1] (1. スポーツ庁政策課)

[学校保健体育-SB-2] 「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久[1] (1. 横浜国立大学)

[学校保健体育-SB-3] 「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一[1] (1. 東京国際大学)

[学校保健体育-SB-4] 「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀[1] (1. 東広島市教育委員会)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

10:30 ~ 12:20 | 第2会場 3号館4階401教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツ―政策・産業・そして遊び―

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

[生涯スポーツ-SB-1] 遊びの精神から見た子どものWell-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示[1] (1. 東京学芸大学)

[生涯スポーツ-SB-2] 子どものスポーツにおける格差とWell-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子[1] (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SB-3] 幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期のWell-Beingの保障のために

*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

10:30 ~ 12:20 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

[競技スポーツ-SB-1] 女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*來田 享子[1] (1. 中京大学)

[競技スポーツ-SB-2] 女性コーチ育成の現状

*三倉 茜[1] (1. 金沢医科大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子[1] (1. 株式会社Bamboo8)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

17:00 ~ 18:50 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その２）―国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて―

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

[生涯スポーツ-SC-1] 障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人[1] (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

[生涯スポーツ-SC-2] 元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香[1] (1. 株式会社BorderLeSS)

[生涯スポーツ-SC-3] みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士[1] (1. 仙台大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

17:00 ~ 18:50 | 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) ―身体文化の伝承・継承を科学する―

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

[スポーツ文化-SC-1] バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜） 真由美[1] (1. お茶の水女子大学)

[スポーツ文化-SC-2] 身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛[1] (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SC-3] 空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳[1] (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

17:00 ~ 18:50 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

[学校保健体育-SC-1] 心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

[学校保健体育-SC-2] 発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾[1] (1. 日本体育大学)

[学校保健体育-SC-3] 戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

17:00 ~ 18:50 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

[健康福祉-SC-1] 身体活動に対するCovid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子[1] (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

[健康福祉-SC-2] 高齢者のADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生[1] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

[健康福祉-SC-3] 「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋[1] (1. スポーツ＆レジャー研究所)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

17:00 ~ 18:50 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

[競技スポーツ-SC-1] 月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子[1] (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SC-2] トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平[1] (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

[競技スポーツ-SC-3] 女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際

*川上 優子[1] (1. キヤノンアスリートクラブ九州)

[競技スポーツ-SC-4] 性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人[1] (1. 関西福祉大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

9:00 ~ 9:47 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

9:00 ~ 9:15

[生涯スポーツ-B-01] 子どもの安全なスポーツ環境構築に向けた地域スポーツの現状と課題（介,保,発）

スポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態調査から

*佐野 颯斗[1]、山本 利春[1]、笠原 政志[1]、清水 伸子[1] (1. 国際武道大学)

9:16 ~ 9:31

[生涯スポーツ-B-02] eスポーツのオンラインチームプレーが引き出すオキシトシン分泌と友好性（介,生,心）

*松井 崇[1]、門間 貴史[1]、下山 寛之[1]、吉武 誠司[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、峰 勇仁[1]、吉武 理香子[1]、内沢 彰子[1]、藤井 直人[1]、高木 英樹[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

9:32 ~ 9:47

[生涯スポーツ-B-03] eスポーツプレー時の異なる座位姿勢がもたらす気分と精神作業特性（心）

前傾と後傾の比較

*峰 勇仁[1]、髙橋 史穏[1]、吉武 誠司[1]、松岡 弘樹[1]、安田 駿[1]、塩寺 亮義[2]、髙橋 延忠[2]、嶺野 あゆみ[2]、浅田 晴之[2]、松井 崇[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター、2. 株式会社オカムラ)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

9:00 ~ 9:47 | 第7会場 2号館1階12教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：館 俊樹（静岡産業大学）

9:00 ~ 9:15

[生涯スポーツ-B-04] 身体障害児・者を持つ母親のソーシャルサポート向上を目指した親子運動プログラムが運動継続に対する見込み感に与える効果（ア）

*瀬川 海[1]、大平 雅子[2] (1. 兵庫教育大学、2. 滋賀大学)

9:16 ~ 9:31

[生涯スポーツ-B-05] 地域高齢者のためのスマートシューズによる健康・見守り支援クラウドシステムの検討（介,測）

e-テキスタイルセンサを用いた歩行能力評価の検討

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

9:32 ~ 9:47

[生涯スポーツ-B-06] Fリーグ共同開催試合の集客事業に参画した学生の学び（経）

*古田 康生[1] (1. 岐阜協立大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

9:00 ~ 9:47 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

9:00 ~ 9:15

[健康福祉-B-01] 段差跨ぎ動作時における保守的な衝突回避戦略と動作の多様性の関係（介）

*須田 祐貴[1]、中村 高仁[1,2]、坂崎 純太郎[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 埼玉県立大学保健福祉学部)

9:16 ~ 9:31

[健康福祉-B-02] 高齢者のダンス活動がもたらす心理・社会的フレイルの予防効果と活動継続動機との関連（介）

*岡 千春[1] (1. お茶の水女子大学)

9:32 ~ 9:47

[健康福祉-B-03] 高齢者を対象とした移動物体との衝突予測評価（介,測,心）

インターセプト課題の有用性

*佐藤 和之[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

9:00 ~ 9:47 | 第9会場 2号館2階22教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長：周東 和好（上越教育大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-01] 哲学「プレイ・アンド・エクササイズPlay and Exercise」序論（哲）

Taiiku、模倣、生き方

*林 洋輔[1] (1. 大阪教育大学)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-02] どのようにしてパルクール（Parcours ）はパルクール（Parkour）となったのか（社,史,哲）

エベルの「メトード・ナチュレール」のポストコロニアルな転用に関する一考察

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-03] 長野県諏訪市「御柱祭」に見るエクストリームスポーツの要素（人）

伝統スポーツとエクストリームスポーツの接点を捉える

*豊島 誠也[1] (1. 広島大学大学院)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

9:00 ~ 9:47 | 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-04] 「インテグリティ（integrity）」の使用事例にみるスポーツの倫理的問題（政）

78国際競技団体公式サイトの分析を通して

*石原 康平[1]、來田 享子[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-05] スポーツ・インテグリティ・インデックス大学版開発に向けた下位尺度の検討（経）

*庄司 直人[1] (1. 朝日大学)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-06] 日本語版IViS（Interpersonal Violence in Sport）の開発と対人暴力が齎す病理性（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

9:00 ~ 9:47 | 第11会場 2号館4階46教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長：山口 理恵子（城西大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-07] プロスポーツクラブスタッフのキャリアに関する研究（社）

中間報告　クラブの現状

*上代 圭子[1]、野仲 賢勝[2]、東明 有美[3] (1. 東京国際大学、2. （株）電通、3. 関東学園大学)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-08] 地域の史実に由来するスポーツ・イベントの可能性（人,史）

「北灘ワンデリング大会」におけるアンケート調査結果から

*山田 理恵[1]、藤谷 雄平[2] (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿屋体育大学大学院)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-09] パラリンピックと非パラリンピックアスリートの（ディス）エンパワメント（ア）

ソーシャルフットボール選手に着目して

*秋本 成晴[1] (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

9:00 ~ 9:47 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長：原 祐一（岡山大学）

9:00 ~ 9:15

[学校保健体育-B-01] 体育授業において痛みを経験することの意味に関する検討（哲）

*中野 大希[1] (1. 筑波大学大学院)

9:16 ~ 9:31

[学校保健体育-B-02] アダプテッド体育・スポーツの観点の定着に向けた小学校の校内研修プログラムの検討（ア）

*村上 祐介[1]、曽根 裕二[2]、安藤 佳代子[3]、萩原 大河[4,5]、小沼 博義[6]、松原 豊[7]、澤江 幸則[8] (1. 順天堂大学、2. 大阪体育大学、3. 日本福祉大学、4. 兵庫県姫路市立水上小学校、5. 広島大学大学院人間社会科学研究科、6. 茨城県立つくば特別支援学校、7. こども教育宝仙大学非常勤講師、8. 筑波大学)

9:32 ~ 9:47

[学校保健体育-B-03] ダンスの実技力や実技指導力に関わる運動観察力の醸成に係る教材開発（教）

*栫 ちか子[1]、浜田 幸史[1] (1. 鹿屋体育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

9:00 ~ 9:47 | 第2会場 3号館4階401教室

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士舘大学）

9:00 ~ 9:15

[学校保健体育-B-04] 高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）

大学生を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2]、坂本 譲[3]、西脇 雅人[4]、島本 英樹[5]、黒川 修行[6] (1. 東北大学、2. 福岡県立大学、3. 東北学院大学、4. 大阪工業大学、5. 大阪大学、6. 宮城教育大学)

9:16 ~ 9:31

[学校保健体育-B-05] 中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

大学生が思う体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、大坪 健太[2,3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、小椋 優作[6]、春日 晃章[7] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学短期大学部、7. 岐阜大学)

9:32 ~ 9:47

[学校保健体育-B-06] 中学保健の知識定着度および活用意識に影響を及ぼす要因（測）

大学生を対象として

*大坪 健太[1,2]、春日 晃章[3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、東海林 沙貴[6]、小椋 優作[7] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、3. 岐阜大学、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学、7. 中部学院大学短期大学部)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

9:00 ~ 10:19 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

9:00 ~ 9:15

[競技スポーツ-B-01] 全国トップレベルの競技性をもつ高等学校運動部指導者に求められる概念（方）

所属する生徒へのフォーカスグループインタビューを基に

*清野 隼[1,2]、田丸 尚稔[3,4]、高橋 義雄[1,2] (1. 筑波大学 体育系、2. 筑波大学 スマートウエルネスシティ政策開発研究センター、3. 株式会社アシックス、4. 筑波大学 スポーツウエルネス学学位プログラム)

9:16 ~ 9:31

[競技スポーツ-B-02] 継続的に集積可能な心拍数データに関する実践研究（方,測）

大学女子テニス選手を対象に

*長久保 大樹[1]、福家 瑠都[2]、河村 剛光[3] (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学大学院、3. 順天堂大学)

9:32 ~ 9:47

[競技スポーツ-B-03] 学生アスリートにおける月経の身体・精神症状とパフォーマンスの関連について（方,女性アスリート）

*堀野 博幸[1] (1. 早稲田大学)

9:48 ~ 10:03

[競技スポーツ-B-04] 空手の組手競技における先取点獲得の有効性（方）

東京五輪予選大会における日本代表選手のパフォーマンス分析を参考に

*大徳 紘也[1]、松本 剛志[1]、大石 健二[1] (1. 日本体育大学大学院)

10:04 ~ 10:19

[競技スポーツ-B-05] バスケットボール競技におけるタイムアウトの有用性に関する研究（方）

得点効率に着目して

*浅野 秀太[1] (1. 東海大学大学院)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

14:00 ~ 15:03 | 第10会場 2号館4階45教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-05] 運動が苦手な子どもの体育の授業における居場所感の重要性（ア）

*花村 春香[1]、澤江 幸則[1]、齊藤 まゆみ[1] (1. 筑波大学)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-06] 運動の苦手な子供における効果的な指導方法について（ア）

メタ分析を用いた検討

*堀田 愛[1]、高橋 達己[2]、齊藤 まゆみ[3] (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 田園調布学園大学、3. 筑波大学体育系)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-07] 身体活動を伴う普通教室での授業に対する中学生の所感（発）

*田中 良[1,2]、野井 真吾[3] (1. 大阪体育大学、2. 日本体育大学体育研究所、3. 日本体育大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-08] 児童の運動行動および体力自己評価とGRITスコアの関係（測,発）

*中野 貴博[1]、四方田 健二[2] (1. 中京大学、2. 名古屋学院大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

14:00 ~ 15:03 | 第11会場 2号館4階46教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-09] ボール運動系領域におけるICT機器活用に関する研究（2）（教）

*藤田 育郎[1] (1. 信州大学教育学部)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-10] 体育授業に適用できる状況判断力の評価方法の検討（教）

*中島 友樹[1]、後藤 幸弘[2] (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-11] ノリ感を重視したリズムの乗り支援の検討（教,方,バ,心）

*小島 理永[1]、松井 敦典[2]、伊藤 京子[3] (1. 神戸女子大学、2. 鳴門教育大学、3. 京都橘大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-12] 現代的なリズムのダンスにおける基本動作「ダウン」と「アップ」の学習方法に関する実践提案（教）

反省分析によって提案された実践方法の有効性と課題の検討

*川瀬 雅[1]、長谷川 晃一[2] (1. 環太平洋大学、2. 上越教育大学大学院　芸術・体育学系)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

14:00 ~ 15:03 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-01] 中学校体育教師における一般的因果律志向性および基本的心理欲求の充足・不満が欲求支援・阻害行動に及ぼす影響（教）

*寺岡 英晋[1]、岡出 美則[1] (1. 日本体育大学)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-02] 児童の「伝える力」を育成する教師の活動に関する研究（教）
跳び箱運動にみる学習場面の設定と教師の発言について

*徳永 隆治[1] (1. 安田女子大学)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-03] 中学校の創作ダンス授業における指導未経験教師の教師行動に関する事例研究（教）
指導上の困難点と課題の検討

*君和田 雅子[1] (1. 順天堂大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-04] 発達障害児に対する運動指導場面における指導者の関わりに関する研究（ア）

*佐藤 豪[1]、村上 祐介[2]、渡 正[2]、尾高 邦生[2]、渡邉 貴裕[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

14:00 ~ 15:03 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

14:00 ~ 14:15

[健康福祉-C-01] 生活環境下における受光と主観的睡眠状況との関係（発）

*湊谷 勇次[1]、鹿野 晶子[1]、野井 真吾[1] (1. 日本体育大学)

14:16 ~ 14:31

[健康福祉-C-02] 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣は著しく乱れていた（測）

*山田 孝禎[1]、青木 宏樹[2]、野口 雄慶[3]、杉浦 宏季[3]、近藤 雄一郎[1]、出村 友寛[4]、内田 雄[5]、山次 俊介[1]、野田 政弘[4] (1. 福井大学、2. 福井工業高等専門学校、3. 福井工業大学、4. 仁愛大学、5. 仁愛女子短期大学)

14:32 ~ 14:47

[健康福祉-C-03] コロナ禍における児童の生活習慣が心理・社会的側面に与える影響（測）

*木部 聖[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

14:48 ~ 15:03

[健康福祉-C-04] コロナ禍における児童の運動頻度および運動時間が心理・社会的側面に及ぼす影響（測）

*冨士本 有希[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

14:00 ~ 15:03 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

14:00 ~ 14:15

[競技スポーツ-C-01] サッカーのゲームパフォーマンスデータにおける二値測定の妥当性（測）

量的データと質的データの因子構造および因果構造の比較

*徐 広孝[1]、松岡 弘樹[2]、安藤 梢[2]、西嶋 尚彦[2] (1. 静岡産業大学、2. 筑波大学)

14:16 ~ 14:31

[競技スポーツ-C-02] サッカーゲームにおける速攻プレー特性の測定（測）

*松岡 弘樹[1]、安藤 梢[1]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学)

14:32 ~ 14:47

[競技スポーツ-C-03] WEリーグとUEFA女子チャンピオンズリーグにおける速攻プレー特性の比較（測）

*安藤 梢[1]、松岡 弘樹[2]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学　体育系、2. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

14:48 ~ 15:03

[競技スポーツ-C-04] 東京2020オリンピックバドミントン競技における得点経過に着目した勝利ゲームの傾向（方,測）

*松本 剛志[1]、大徳 紘也[1]、大石 健二[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

15:20 ~ 16:39 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

15:20 ~ 15:35

[生涯スポーツ-C-01] 児童・生徒におけるスポーツ傷害リスク要因の定量化（発）

*重松 良祐[1]、中田 由夫[2]、鈴木 宏哉[3]、笹井 浩行[4] (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 筑波大学体育系、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 東京都健康長寿医療センター研究所)

15:36 ~ 15:51

[生涯スポーツ-C-02] 我が国における大学スポーツ環境のマネジメントに関する研究（経）

体育会運動部及びサークルについて

*中路 恭平[1] (1. 南山大学)

15:52 ~ 16:07

[生涯スポーツ-C-03] 運動生活の再形成過程に関する研究（経）

スポーツ環境の変化に着目して

*奥田 直希[1]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

16:08 ~ 16:23

[生涯スポーツ-C-04] 20代から50代のビジネスパーソンのスポーツ実施状況（政,社）

スポーツライフデータ1998と2018からみる特徴と変化

*大勝 志津穂[1] (1. 愛知東邦大学)

16:24 ~ 16:39

[生涯スポーツ-C-05] 発散型の運動プログラム（フリーダムコラボレーションダンス：FCD）における運動継続率向上について（社,感性コミュニケーション）

*太刀山 美樹[1]、松﨑 守利[2] (1. 株式会社MIKI・ファニット、2. 下関市立大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

15:20 ~ 16:39 | 第7会場 2号館1階12教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）

15:20 ~ 15:35

[生涯スポーツ-C-06] スポーツウエルネス吹矢を実施している高齢者の心理的効果について（心）

*高山 昌子[1]、土屋 裕睦[2] (1. 大阪国際大学、2. 大阪体育大学)

15:36 ~ 15:51

[生涯スポーツ-C-07] 『笑うスポーツ』によるスポーツの楽しさを伝える取り組み（社）

産官学連携したスポーツイベントの開催への取り組みとその課題

*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

15:52 ~ 16:07

[生涯スポーツ-C-08] 「する」「みる」「ささえる」スポーツの構造化（政,社）

*高峰 修[1] (1. 明治大学)

16:08 ~ 16:23

[生涯スポーツ-C-09] スポーツ・ボランティア研究における〈支援〉の再考（ア,社）

*植田 俊[1]、山崎 貴史[2] (1. 東海大学、2. 北海道大学)

16:24 ~ 16:39

[生涯スポーツ-C-10] 東京2020オリンピックはスポーツ・運動に興味・関心が無い者にスポーツ・運動に対する興味関心を持たせ、運動の実践に寄与したか（介）

*片山 靖富[1]、若葉 京良[2] (1. 皇學館大学、2. 十文字学園女子大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

15:30 ~ 16:33 | 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）

15:30 ~ 15:45

[スポーツ文化-C-01] 動きの質の違いを共有し認め合うダンス発表会の意義に関する研究（教）

東京都における高等学校ダンス部のオンライン発表会の実践を通して

*中村 なおみ[1]、渡辺 律子[2]、笠井 里津子[3]、布施 典子[4] (1. 東海大学、2. 文教大学、3. 日本体育大学、4. 上野学園中学高等学校)

15:46 ~ 16:01

[スポーツ文化-C-02] 国際ストーク・マンデビル競技大会の表記に関する研究（ア）

1964年東京大会から1968年テルアビブ大会までの新聞記事に着目して

*阿部 崇[1]、澤江 幸則[2] (1. 東京家政大学、2. 筑波大学)

16:02 ~ 16:17

[スポーツ文化-C-03] 大学生アスリートを対象とするアンチ・ドーピング教育に向けた倫理・道徳教育とその限界（哲）

*深澤 浩洋[1] (1. 筑波大学)

16:18 ~ 16:33

[スポーツ文化-C-04] 東京2020ホストタウン事業における国際交流と地域活性化に関する事例研究（教）

山形県村山市とブルガリア新体操チームの交流

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

15:30 ~ 16:33 | 第10会場 2号館4階45教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-17] 幼児期における体力と非認知機能の関連（測）

*杉山 莉聖[1]、大坪 健太[2,3]、小椋 優作[4]、春日 晃章[5] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 中部学院大学短期大学部、5. 岐阜大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-18] 異なる年齢区分データを用いたBTT法による身長発育急増年齢予測値の妥当性の検証（発）

*広瀬 統一[1]、岡部 文武[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-19] ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量の観点から

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

16:18 ~ 16:33

[学校保健体育-C-20] 幼児の加速度計評価による座位行動と身体活動の置き換えと運動能力の関連（発,生）

Isotemporal Substitution モデルによる検討

*米野 吉則[1,2]、朽木 勤[1]、町田 修一[2] (1. 兵庫大学、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

15:30 ~ 16:17 | 第11会場 2号館4階46教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：柏木 悠（専修大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-21] 小学生の開脚跳び動作の熟達度を評価する簡易版尺度の作成（教）

熟達度の変容からみた運動指導プログラムの効果検証への活用

*佐野 孝[1]、保田 和奏[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[4] (1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 中京大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-22] 小学生におけるマット運動前転動作の観察的運動動作の因子構造と運動プログラムによる動作の改善（方）

*保田 和奏[1]、國土 将平[2]、佐野 孝[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[4] (1. 神戸大学大学院、2. 中京大学、3. 畿央大学、4. 大阪国際大学)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-23] マット運動における後転の目線に関する研究（方）

首の痛みや動感との関連

*長谷川 晃一[1]、周東 和好[1] (1. 上越教育大学大学院　芸術・体育教育学系)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

15:30 ~ 16:33 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-13] 体育実技と感染症の学習を関連づけた実践研究（教）

新型コロナウイルス感染症対策に注目して

*髙田 佳孝[1,2]、神谷 拓[3] (1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学大学院、3. 関西大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-14] 技能の主観的な振り返りを核にしたOPPシートが児童の認識に与える影響（教）

小学校6年生のハンドボール授業における実践に着目して

*三本 雄樹[1]、大庭 昌昭[2] (1. 新潟市立小針小学校、2. 新潟大学人文社会科学系)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-15] 体育における家庭でのポートフォリオ検討会の効果に関する研究（教）

*石井 幸司[1,2]、高木 宏[2]、鈴木 直樹[3] (1. 宇都宮大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

16:18 ~ 16:33

[学校保健体育-C-16] 小学校における放課後運動プログラムの構築・実施とその有効性ならびに課題（教,測,発）

*國土 将平[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[2]、高見 和至[4]、佐野 孝[4]、保田 和奏[4] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 神戸大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

15:30 ~ 16:33 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

15:30 ~ 15:45

[健康福祉-C-05] 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下における生活習慣及び健康状態に関する研究（介）

M県S町のスポーツ庁事業参加者の事例

*田中 亨[1]、橋本 実[1]、小池 和幸[1] (1. 仙台大学)

15:46 ~ 16:01

[健康福祉-C-06] 遠隔健康支援のためのダンスプログラムの開発と効果測定（介）

*河野 喬[1]、森木 吾郎[1]、房野 真也[1]、高田 康史[1]、相川 貴裕[1]、加地 信幸[1] (1. 広島文化学園大学)

16:02 ~ 16:17

[健康福祉-C-07] 吉中式マルチ音楽体操の実践（介）

高齢期の運動を長続きさせる手段と効果

*吉中 康子[1] (1. 京都先端科学大学)

16:18 ~ 16:33

[健康福祉-C-08] 精神科リハビリテーションにおける歩行動作改善のための運動プログラムの検討（介）

スクワット動作とジョギング動作を中心としたダンス・プログラムの効果比較

*中村 恭子[1]、鈴木 宏哉[1] (1. 順天堂大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

15:30 ~ 16:33 | 第2会場 3号館4階401教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

15:30 ~ 15:45

[競技スポーツ-C-05] 北海道マラソンにおけるレース終盤のペース低下要因の走力別検討（生）

*井上 恒志郎[1]、山口 明彦[1]、福家 健宗[1] (1. 北海道医療大学全学教育推進センター)

15:46 ~ 16:01

[競技スポーツ-C-06] 近年の段違い平行棒の傾向と今後の展望（方）

*村山 大輔[1] (1. 京都先端科学大学)

16:02 ~ 16:17

[競技スポーツ-C-07] 平均台の技術開発に関する発生運動学的研究（方）

跳躍技群の始原論的構造分析

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

16:18 ~ 16:33

[競技スポーツ-C-08] 1924年パリ五輪に向かう日本選手団一行の船上でのトレーニングに関する一考察（人,史）

野口源三郎の著作を手掛かりとして

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

15:30 ~ 16:33 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）

15:30 ~ 15:45

[競技スポーツ-C-09] ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する個人戦術力の研究（スポーツ運動学）

吉本 遼[1]、曽根 純也[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

15:46 ~ 16:01

[競技スポーツ-C-10] 国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手におけるグループ戦術の実践知に関する事例研究（方）

ピックプレイに着目して

*松本 沙羅[1]、會田 宏[2] (1. 筑波大学大学院コーチング学学位プログラム、2. 筑波大学)

16:02 ~ 16:17

[競技スポーツ-C-11] 日本代表男子および女子水球選手の最大牽引力およびパワーの比較と特徴について（方,バ,生）

電磁ブレーキ式エルゴメータの活用

*若吉 浩二[1]、榎本 至[2]、庭田 建[3] (1. 大阪経済大学、2. 鎌倉女子大学、3. （株）OCL)

16:18 ~ 16:33

[競技スポーツ-C-12] バスケットボールの速攻時の状況認知に関する基礎的知識の因子構造（方）

*八板 昭仁、青柳 領[1]、倉石 平[2]、野寺 和彦[3]、長嶺 健[1]、大山 泰史[4] (1. 福岡大学、2. 早稲田大学、3. 八戸学院大学、4. 佐世保工業高等専門学校)

各種会議・ミーティング

12:40 ~ 13:40 | 第9会場 2号館2階22教室

地域協力学会連絡会議

ランチョンセミナー

12:40 ~ 13:40 | 第6会場 2号館1階11教室

ランチョンセミナー⑤／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

司会：菅野 昌明（JATI副理事長、Ph.D. JATI-SATI）

[ランチョン5-1] JATI（日本トレーニング指導者協会）の活動とトレーニング指導の実際

*有賀 雅史[1,2,3,4] (1. 帝京科学大学医療科学部教授、2. JATI理事長代理、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

[ランチョン5-2] トップアスリートに対するジャンプパフォーマンス改善のためのトレーニング事例

*菅野 昌明[1,2,3,4] (1. 豊田合成Blue Falconストレングス＆コンディショニングコーチ、2. JATI副理事長、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

ランチョンセミナー

12:40 ~ 13:40 | 第7会場 2号館1階12教室

ランチョンセミナー⑥／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）③

司会：田村 好史（順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター）

[ランチョン6-1] やせた若い女性の「食べない・運動しない」に潜む健康リスクとその課題解決へむけて

*田村 好史[1]、室伏 由佳[2]、門屋 悠香[2]、山口 紀子[3]、豊島 晴子[3] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 花王株式会社研究戦略企画)

ランチョンセミナー

12:40 ~ 13:40 | 第5会場 2号館4階4E教室

ランチョンセミナー④／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）②

司会：青木 和浩（順天堂大学スポーツ健康科学部）、窪田 敦之（順天堂大学 スポーツ健康科学部）

[ランチョン4-1] プロ野球と大学の連携が拓くスポーツ•イノベーション

*久村 浩[1]、佐々木 順一[2]、青木 和浩[3]、窪田 敦之[3]、 (1. 読売巨人軍編成本部フィジカルコーディネーター、2. 千葉ロッテマリーンズメディカルディレクター、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、)

ランチョンセミナー

12:40 ~ 13:40 | 第4会場 3号館8階801教室

ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

[ランチョン3-1] モーションキャプチャーを指導に活かす

*阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

展示

9:00 ~ 17:00 | 書籍展示会場 3号館1階

書籍展示

展示

9:00 ~ 17:00 | 企業展示会場 第一体育館

企業展示

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）
指定討論者：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互恵的関係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1] 運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

[健康福祉-SB-2] 認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋[1] (1. 神戸大学大学院保健学研究科)

[健康福祉-SB-3] 心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏[1] (1. 武庫川女子大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）
指定討論者：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)
慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互恵的関係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1]運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？

*辻 大士[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞
博士（体育科学）　筑波大学大学院体育科学専攻を修了後、ユヴァスキュラ大学ジェロントロジーリサーチセンターポスドク研究員、千葉大学予防医学センター特任助教を経て現職。主に高齢者を対象とした運動・スポーツ疫学、公衆衛生学を専門とする。本学会では「測定評価」「介護予防･健康づくり」専門領域に所属。

高齢者を対象とした多くの観察研究や介入研究の知見が蓄積され、適度な身体活動の実践は認知機能を良好に保ち、認知症予防に寄与する可能性が示されてきた。さらに、運動・スポーツは一人でおこなうよりも、グループに参加して誰かと一緒におこなうことで、得られる健康効果がさらに大きくなることも注目されている。これらの報告は個人のライフスタイルと認知機能の関連に着目したものであるが、近年、高齢者が暮らす地域環境が、認知症リスクを増減させる可能性も見えてきた。その環境要因の一つとして「運動・スポーツの盛んさ」があることを、演者らは全国7道県・16市町村に在住する約4万人の高齢者を6年間追跡したコホート研究により明らかにした。地域（≒学区）の中で、10人に1人の高齢者が運動・スポーツのグループに新たに参加するようになった（参加者割合が10%ポイント高くなった）と仮定した場合に、その地域に暮らす全ての高齢者の認知症リスクが（その人自身の参加・不参加を問わず）8%低くなることを突き止めた。なぜこのようなことが起こりうるのか、運動・スポーツの振興が認知機能の維持・向上に果たす新たな可能性について紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）
指定討論者：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)
慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互恵的関係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-2]認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題

*古和 久朋[1] (1. 神戸大学大学院保健学研究科)
＜演者略歴＞
1995年東京大学医学部医学科卒業、1999年日本神経学会専門医、2004 年博士 (医学) 取得。2005 年マサチューセッツ総合病院に留学。帰国後、東大神経内科特任助教を経て 2010 年より神戸大学神経内科講師、2012年同神経内科准教授、2017年同保健学研究科教授。2021年4月より認知症予防推進センター長を兼務。

認知症高齢者数が600万人を超え、2025年には高齢者の約5人に一人が認知症になると見込まれておりこの対策は喫緊の課題である。認知症の主たる原因疾患であるアルツハイマー病の特徴的な病理構造物である老人斑を標的とした根本治療薬開発が進行中で、そのうちの一つが2021年6月に米国で条件付きながら認可された。しかしながらその効果は症状の進行を2割前後遅らせる程度であり、失われた認知機能を元に戻すことはできず、人々の期待に十分応えたとは言えない。未発症の段階での薬物投与が検討されているが副作用の可能性もあり、非薬物介入による予防への関心が高まっている。実際、フィンランドの高齢者を対象とした多因子介入ランダム化比較試験（ FINGER研究）により食事、運動、脳トレ、血管因子モニターなどの総合的な介入により認知機能の悪化を予防しうることが示された。介入因子は人種や文化によりその内容も異なることから、我が国でも J-MINT研究として実証研究が進行中である。こうした介入研究の成果を、老人斑の蓄積予防や減少につながる機序とともに紹介するとともに、こうした介入の社会実装を目指す際の課題や解決法についても議論したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ、認知から運動へ

コーディネーター：木伏 紅緒（神戸大学）、細谷 洋子（東洋大学）
指定討論者：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第8会場 (2号館2階21教室)
慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。本年度は、運動機能と認知機能には互恵的関係（reciprocity）があるため、単に運動から認知への波及を考えるだけでなく、認知から運動への波及を合わせて考える必要があることを、主たるテーマとする。辻氏には、主に高齢者を対象とした大規模コホート研究から得られた知見を基に、個人と地域環境のマルチレベルな視点から、運動・スポーツと認知機能・認知症との関連についての話題提供を受ける。古和氏には、認知症ならびにその予防に関する最新の知見や取組みを、医師の視点からご紹介いただく。田中氏には、心理的ストレスが運動にどう影響するかについて、最新の知見や実践場面への応用をご紹介いただく。

[健康福祉-SB-3]心理的ストレス状況下での認知と運動

*田中 美吏[1] (1. 武庫川女子大学)

＜演者略歴＞
博士（学術）。広島大学大学院生物圏科学研究科を修了後、帝塚山大学経済学部講師、福井大学教育地域科学部講師を経て現職。本学会では「体育心理」専門領域に所属。日本スポーツ心理学会認定上級メンタルトレーニング指導士。

心理的なストレス状況下での運動には、注意や思考などの認知が介在することについて、豊富な理論やエビデンスが存在する。注意に関しては、注意狭隘、注意散漫、意識的処理が関与する。思考に関しては、「〜してはいけない」と考えると矛盾にもその運動をしてしまう皮肉課程や、ステレオタイプ、苦手意識などが挙げられる。演者は、これまでに、上記の認知的要因を包含しながら、心理的ストレス（プレッシャー）状況下での運動やパフォーマンスを調べる研究に取り組んできた。本話題提供では、ストレス状況下での認知と運動に関する諸理論を紹介したうえで、演者の研究成果や関連研究を交えながら、ストレス状況下での運動に対する注意や思考の影響について理解を促進することを狙いとする。ストレス状況下での運動への対処を考える際には、これらの認知的要因を考慮することの重要性について、本話題提供を通して議論されたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か ―身体・組織・支援の観点から―

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、髙尾 尚平（日本体育大学）
指定討論者：渡 正（順天堂大学）

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引きだすことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-1] 身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛[1] (1. 明星大学)

[スポーツ文化-SB-2] パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一[1] (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

[スポーツ文化-SB-3] パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子[1] (1. 国立スポーツ科学センター)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か ー身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、髙尾 尚平（日本体育大学）
指定討論者：渡 正（順天堂大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引きだすことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-1]身体論から捉える「多様性と調和」

*田中 愛[1] (1. 明星大学)

＜演者略歴＞
2008年東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士（教育学）。武蔵大学人文学部准教授を経て現職。「実践からの体育・スポーツ哲学」を研究の目標としつつ、「身体教育とは何か？」を問う中で出会ったシッティングバレーボール（パラバレーボール）の練習を継続中。

本発表では、身体論の立場から、スポーツ実践における／をとおした「多様性と調和」の内実を探りたい。その際、「における」と「をとおした」がどのようにつながり得るかについても検討したい。発表者がパラバレーを体験した際に受けたカルチャーショックは、「多様性」とはどういうことか考える契機となった。同時にその態度では、「珍しさ」や、知らなかったことへの「驚き」が先行してしまい、実践の中で何が生じているかを捉え損ねていた。しかし、練習や試合を通してパラバレーに身を投じていく中で、多様性という「概念」は「どうしようもない〈できなさ〉を受け止める」という具体的行為の中の実感に変わっていった。
このような立場から改めて「多様性」という言葉について考えてみれば、当然のことながら違和感が生じる。本発表では、この違和感の源泉を、「多様性の内と外」および「西洋医学的身体観」に立ち止まることによって考えたい。このことは、社会やスポーツにおける「普通」の成り立ちとその強固さに立ち止まることでもある。そうすることによって、「多様性」という言葉が一人歩きすることについても問題提起したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か ー身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、髙尾 尚平（日本体育大学）
指定討論者：渡 正（順天堂大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引きだすことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-2]パラリンピックを通して考える共生社会

*河合 純一[1] (1. 公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)

＜演者略歴＞
1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科修了。パラリンピック6大会に出場、金5を含む全21個のメダルを獲得（日本人最多）。2016年、パラリンピック殿堂入り(日本人初)。筑波大学、上智大学、慶応義塾大学非常勤講師。東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員。東京2020パラリンピック競技大会/北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団団長。

パラリンピックは世界最高峰のパラアスリート(障害のあるアスリート)の競技会であり、ハイパフォーマンススポーツとしての地位を確立してきた。そこで、東京2020パラリンピック競技大会、北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団の活躍を振り返りつつ、日本社会に及ぼした影響を考察する。また、東京2020大会の基本コンセプトの１つであった「多様性と調和」を実現してきた事例を大会開催決定後からの動きを中心に紹介する。中でもパラリンピック教材『I’ mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』、東京2020アクセシビリティガイドラインの作成、活用事例をパラリンピックの歴史や意義に触れつつ説明する。

その上でＤ＆Ｉ「ダイバーシティ(多様性)とインクルージョン(包摂性)」の違いを説明し、共生社会(インクルーシブな社会)を実現するための段階(ステップ)について検討する。

最後にパラリンピックは「人間の可能性の祭典」であると伝え続けてきた立場から、共生社会のイメージを共有し、ＪＰＳＡ2030年ビジョンにある「活力ある共生社会の実現」の可能性を示す。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」はいかにして可能か ー身体・組織・支援の観点からー

コーディネーター：加藤 えみか（京都産業大学）、髙尾 尚平（日本体育大学）
指定討論者：渡 正（順天堂大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第10会場 (2号館4階45教室)

「多様性と調和」。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のコンセプトの1つである。このコンセプトが象徴するように、今日では、「多様性と調和」の推進がスポーツに求められている。こうした理念からは、少なくとも、2つの課題を引きだすことができる。1つは、スポーツにおける「多様性と調和」であり、いま1つは、スポーツをとおした「多様性と調和」である。両者は、ともに、喫緊の実践的・社会的課題であるといえる。しかし、立ち止まって考えてみると、スポーツと「多様性と調和」の結びつきは自明ではない。スポーツは、むしろ、多様性を排除する機構にもなりえてしまうからである。スポーツは、「多様性と調和」が期待される文化である一方で、ジェンダーや身体的特性などに伴う分断を創出する装置にもなりうる。こうした両義性を引き受けたうえで、われわれはなおも、スポーツに「多様性と調和」を期することはできるのだろうか。そもそも、「多様性と調和」とはどのような事態を指すのだろうか。本企画では、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをとおした「多様性と調和」の可能性について議論する。

[スポーツ文化-SB-3]パラリンピック競技選手を対象とした体力測定プロトコルの検討

*袴田 智子[1] (1. 国立スポーツ科学センター)

＜演者略歴＞

独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター 国立スポーツ科学センター スポーツ科学・研究部研究員。日本体育大学大学院博士後期課程修了、日本体育大学スポーツ・トレーニングセンター助教を経て現職。主に形態・身体組成に関する研究に従事。所属学会：日本バイオメカニクス学会、日本体育学会、日本体力医学会、国際バイオメカニクス学会、アメリカスポーツ医学会など。

国立スポーツ科学センター（以下、 JISS）では、2001年よりオリンピックアスリートを対象に体力測定を行ってきたが、2015年からは、パラリンピックアスリートについても、オリンピックアスリートと同様に体力測定を実施している。競技者を対象とした体力測定は、主に、選手自身のコンディション把握、トレーニング効果を確認する目的で実施される。測定項目や測定プロトコルについては、類似したオリンピック競技の体力測定項目を参考にし、競技種目や選手に応じて調整している。現在、 JISSでは、夏季・冬季の競技を合わせて8競技12種別、年間延べ100名程度のパラリンピックアスリートの測定を行っている。障がい種別では、肢体不自由（欠損、四肢麻痺、脊髄損傷）、視覚障がい、知的障がい等に対応している。体力測定を実施する中で、パラリンピックアスリート特有の課題も浮き彫りになった。本シンポジウムでは、これまで我々が体力測定を通して得られた、課題や対応策についてご紹介するとともに、競技力向上を目的とした医・科学サポートにおける多様性と調和について、議論を深めていきたいと思う。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ―「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして―

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

　このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-1] 「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹[1] (1. スポーツ庁政策課)

[学校保健体育-SB-2] 「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久[1] (1. 横浜国立大学)

[学校保健体育-SB-3] 「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一[1] (1. 東京国際大学)

[学校保健体育-SB-4] 「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀[1] (1. 東広島市教育委員会)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ―「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして―

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-1]「これからの豊かなスポーツライフ」に求められること

*塩見 英樹[1] (1. スポーツ庁政策課)

＜演者略歴＞

京都市立小学校教員、副教頭を経た後、京都市教育委員会で小学校体育科（運動領域）の主任指導主事。平成３１年度より、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、スポーツ庁政策課教科調査官。

令和３年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、体力合計点は、令和元年度調査に続いて低下する結果となった。質問紙調査では、「コロナの影響を受けて運動やスポーツをする時間が減少した」と回答する児童生徒が約４割にのぼった。一方で、運動やスポーツをする時間が増加したと回答した児童生徒は約３割であり、その特徴としては、運動やスポーツの大切さを認識しており、体力が高い傾向が認められた。このことから、学校や家庭において日頃から児童生徒に、運動やスポーツをすることの大切さを伝えるとともに、運動の楽しさを実感し、工夫しながら運動をする習慣の定着に努めることの大切さがうかがわれた。

第３期スポーツ基本計画においても、体育・保健体育の授業等を通じて、運動好きな子供や日常から運動に親しむ子供を増加させ、生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力の育成を図ることが示されている。

本シンポジウムでは、学習指導要領の目標や内容等を踏まえ、児童生徒が飽くまで、運動やスポーツを楽しみ喜びを感じながら取り組むことができるようにする体育授業の在り方についてお伝えしたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

　このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-2]「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフ

*梅澤 秋久[1] (1. 横浜国立大学)

＜演者略歴＞

1971年生まれ。横浜国立大学教育学部教授 博士（教育学）。神奈川県公立小学校教員を15年勤めた後に2009年に帝京大学文学部教育学科専任講師として着任し2011年より准教授。2013年横浜国立大学教育人間科学部に准教授として着任し、2017年より現職。

気候変動やコロナパンデミック、紛争等の世界規模のアポリアの連続は、刹那的で利己的な価値観の終焉を指南する。持続可能性が希求される中、 SDGsの第３目標は「 Good Health and Well-being（すべての人に健康と福祉を）」であり、第4目標は「 Quality Education（質の高い教育を）」である。いずれも本学会の貢献が期待される目標であるが、その共通点は「全ての人」、「包摂」、「公正」「 Well-being」等であろう。

本シンポジウムでは、「ともに」学び育つ対象を全ての多様性とし、障害の有無、ジェンダー、運動格差、年齢差等の格差を包摂する「共生体育」の在り方について言及する。「今だけ、ここだけ、私だけ」という快楽主義（ヘドニア）的な思想から、「今–ここ–わたしたち」の没頭（ Engagement）を通じた関係性（ Relationship）、意味（ Meaning）、達成（ Accomplishment）という持続的 Well-beingをつくりあう体育において検討していく。そのような体育を探究するためには教師集団も同僚性を基盤とし「ともに」学び育つ必要があると考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ー「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにしてー

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-3]「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点

*今関 豊一[1] (1. 東京国際大学)

＜演者略歴＞

1955年生まれ　東京国際大学人間社会学部教授 博士（スポーツ健康科学）、千葉県立高等学校教諭、文部科学省教科調査官及び国立教育政策研究所教育課程調査官（体育担当、保健担当）、順天堂大学スポーツ健康科学部准教授、国立教育政策研究所基礎研究部部長、日本体育大学大学院教育学研究科及び児童スポーツ教育学部教授を経て2022年より現職。

「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」とは、健康になるための個人の対処で自分自身に向けられる健康行動として、また個人が集まって複数以上で対処する健康行動としてとらえることができる。それらは、個人、お互いの健康が「低下を抑制する」「維持する」「高まる」ように相互作用が行われるであろう。

「自分の健康」は、「身体的」「精神的」「社会的（対人的）」で、また「みんなの健康」は、「自分の健康」に加えて「社会環境（制度を含む）」でとらえることができよう。

「より良質な学習」は「Quality of Life」の一部としてとらえる。学習での具体は、課題追究、話し合い、お互いの意見や考えの共有、といった場面で質的に充実することであろう。学習の成立は、相手の立ち位置になって「自分のことだ」と置き換えること、自分の考えが自覚できる（見える）ことが条件になってくるのではないか。学習過程は、「『個々の追究１』ー『活動（話し合い）１』ー『共有』ー『活動（話し合い）２』ー『振り返り（個々の追究２）』」の繰り返しが考えられる。

このような取り組みが良質な保健体育の授業につながり、豊かなスポーツライフの実現に向かうことになるのではないか。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業とその学習内容を考える ―「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして―

コーディネーター：岩田 英樹（金沢大学）、伊佐野 龍司（日本大学）

2022年9月1日(木) 10:30 ～ 12:20 第1会場 (3号館3階301教室)

第71回大会では、コロナ禍を経験した私たちにとって、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確かめることができた。これからの体育・保健体育を見通そうとした時、私たちは子どもたちに授業を通して何を伝えていくべきなのだろうか。学校体育・保健体育は「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めることとされているが、子どもたちに伝えるべき／子どもたちが身に付けるべきものとして、何を考えていくべきなのだろうか。

このような問題意識から本シンポジウムでは、これからの体育・保健体育で扱うべき学習指導内容について多角的に議論し、今後の教育課程の方向性に対する示唆を得ることを目的とした。議論の視点として、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について検討するとともに、近年の社会的・教育的動向を踏まえて、「ともに」学ぶという視点、「『自分からみんなへ』という視点の移行」、「学校と地域」の連携によるより良質な授業実践といったことを取り上げていきたい。

[学校保健体育-SB-4]「学校と地域の連携」という視点からみた豊かなスポーツライフ

*清田 美紀[1] (1. 東広島市教育委員会)

＜演者略歴＞

広島県公立小学校教員、広島県西部教育事務所教育指導課指導主事、広島県教育委員会スポーツ振興課企画調整担当指導主事、学校体育係指導主事を経て、2016年より現職。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、これまで経験したことのない制限の中での教育活動が余儀なくされている。体育・保健体育授業、運動・スポーツに関する活動については、他の教育活動と比較して配慮すべき事項が多く、子供たちが伸び伸びと身体活動を通して学び合う場や時間を確保しにくい状況がある。

こうした状況の中で、子供たちの学びを保障していくためには、学校を取り巻く地域の多様な人材が教育活動に参画していく環境を創ることで、様々な状況や困難な課題にも柔軟に対応することが可能となっていくのではないだろうか。多様な背景を有する人材が、各々の専門性に応じて、体育・保健体育授業や、運動・スポーツに関わる活動に参画することで、子供たちは、新たな視点で運動やスポーツとの多様な関わり方について考え、運動やスポーツの楽しさや喜びを味わうことにつながっていくのではないだろうか。

これからの社会を豊かに生きていけるよう、子供たちを運動・スポーツ・健康の側面から育てていくため、今できること、そして今後の在り方について、学校と地域の連携の視点から、いくつかの事例を交えて考えてみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第2会場 3号館4階401教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツ―政策・産業・そして遊び―

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福――体育・スポーツにおけるWell-Being――の所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-1] 遊びの精神から見た子どものWell-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示[1] (1. 東京学芸大学)

[生涯スポーツ-SB-2] 子どものスポーツにおける格差とWell-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子[1] (1. 笹川スポーツ財団)

[生涯スポーツ-SB-3] 幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期のWell-Beingの保障のために

*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー一体育・スポーツにおけるWell-Being一一の所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-1]遊びの精神から見た子どもの Well-Beingの実現とスポーツ

*松田 恵示[1] (1. 東京学芸大学)

＜演者略歴＞

大手前女子大学文学部、岡山大学教育学部を経て、東京学芸大学。専門は、スポーツ社会学、遊戯論。体育科教育、教員養成、教育政策の領域においても、実践的な研究を行っている。

スポーツを遊びとして遊ぶことが、子どもたちの Well-Beingの実現には大切なのではないかと思う。現在、日本の学習指導要領に大きな影響を与えている“ OECD Future of Education and Skills 2030 project”では、 Well-Beingの実現こそが、これからの教育の目標であることを強調している。 Well-Beingの実現は、いわば変化の激しい社会の中にあって、「解のない答え」を自らが他者とともに協働・共創していくもの(ラーニング・コンパスの考え方)でもある。ここで遊びは、それ自体を目的として行う活動である。だからこそ、その活動には「解」などない。しかし、それは一定の創造的な結果をもたらすことが常である。また、遊びないしその精神は「リバーシブル(Reversible)」である。勝つと思うと負けたり、本気と思うと嘘ん気だったり、くるくるとひっくり返る。それは潜在的な「動性」に基礎付けられている。でもだからこそ、面白いし、ここでもまた創造的である。「遊び」を補助線として、 Well-Beingの実現に資するスポーツのあり方についていくつかの観点から考えてみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー一体育・スポーツにおけるWell-Being一一の所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-2]子どものスポーツにおける格差と Well-Being

研究上の課題を中心に

*宮本 幸子[1] (1. 笹川スポーツ財団)

＜演者略歴＞

株式会社ベネッセコーポレーション入社後、ベネッセ教育総合研究所、国内教育事業市場リサーチ等を経て、2016年より笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所に所属。「スポーツライフ・データ」、保護者や小学校の調査研究等を担当。

2000年代から注目された「格差論」は子どもの研究において積極的に取り入れられ、今や格差や貧困といった論点は、多くの領域で不可欠のものとなっている。家庭環境がもたらす子どもの不利を社会や政策によって解決するという視点は、子どもの Well-Beingを検討する上でも非常に重要である。

スポーツの研究においては、各領域で SES（ Socioeconomic status）を変数として用いた分析はみられるものの、子どもの格差としてまとまった論考は少ない状況が続いていた。そのような中で、清水ら（2021）が『子どものスポーツ格差一体力二極化の原因を問う』において、社会的属性や子どものスポーツ、体力・運動能力等の変数を網羅的に分析し、格差研究のパラダイム確立に向けて先導的な役割を果たした。とはいえこのような研究は緒についたばかりで、残された課題も多く存在する。

本発表では「スポーツライフ・データ」等、笹川スポーツ財団が実施した子どもの調査研究の結果を紹介するとともに、子どものスポーツにおける格差研究の今後の課題を示し、格差と Well-Beingを考える上での論点を提示して議論につなげたいと考えている。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／子どもたちのWell-Beingとスポーツー政策・産業・そして遊びー

コーディネーター：林 洋輔（大阪教育大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第2会場 (3号館4階401教室)

新型コロナウイルスの終息に向けた模索は体育・スポーツ界でも今なお続けられている。このコロナ禍において、昨年の生涯スポーツ部会の本課題グループでは産業界の興隆とスポーツ、さらに身体運動する人間の幸福ー一体育・スポーツにおけるWell-Being一一の所在をめぐって討議が行われた。その結果、スポーツ文化の未来を担う子どもたちのスポーツ環境と教育体制、さらにコロナ対策をはじめ子どもたちを取り巻く困難な状況において子どもたちのスポーツ実践をどのように保証し、さらにWell-Beingの実現に向けた指針をいかに定めればよいかとの問いが立ち現れた。

本シンポジウムでは、昨年度のシンポジウムにて遺された課題を踏まえて子どもたちとスポーツ、そして遊びの関係をめぐる歴史的変遷と総説、またいわゆる「スポーツ格差」など子どもたちのスポーツ環境と実践に係る諸問題を経営・政策の視点より捉えた分析、さらにコロナ禍を生きる子どもたちが直面するスポーツと遊びの「現場」から見えてきた課題と展望について議論が交わされる。

スポーツを享受するうえでの子どもたちのスポーツ実践と環境、そして教育をめぐる体制作りと指針の策定はいま不可欠な検討課題といえよう。

[生涯スポーツ-SB-3]幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案

幼少期の Well-Beingの保障のために

*春日 晃章[1] (1. 岐阜大学)

＜演者略歴＞

金沢大学大学院教育学研究科修了後、岐阜聖徳学園大学短期大学部を経て、2007年より岐阜大学教育学部に勤務。博士（医学）。専門は発育発達学、測定評価学。学校法人春日学園の理事長も務め、2つの幼稚園と1つの保育園の経営と保育・運動プログラムの開発や検証にも関わっている。

幼少期の子ども達にとってもっとも保障されなければいけないのは生まれながらに持つ動きへの欲求・本能を満たす身体活動時間の確保であり、幼少期の Well-Beingの実現には不可欠である。この時間は単に体を動かすだけでなく、様々な大人や同年代の子ども達と“楽しく関わりながら夢中になって身体活動に勤しむ”ことが、子ども自身の主体的な取り組みに繋げるためにも大切なのだ。しかし、今の我が国の保育施設や小学校では、本当にその時間を確保する必要性と重要性を感じているのか疑問が残る。ケンカ、ケガ、熱中症などを恐れて身体活動の時間が年々縮小されてきてはいないか？単に放し飼いのように遊ばせるのではなく、興味や関心を引き出すような運動遊びのプログラム提供がされているか？さらに、幼児期から身体的発達量の二極化が出現することも確認されており、運動への興味関心や運動有能感の格差も実はこの時期から既に現れ始めている。となると、生涯スポーツを通した Well-Beingの実現のためには幼児期から二極化を防ぎ、全体の底上げの施策が必要となる。今回、発表者が多様な側面から取り組んでいる施策とその効果を合わせて紹介し、幼少児にとっての真の Well-Beingとはについて論究したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 10:30 ~ 12:20 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかいないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-1] 女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*來田 享子[1] (1. 中京大学)

[競技スポーツ-SB-2] 女性コーチ育成の現状

*三倉 茜[1] (1. 金沢医科大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子[1] (1. 株式会社Bamboo8)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかいないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-1]女性コーチの活躍を支える組織文化をめざして

スポーツにおける女性を取り巻く社会的・文化的な背景

*來田 享子[1] (1. 中京大学)

＜演者略歴＞

専門はオリンピック史、スポーツとジェンダー。博士（体育学）。日本スポーツ・体育・健康学会副会長、日本スポーツとジェンダー学会会長

身体が関わる文化であるスポーツにおいては、　医療などの分野と同様に、性差に対する合理的配慮が求められる。また、競技性の高いスポーツにおいては、性別にカテゴリーを分けて競技することが公平性の担保のために必要であると考えられてきた。このような性別二元制が容認されやすい文化の中では、性にもとづくダブルスタンダードが意識されにくく、ジェンダーにもとづく差別や不平等の解消が遅れる傾向がある。これを象徴的に示すのが、スポーツ組織の役員やコーチにおける女性割合の低さである。歴史的には、100年前に設立された女性スポーツ組織がすでに解決を求めていた課題である。近年、ビジネスとしてもグローバル化するスポーツにおいては、喫緊の課題とされるようになっている。

　この根深い課題を解決するためには、1）スポーツ界全体における無意識のジェンダー・バイアスへの気づき、2）女性コーチの活躍を阻害しない活動環境を整えるための組織文化・組織のガバナンスの醸成、が不可欠だと考えられる。報告では、国際オリンピック委員会が進めるジェンダー平等戦略等を紹介しながら、女性コーチの活躍を支える組織文化の醸成をめざし、前向きな議論を深めたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）
2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)
本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかいないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-2]女性コーチ育成の現状

*三倉 茜[1] (1. 金沢医科大学)
＜演者略歴＞
2018-2021：順天堂大学女性スポーツ研究センター RA
2021-現在：金沢医科大学 一般教育機構 体育学助教

日本において、女性コーチが少ないという問題が注目され始めたのはごく最近である。第2期スポーツ基本計画で初めて女性コーチに関する記述がなされ、日本のスポーツ政策として初めて女性コーチ育成が目指された。第3期スポーツ基本計画においても、「スポーツを通じた共生社会の実現」に関する項目の1つとして「スポーツを通じた女性の活躍促進」の内容が引き継がれており、女性コーチが少ない現状に言及がなされている。しかし第2期と同様、施策目標や具体的施策にて女性コーチ育成に関する具体的な記述はなされていない。また、女性コーチに関する国内の研究も限られており、女性コーチが直面する課題についての理解も未だ十分ではない。
そのような中、現在少しずつではあるがスポーツ庁や各競技団体において行われ始めている女性コーチ育成事業を紹介し、それぞれの特徴について考察していく。また、国内外で行われている研究にて明らかになっている女性コーチが直面する課題を参考にしながら、今後日本で行われるべき女性コーチ育成について考えていく。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／競技スポーツの女性コーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 10:30 〜 12:20 第3会場 (3号館4階402教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。このように、我が国のスポーツ実施者の量的なジェンダーバランスは一定程度取れているといえよう。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。モデル・コア・カリキュラムが完成し、日本スポーツ協会において新たなコーチ養成講習会がスタートした。しかし、受講生の割合は男性が圧倒的に高い。また、トップカテゴリーのコーチを務める女性コーチは数えるほどしかいないのが現状である。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、女性を取り巻く社会的・文化的な背景、現在のコーチ養成のシステム、トップカテゴリーにおける女性コーチの実際について把握したうえで、競技スポーツにおける女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論する。

[競技スポーツ-SB-3]日本代表選手から日本代表監督へ

女子サッカーの例

*高倉 麻子[1] (1. 株式会社Bamboo8)

＜演者略歴＞

・元サッカー日本女子代表選手（第１，２回女子W杯・アトランタ五輪出場）

・現サッカー指導者（2014U17W杯優勝・2016U20W杯3位・2016~2021なでしこJapan監督　2019W杯best１６　東京五輪best８）

日本の女子サッカーの競技環境は、近年、大きく変化している。2000年に約25000人だった競技人口は2020年に48000人を越えるなど、多くの女性が競技としてサッカーに従事するようになった。また、2020年には女子サッカーのプロリーグである WEリーグが開幕し、さらなる競技力の向上への貢献が期待されている。これらの顕著な環境変化の一方で、女性コーチは未だ少なく、約80,000人の JFA登録指導者のうち3%程度しかいない。特に、 WEリーグや代表チームを指揮するトップレベルの女性コーチは非常に限られている。このような背景において、本シンポジウムでは、自身の選手および指導者としてのキャリアの変遷や日本初の女性代表監督としてチームを指揮するに至った経緯を紹介する。また、女性指導者として活躍し続ける上での課題についても共有する。日本サッカー協会では女性対象の指導者講習会や、 Associate-Proライセンスと呼ばれる指導者養成コースを設立するなど、女性コーチを増やすための様々な取り組みを進めている。このような流れに加えて、本講演の内容が、より多くの女子サッカー選手やサッカーを愛する女性が、指導者としてのキャリアにチャレンジしやすい環境作りに役立つことを期待している。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その２）ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は３年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか，対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-1] 障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人[1] (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

[生涯スポーツ-SC-2] 元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香[1] (1. 株式会社BorderLeSS)

[生涯スポーツ-SC-3] みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士[1] (1. 仙台大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その２）ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は３年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか，対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-1]障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握

*太田 澄人[1] (1. 長野県障がい者福祉センターサンアップル)

＜演者略歴＞

長野県障がい者福祉センタースポーツ課係長。また、日本パラスポーツ協会技術委員会推進部会部会長、日本障がい者体育・スポーツ研究会理事を務める。

障がいのある方のスポーツの指導、指導者の育成を中心に、地域の障がい者スポーツ振興に取り組む。障がいのある方が身近な地域で日常的にスポーツ活動ができる環境づくりを目指し活動を行う。

2011年に「スポーツ基本法」が制定され、国の「スポーツ基本計画」にも障がい者スポーツの振興が具体的に記された。2020東京オリ・パラ大会、そして2022北京冬季オリ・パラ大会が開催されるまでの10年間を見ても、障がい者スポーツ（パラスポーツ）は、多くの国民に身近な存在となってきたと言える。しかし、スポーツを通した「共生社会」という視点から眺めた場合、障がい者が気軽にスポーツに参加できているかと言えば、同じ世代の障がいのない者と比べてその機会は少ないままである。スポーツ振興を進める中で、私たちの身近で障がいのある方の活動の場が増えているかを考えていく必要がある。そこでは①障がいを理解し、専門的に指導を行うスポーツ振興（競技力向上、発掘、リハビリ等）と、②障がい者を含めたスポーツとして地域の活動に障がい者が参加できるスポーツ振興（地域で行われている身近な活動への参加）の両方の振興と連携が必要であると思われる。スポーツを通して、様々な立場・背景・特性を有した人・組織が共に活動をすることには大きな価値が認められる。当日は障がいのある方がスポーツ活動に日常的に参加できる環境について議論したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その２）ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は３年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか，対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-2]元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握

*筒井 香[1] (1. 株式会社BorderLeSS)

＜演者略歴＞

（株）BorderLeSS代表取締役社長。スポーツ心理学研究で博士号（学術）取得。スポーツメンタルトレーニング指導士として、ジュニアからトップアスリートの思考と感情の整理・調節をサポート。また、スポーツ庁委託事業「スポーツキャリアサポート推進戦略」のプログラムを受講し、アスリートキャリアアドバイザーとしても活動を行う。

スポーツに幼い頃から触れ、多くの時間をスポーツ活動に投資したであろうトップアスリートは、引退を迎えたのち、いかにスポーツと関わりを持っているのか。引退後、自分自身の専門競技でコーチを目指す、または普及活動を行うといった形で、スポーツに携わり続けるケースもある。しかし、これらは自分自身がスポーツを継続するという生涯スポーツの観点で言えば、必ずしも該当しない。本シンポジウムでは、オリンピアンが自身の専門スポーツを引退後も愛好している割合が２割弱と、一般の方に比べて低いという笹川スポーツ財団の調査結果を示し、その要因の仮説として、競技引退したトップアスリートが競技から離れた事例（選手 A）を紹介する。選手 Aは、日本代表としての活動に誇りを持って競技生活を送ってきた背景があり、引退後は「これまでの競技レベルでなければ自分はやれない」という考えを示した。このようなアスリートを含む生涯スポーツ社会の実現のためには、競技引退時に、自身にとってのスポーツの意義や価値を再定義する必要があると考えられる。これをアスリートのキャリアに関する課題と捉え、当日はフロアの皆様と共に議論を深めたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その２）ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー

コーディネーター：上野 耕平（香川大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第6会場 (2号館1階11教室)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会の構築」を掲げ、生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築に向けて提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。なお本企画は３年計画で実施されており、初年度であった昨年度には運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性の運動・スポーツ参加の現状と課題についてそれぞれご説明頂きました。今年度はさらに視野を広げ、障がい者、元アスリートの運動・スポーツ参加の現状と課題のほか，対象を限定せず参加者みんなで楽しむ「ゆるスポーツ、ユニバーサルスポーツ」の展開について3名のシンポジストからご紹介頂き、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

[生涯スポーツ-SC-3]みんなのスポーツ参加の現状と問題把握

ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して

*仲野 隆士[1] (1. 仙台大学)

＜演者略歴＞

仙台大学体育学部体育学科教授。仙台大学体育学科長・副学長を歴任し、現在は日本レクリエーション協会理事、公認指導者養成課程認定校研究連絡会議幹事長、宮城県レクリエーション協会副会長、日本生涯スポーツ学会副会長、仙台市スポーツ推進審議会会長、スペシャルオリンピックス日本調査研究委員などを務める。

本発表では、多くの人々に認識されている「ニュースポーツ」、オリパラ教育の一環として紹介されている「ボッチャ」のような「ユニバーサルスポーツ」、さらには2015年に考案された「ゆるスポーツ」などに着目します。それらは「中心」に据えられる近代スポーツに対する「周辺」を構成するレジャースポーツ的役割を有するスポーツ領域として認識されてきたのではないでしょうか。しかしながら今日、それらは国民のスポーツへの興味関心を喚起しスポーツ実施率を向上させる一手段としての体験会やイベントの全国的開催、学校体育では児童生徒の体育嫌い・運動離れ現象を軽減すべく学習指導要領が従来の「種目ベース」から「型ベース」への再編に伴うルール変更による軽スポーツやニュースポーツの導入、3.11東日本大震災の復旧・復興期における制限された環境下での心身の健康の保持など、新たな役割を担う時代が到来したと捉えても良いのではないでしょうか。そこで、それらの全体像の把握として現状や問題点を紹介させていただきます。一連のスポーツは、スポーツ庁による第３期スポーツ基本計画「３つの視点」を支える施策を具現化する可能性があると考えています。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) ―身体文化の伝承・継承を科学する―

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうかが主題の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-1] バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜） 真由美[1] (1. お茶の水女子大学)

[スポーツ文化-SC-2] 身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛[1] (1. 筑波大学)

[スポーツ文化-SC-3] 空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳[1] (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) ー身体文化の伝承・継承を科学するー

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）
2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうかが主題の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-1]バイオメカニクス研究から考える身体文化の伝承・継承

*水村（久埜） 真由美[1] (1. お茶の水女子大学)

＜演者略歴＞
お茶の水女子大学基幹研究院教授。６歳よりバレエ、お茶の水女子大で創作舞踊を学ぶ。1989〜91年谷桃子バレエ団所属。東京大学大学院教育学研究科修士（体育学スポーツ科学）博士課程（身体教育学）修了、博士（教育学）取得。東京大学助手、お茶の水女子大学専任講師、助教授、准教授経て現職。日本ダンス医科学研究会代表理事。

ダンスは、文化に根付いて伝承・継承される身体表現である。バレエのように形式化された舞台芸術であっても、その誕生には文化的背景があり、上演されるダンスは、正に文化財といっても過言ではない。競技スポーツのパフォーマンス向上に、バイオメカニクス研究が貢献する事例は数多く報告されている。近年、同じ研究手法を用いて、身体表現としての様々なダンスを分析する研究は増加している。ダンスを対象とした科学的知見の蓄積は、身体運動としてのダンスの独自性を客観的に理解することに貢献し、ダンスの運動としての魅力を伝えるだけでなく、安全にダンスを楽しむための知見も提供している。一方で、バイオメカニクスに代表される定量的な解析から、芸術としての表現性を客観化することは容易ではない。身体文化の芸術的側面の解明には、今後分析手法の工夫や他領域とのコラボレーションといった展開により、バイオメカニクス研究による身体文化の伝承・継承に資する研究展開が期待される。身体への興味を共通点に、異なる領域の研究者が会する本学会での情報共有から、身体文化を対象とした自然科学的研究の今後の発展的な議論が展開されることを楽しみにしている。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) ー身体文化の伝承・継承を科学するー

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）
2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。

1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうかが主題の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-2]身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い

*中村 剛[1] (1. 筑波大学)

＜演者略歴＞
2006年14月11日～2012年19月30日　埼玉大学教育学部准教授
2012年10月11日～11111現在 筑波大学体育系准教授

シンポジウムでは、スポーツ運動学の立場から「身体文化としての〈わざ〉の伝承と動感出会い」というテーマでお話しする。この〈わざ〉は「歴史的にも、社会的にも、その伝承価値を保有している運動文化財」（金子, 2002, p.403）を意味する。

この運動文化財としての〈わざ〉の伝承は、彫刻や絵画などの有形文化財の継承とはずいぶんと違った様相を呈する。それは〈わざ〉の動感能力（金子, 2005, p.44）が人から人に受け継がれることで成立する。つまり〈わざ〉の承け手が、そうした能力をわが身に発生させられるかどうかが鍵を握る。伝え手がかつて習得した〈わざ〉を承け手に伝えようとしても、相手に動感能力が発生しなければ伝承は不成立に終わる。

こうして〈わざ〉の伝承で中核に据えられるのは、承け手の能力発生ということになる。そしてそこでは、伝え手が承け手の内在的な能力発生の営みに「いかにして出会うことができるのか」ということが前景に立てられることになる。

当日は、伝え手と承け手のあいだに伝承関係系が成立する上で不可欠な〈動感出会い〉についてお話しすることにしたい。

文献
金子明友（2002）わざの伝承．明和出版.
金子明友（2005）身体知の形成（下）．明和出版.

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(2) ー身体文化の伝承・継承を科学するー

コーディネーター：久保田 浩史（東京学芸大学）、尾川 翔大（日本体育大学）
指定討論者：石井 隆憲（日本体育大学）
2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第8会場 (2号館2階21教室)
本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。初年度のシンポジウムの目的は、スポーツの保存と流通にフォーカスして、次年度以降の議論を掘り下げていくための課題や論点を浮かび上がらせることであった。
　1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。保存されたスポーツ実践は人びとに共有される実践知になりうるものである。そこで、2年目のシンポジウムのテーマは、スポーツを含んだ身体文化を対象にその伝承・継承に設定した。身体文化の伝承・継承においては、個々人の身体文化が伝承・継承の次元に取り上げられるのかどうかが主題の一つになる。そして、身体文化は、具体的な実践の中に価値があり、それは長い歳月を経て結晶した現場の実践知に支えられている。本シンポジウムは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討するものである。

[スポーツ文化-SC-3]空手の指導実践から考える身体文化の伝承・継承

*清水 由佳[1] (1. 一般社団法人劉衛流龍鳳会)
＜演者略歴＞
世界空手道選手権大会　団体形の部 優勝２回・準優勝２回
アジア空手道選手権大会 団体形の部 三連覇・アジアオリンピック 団体形の部 優勝
2020東京オリンピック 空手競技 解説

殺すための「武術」から、その修行の過程に価値を見出し、その精神性を解くようになって「武道」へと変貌を遂げた。空手も空手道へ。空手界（特に沖縄）では、「伝統空手は絶滅危惧種」であり、今流行っているのは「スポーツ空手である。」いうことを耳にする。しかし、時代の変化に柔軟に対応し、その時代の人々のニーズに寄り添い、人々の心の拠り所としてあったからこそ、空手道は途絶えず、今なお200年以上存在しているのだと思う私は、「昔は…今は…」と批判し、評論家になっている空手家に愚問を感じるところがある。
「伝統」というものには、必ずそのような問題定義がなされているのであろう。
ただ、無形文化である空手道においては「稽古」が全てであり、血統や組織の大きさや口だけでは「技」は語れない。そして、「終わりなき探究」であるからこそ競技生命に関わらず、生涯空手ができるのであり、その探究（研究）のバトンを次世代に渡し続けることそのものの行為を「伝承・継承」というのではないだろうか。
「歪み」かもしれないが、「進化・成長」なのかもしれない。
生身の人間が行う動作である以上、決して「型」にはめることはできない。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-1] 心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

[学校保健体育-SC-2] 発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾[1] (1. 日本体育大学)

[学校保健体育-SC-3] 戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-1]心身機能とその科学的背景

*工藤 和俊[1] (1. 東京大学大学院総合文化研究科)

＜演者略歴＞

1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系修了、博士（学術）。1998年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系助手。2002-2003年米国コネチカット大学知覚と行為の生態学研究センター客員研究員。2011年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。

「心（こころ）」は「身体（からだ）」なくして存在しえない。その意味において両者は等価ではなく、心はあくまで身体を前提として存在する。心の働きを身体とは独立した記号処理として扱う古典的認知科学に代わり近年注目されている「身体性認知」（ embodied cognition）や、知覚・注意・思考・意思決定・情動を包括的に説明しうる脳活動の統一理論として提唱されている「自由エネルギー原理」の立場も、身体の運動を認知や思考プロセスそのものとして捉えており、運動と感覚/知覚/認知との一体性が強調されている。また、身体性を基盤として知覚行為の学習・発達・進化をつなぐ「階層的動作構築理論」の立場においても、姿勢や呼吸を整え、からだをほぐし、バランスを保つという基底階層が、より高次の複雑な認知・行為を支えると考える。さらに、哲学者のメルロ＝ポンティが「他者の心は…身体化されたものとしてのみ与えられる」と主張したように、社会的認知の基盤も身体に求められる。これらの立場はいずれも知覚行為基盤としての身体の重要性を強調するものであり、ひいては基盤的教育科目としての保健体育の存立を支えるものとなる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-2]発育発達学の視点で考えるこれからの保健体育

*野井 真吾[1] (1. 日本体育大学)

＜演者略歴＞

日本体育大学大学院博士後期課程修了。博士（体育科学）。東京理科大学理工学部専任講師、埼玉大学教育学部准教授、日本体育大学体育学部准教授を経て現職（日本体育大学体育学部教授）。

Society 5.0構想が提唱されている。また、昨今のコロナ禍では GIGAスクール構想の実現に向けた動きが一気に加速し、子どもの「学び」について再考することを余儀なくされている。さらに、 AI、アバター、デジタル教科書等といったコトバを日常的に耳にすることを踏まえると、その議論は喫緊の課題ともいえる。このようなことから、体育科教育学分野では ICTを活用した体育授業のあり方等が模索されている現状がある。もちろん、これからの時代にそのような改革が必要であることは理解できる。しかしながら、ヒトは動物である。動物は「動く物」と書くように、動かなければヒトにも人間にもなれない。また、ヒトは人間でもある。人間は「人の間」と書くように、一人で進化してきたわけではない。家族や仲間とともに共存、協力しながら進化してきた。そのように考えると、ヒトは「動いて動物になり、群れて人間になる」といえる。そしてそのことは、 Society 5.0時代、 GIGAスクール時代が到来しても同じである。むしろ、そのような社会になればなるほど、動くこと、群れることの重要性を強く自覚しておく必要がある。同時に、保健体育に寄せられる期待はますます大きくなるとも考える。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景

コーディネーター：春日 晃章（岐阜大学）、松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第5会場 (2号館4階4E教室)

我が国の子ども達の体力・運動能力低下、体力の二極化、運動・スポーツ離れが懸念される現状を踏まえ、今以上に子ども達が自ら進んで身体活動に親しみ、仲間と共に関わることは重要である。仲間、時間、空間（三間）の減少に伴って放課後の運動遊びが激減した今、学校体育は非常に貴重な時間である。これまでの体育、保健体育を踏襲していくだけでは懸案の課題解決は難しく、多くの研究領域からの英知を結集した体育、保健体育を今一度考えていく必要があるのではないかと考えた。本シンポジウムでは、体育科教育だけでなく、他分野の研究領域やその科学的エビデンスをそれぞれのシンポジストの立場から示して頂き、これらからの学校体育について考えていきたい。

[学校保健体育-SC-3]戦後の体育科の変遷について

*近藤 智靖[1] (1. 日本体育大学)

＜演者略歴＞

日本体育大学児童スポーツ教育学部教授、日本スポーツ教育学会理事長。（公財）日本学校体育研究連合会理事。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士課程修了 博士（体育科学）。白鴎大学教育学部准教授を経て現職。専門は体育科教育学、スポーツ教育学。

我が国の学習指導要領は概ね10年に一度の単位で改訂されており、それにあわせて体育科でも重視される内容が変遷している。体育科における指導内容を決定づけていく要因は一つに限らず、児童生徒の実態、教育学やスポーツ科学の学術的発展、国内外の教育やスポーツを巡る動向、さらには政治や行政政策の状況等、多岐に及んでいる。学習指導要領はこうした多様な要因を背景として改訂をしている。一例として、体育科の授業において体力づくりと称して、強度の高い運動を実施していくことの背景には、1964年に開催された東京オリンピックや、同時期に始まったスポーツテスト（現在では、新体力テストと呼ばれる）の影響が見られている。また、現在の体育科では資質・能力の育成に向けて「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が目指されているが、これは国際的なコンピテンシーベースのカリキュラム論議の影響がある。本発表では、こうした体育科が教科としての指導内容を決定づけていく背景を歴史的にたどり、議論のベースを作る予定である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンシング、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-1] 身体活動に対するCovid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子[1] (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

[健康福祉-SC-2] 高齢者のADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生[1] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

[健康福祉-SC-3] 「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋[1] (1. スポーツ＆レジャー研究所)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンシング、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-1]身体活動に対する Covid-19の影響とオンライン運動教室の実現可能性

*甲斐 裕子[1] (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

＜演者略歴＞

筑波大学大学院体育研究科を修了後、九州大学大学院人間環境学府を修了し、博士（人間環境学）を取得。2004年より体力医学研究所に勤務（2020年より現職）。専門は運動疫学。自治体や企業と協力して、身体活動促進や座りすぎ是正のポピュレーションアプローチについて研究。日本運動疫学会理事、日本健康支援学会理事。

コロナ禍に伴う、外出自粛・運動の場の閉鎖・テレワークの急拡大等により、人々の身体活動量が減少した。特に、高齢者では、社会的交流の低下とともに、フレイルや認知症のリスクが上がったと報告されている。一方で、2021年はスポーツ実施率が過去最高を記録するなど予想外の報告も出てきている。海外では、経済的に豊かな地域に住む住民は、日常生活で減少した身体活動を余暇の活動で補っているが、貧しい地域の住民はそうでないことなどが報告されている。我が国でも、緊急事態宣言後の高齢者の身体活動の回復度合いは、社会的つながりによって違いがあることが明らかになっている。すなわち、コロナ禍に関連した身体活動量の変化には、社会経済状況が関与している可能性があり、健康格差を拡大させてしまう懸念がある。このような状況を打破するために、各地でオンラインを活用した運動の機会の提供が試みられているが、その検証は緒に就いたばかりといえる。本シンポジウムでは、最初にコロナ禍に伴う身体活動・運動・スポーツの変化について整理し、その後、我々が行っているオンライン運動教室の実践研究について紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンシング、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-2]高齢者の ADLを維持することを狙いとする運動方法の模索

*竹島 伸生[1] (1. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科)

＜演者略歴＞

1955年福岡県生まれ。中京大院修士修了、医学博士（愛知医大）。名古屋市大、鹿屋体大教授を経て2017年より現職。1989年日本体力医学会学会賞受賞; 2020年運動器の健康・日本協会運動器の健康・日本賞 奨励賞受賞、著書：ウエルビクスの勧め（ナップ）」論文 ほか。

動かない生活は、人の生理的脆弱性を来たしやすく、我々の調査からは介護老人福祉施設で動かない生活を継続している高齢者における著しい進行性の筋量低下が示された。人は動くことが大切であり、 ADLの維持が期待できる。しかし、虚弱になれば動くことを嫌う高齢者も少なくない。このため動機付けや理解を深める丁寧な情報の提示が改めて必要といえる。演者らは2000年から実施してきた地域公民館を拠点とする地域型運動、または家庭型運動との併用は現在でも継続されている。移動が容易な場所に集い、一緒に運動を行う方法は、内発的動機付けをもたらすための方法として効果的である。一方、コロナ感染で「集まる」という方法が選択できずに中止を已む無くとの声が聞かれていた。家庭型（個人）のみやネット配信を使った運動方法も散見されているが、単なる運動紹介では継続が困難というケースも聞く。今日高齢者に対する運動方法のあり方を改めて考える必要があり、その上で指導者の育成が急務といえる。また高齢人口の増加に伴い、自立度の評価を迅速、かつ簡単にできることが介護予防に必要と考えるが、現在取り組む赤外線深度センサーを使った自立度評価の試みも紹介したい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／オンライン化で得られる健康、失う健康

コーディネーター：大槻 毅（流通経済大学）

2022年9月1日(木) 17:00 〜 18:50 第1会場 (3号館3階301教室)

コロナ禍が始まって約1年半後に実施された昨年度のシンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から見た健康づくり運動の現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂いた。その後、感染状況は刻一刻と変化する一方で、エビデンスの集積は着実に進展している。そこで本年度は、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかを、異なる専門領域の研究者による多様な視点で評価するシンポジウムを企画した。まず、中高年における健康・体力の現状と課題を疫学調査により俯瞰したうえで、オンライン化、ソーシャル・ディスタンシング、マスク着用、三密回避等により健康づくり運動の場がどのように変わったのか、それらを運動の実践者・指導者がどのように捉えているか等を紹介して頂く。これらを通じ、新しい生活様式のメリットを活かし、そのデメリットを最小限にして中高年の心身機能低下を予防する方法を考えたい。

[健康福祉-SC-3]「体験」と「健康」の捉え方

*久保 正秋[1] (1. スポーツ＆レジャー研究所)

＜演者略歴＞

東京教育大学体育学部卒業　博士（体育科学）筑波大学

日本スポーツ教育学会賞（1995）東海大学名誉教授（2016）日本体育学会賞（2019）

著書：「コーチング論序説」（不昧堂）「体育・スポーツの哲学的見方」（東海大学出版）

本シンポジウムでは、体育哲学の立場から「体験」の「健康」への影響を論じる。しかし「体験」と「健康」、この言葉自体が曖昧である。「体験」は「経験」との相違が不明確であり、混乱した使用法が見られる。例えば「 peak experience」の日本語訳には「至高体験」「至高経験」の二つがあり混乱している。「健康」は「病気でないこと」と思われがちだがそうではない。 WHOでは身体的、精神的、社会的「 well-being」を「健康」としているが「 well-being」が何であるかは明確でない。よってまず、「体験」「健康」という言葉を整理する。「体験」を「経験」へと推移する現象として捉え、その始まりである主客未分、脱自、思考以前の状態を「体験」の原点と考えてみる。次に身体的、精神的、社会的「 well-being」が何であるのかを考え、「健康」を規定する。そして「 well（満足/十分/適切）」な「 being（存在/実存/人生）」と「体験」の原点との結びつきを考察し、そこに生起する「体験」の「健康」への影響を見ようとする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 17:00 ~ 18:50 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-1] 月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子[1] (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SC-2] トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平[1] (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

[競技スポーツ-SC-3] 女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際

*川上 優子[1] (1. キヤノンアスリートクラブ九州)

[競技スポーツ-SC-4] 性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人[1] (1. 関西福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-1]月経周期が運動時生理反応に与える影響

*須永 美歌子[1] (1. 日本体育大学)

＜演者略歴＞

日本体育大学児童スポーツ教育学部　教授，博士（医学）

日本オリンピック委員会医・科学スタッフ（陸上競技）

日本陸上競技連盟科学委員

近年、日本人女性アスリートの競技力は急激に向上し、競技スポーツを行う女性の数も増加している。その一方で、女性特有の課題も明らかになってきており、解決が望まれている。その課題のひとつとして、スポーツ現場におけるトレーニングやコンディショニングは、男性を対象としたエビデンスをもとに構築された方法を用いて実施されていることが挙げられる。女性アスリートが健康を維持しながら、効率的にトレーニング効果を獲得し、ピークパフォーマンスの発揮へとつなげるためには、女性の身体的特性を考慮したうえでスポーツ指導を行うことが重要である。

　女性は、思春期を迎えると月経周期を有し、性ホルモン濃度（エストロゲン、プロゲステロン）に周期的な変動が生じる。性ホルモンの受容体は乳腺や卵巣のみならず、骨格筋細胞にも存在することから、筋タンパク合成やエネルギー代謝の調節に関与する。本セッションでは、月経周期に伴う性ホルモン濃度の変化が運動時生理反応に与える影響に関する研究を紹介し、生物学的な性差を活かしたトレーニングプログラム開発の可能性について考えたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-2]トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響

*牧野 講平[1] (1. 森永製菓 in トレーニングラボ)

＜演者略歴＞

2003年に森永製菓inトレーニングラボと契約し、これまでに、浅田真央選手（フィギュアスケート）、有村智恵選手（ゴルフ）、前田健太選手（MLB）、高梨沙羅選手（スキージャンプ）、宮里美香選手（ゴルフ）、太田雄貴選手（フェンシング）、小川泰弘選手（プロ野球）、高藤直寿選手（柔道）など様々なトップアスリートをサポート。

男女問わずさまざまな競技のトップアスリートをサポートしてきたが、トップレベルの選手であっても例外なく、男女それぞれに骨格的特徴や生理的特性があり、それらが障害や競技パフォーマンスに影響を与えていた。今回は、それらの特徴を選手の実例と共にご紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）
2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)
オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-3]女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際

*川上 優子[1] (1. キヤノンアスリートクラブ九州)
＜演者略歴＞
キヤノンアスリートクラブ九州 監督。一般社団法人スポーツコア 代表理事。
1996年アトランタオリンピック女子10,000m7位入賞、2000年シドニーオリンピック女子10,000m10位と2大会連続でオリンピック出場。

女性アスリートには男性アスリートと比較して、様々な特徴や課題があることは明らかとなっているが、実際にどのようにしてトレーニングを計画し実施するのか、どのように月経周期の変化に対応するのかなど、リアルなトレーニングのマネジメント方法論に関しての知見は不足している。
　自身が陸上競技・長距離種目のトップアスリートとして活躍した際の経験や、現在は指導者として女子駅伝チームの指導を行っているため、そこでの工夫や実践内容などを紹介する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング

コーディネーター：越田 専太郎（了徳寺大学）、東浦 拓郎（亜細亜大学）

2022年9月1日(木) 17:00 ～ 18:50 第3会場 (3号館4階402教室)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えるシンポジウムとしたい。

[競技スポーツ-SC-4]性差を踏まえたジャンプトレーニング

*熊野 陽人[1] (1. 関西福祉大学)

＜演者略歴＞

博士（体育学）、関西福祉大学社会福祉学部 准教授、同大学陸上競技部 監督、JSPOーCD

日本陸上競技連盟強化委員会　女子走幅跳オリンピック強化スタッフ（2016.12～2021.9）

専門領域はコーチング学。専門種目は陸上競技・跳躍種目、様々なスポーツ種目のジャンプコーチを務める。

様々なスポーツ種目において欠かすことのできない動作のひとつが、ジャンプ（跳ぶ）である。その目的は「高く跳ぶ」「遠くに跳ぶ」「速く跳ぶ」などであり、極めて短い接地時間で下肢が爆発的に力を発揮することが求められる。このジャンプ動作には生物学的な性差が大きな影響を与え、トレーニングアプローチは男女で異なるものとなる。本セッションでは、ジャンプ動作影響を与える性差に関するエビデンスを紹介し、男女それぞれどのようなトレーニングが必要なのか、どのような流れでトレーニングを行うべきなのか、演者の実践経験を交えながら論じていきたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

9:00 ~ 9:15

[生涯スポーツ-B-01] 子どもの安全なスポーツ環境構築に向けた地域スポーツの現状と課題（介,保,発）

スポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態調査から

*佐野 颯斗[1]、山本 利春[1]、笠原 政志[1]、清水 伸子[1] (1. 国際武道大学)

9:16 ~ 9:31

[生涯スポーツ-B-02] eスポーツのオンラインチームプレーが引き出すオキシトシン分泌と友好性（介,生,心）

*松井 崇[1]、門間 貴史[1]、下山 寛之[1]、吉武 誠司[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、峰 勇仁[1]、吉武 理香子[1]、内沢 彰子[1]、藤井 直人[1]、高木 英樹[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

9:32 ~ 9:47

[生涯スポーツ-B-03] eスポーツプレー時の異なる座位姿勢がもたらす気分と精神作業特性（心）

前傾と後傾の比較

*峰 勇仁[1]、髙橋 史穏[1]、吉武 誠司[1]、松岡 弘樹[1]、安田 駿[1]、塩寺 亮義[2]、髙橋 延忠[2]、嶺野 あゆみ[2]、浅田 晴之[2]、松井 崇[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター、2. 株式会社オカムラ)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：成瀬 和弥（筑波大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第6会場 (2号館1階11教室)

09:00 〜 09:15

[生涯スポーツ-B-01]子どもの安全なスポーツ環境構築に向けた地域スポーツの現状と課題（介,保,発）

スポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態調査から

*佐野 颯斗[1]、山本 利春[1]、笠原 政志[1]、清水 伸子[1] (1. 国際武道大学)

【背景】近年、子どものスポーツ環境が学校から地域へ移行されることが検討されており、その受け皿のひとつにスポーツ少年団がある。スポーツ活動を直接的にサポートする指導者は、活動時に発生した傷害や事故に対し、適切な救急対応を施す役割があるが、スポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態は明らかになっていない。
【目的】スポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態を明らかにし、子どもの安全なスポーツ環境構築のための基礎資料を得ることを目的とした。
【方法】2021年10月〜11月、全国の単位スポーツ少年団に在籍している指導者を対象に、 Googleフォームを用いたウェブ調査を実施した。調査内容は、1）対象者の基本的属性、2）救急対応の経験、3）救急対応の自信、に関する項目で構成された。4,408名の指導者から回答を得て、全ての回答に欠損のない4,382名を分析対象とした。なお、本調査は日本スポーツ協会との共同研究により実施した。
【結果】指導現場で救急対応を行った経験があると回答した者は64.5%であり、全体の75.1%の指導者が救急対応に関する講習会を受講した経験を有していた。さらに、その講習内容は「心停止への対応」が大半を占めており、「頭頚部外傷への対応」は19.6%と最も少なかった。また、救急対応の自信を傷害分類別に調査した結果、「熱中症への対応」に自信を有している者は多い反面、「眼の外傷への対応」や「頭頚部外傷への対応」に自信を有している者は2割程度であった。
【結論】スポーツ少年団指導者は指導現場で発生した様々な負傷・疾病に対して救急対応を行う可能性が高いものの、それらの対応に自信を有する者は多くはないことが明らかになった。子どもの安全なスポーツ環境構築のためには、比較的軽微な事故を含めた幅広い対応ができるとともに、最低限生命の危機につながる重大事故を適切に対処できる指導者の育成が必要と考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：成瀬 和弥（筑波大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第6会場 (2号館1階11教室)

09:16 〜 09:31

[生涯スポーツ-B-02]eスポーツのオンラインチームプレーが引き出すオキシトシン分泌と友好性（介,生,心）

*松井 崇[1]、門間 貴史[1]、下山 寛之[1]、吉武 誠司[1]、髙橋 史穏[1]、松岡 弘樹[1]、峰 勇仁[1]、吉武 理香子[1]、内沢 彰子[1]、藤井 直人[1]、高木 英樹[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

オキシトシン（ OT）は、親子の愛着などの社会関係形成や協力・信頼などの向社会行動を担う「絆ホルモン」である。最近、 OT分泌が柔術で高まることから、武道やスポーツの教育・福祉・医学的効果を担う分子機構として注目される。私どもは、オフライン eスポーツ大会における初対面での一対一のプレーが勝敗によらず OT分泌と友好性を高める一方、オンライン大会での同様のプレーはそれらを高めないことを明らかにしてきた。本研究では、既知の他者との会話による協力を伴うチームプレーであればオンラインでも OTが分泌され、友好性の醸成に寄与すると想定し、これを検証した。 16人の若齢成人（男性14名、女性2名、23.5±3.8才）による8チームが、大学で開催した eFootball 2021（コナミデジタルエンタテインメント社）のチーム大会に自由応募で参加し、味方とボイスチャットしながら勝敗を決するまで約20分間プレーした。心拍数を常に測定しながら、プレー前、終了直後、30分後に唾液を採取し、 OTを ELISA法により定量した。併せて、気分を Profile of Mood States 2で評価した。 プレー中の心拍数は毎分約130拍まで上昇し、オフライン大会と同等の心身の負担度が確認された。唾液中 OT濃度は勝敗に関係なく、プレー終了直後にプレー前よりも21.7%増加した。友好的気分はプレー終了30分後にプレー前よりも17.3%向上した。これらの増加率は、オフライン大会での増加率とほぼ同等の水準だった。さらに、 OTの変化率と友好的気分の変化率との間には正の相関が確認された。 本研究により、 eスポーツのオンラインチームプレーが、オフラインプレーとほぼ同等のレベルまで OT分泌と友好性を高めることが初めて明らかになった。チームプレーは、 eスポーツの教育・福祉・医学的活用をオンラインでも可能にする重要な要素かもしれない。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：成瀬 和弥（筑波大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第6会場 (2号館1階11教室)

09:32 〜 09:47

[生涯スポーツ-B-03]eスポーツプレー時の異なる座位姿勢がもたらす気分と精神作業特性（心）

前傾と後傾の比較

*峰 勇仁[1]、髙橋 史穏[1]、吉武 誠司[1]、松岡 弘樹[1]、安田 駿[1]、塩寺 亮義[2]、髙橋 延忠[2]、嶺野 あゆみ[2]、浅田 晴之[2]、松井 崇[1] (1. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター、2. 株式会社オカムラ)

座位での精神作業中の気分やパフォーマンスは姿勢に左右される。近年発展が著しい eスポーツは座位でのプレーが一般的だが、その際の気分やパフォーマンスに及ぼす姿勢の影響は全く不明である。ヒトは意欲的な時に前傾姿勢を取る一方、逆に前傾姿勢を取ると意欲的にもなることから、前傾姿勢は eスポーツ時の意欲的なプレーに資する気分と精神作業特性を引き出すと想定し、これを検証した。 ビデオゲーム好きの若齢成人男性10名（24.1 ± 2.9歳）に、座面制御可能なゲーミングチェア（オカムラ社）による前傾／後傾座位の２条件で、eFootball 2021（コナミデジタルエンタテインメント社）を180分間プレーしてもらった。プレー前、開始後15、30、60、120、180分、終了30分後の７時点で、気分（ VAS：疲労感、面白さ、二次元気分尺度：覚醒度）と実行機能（フランカー課題）を評価した。気分や実行機能に関係する前頭前野活動の間接指標となりうる瞳孔径も同様に測定した。 面白さと覚醒度は両条件とも30〜60分でピークに達したあと低下に転じたが、前傾条件が後傾条件よりほとんどの時点で高値を示した。疲労感は両条件ともプレー時間に応じて高まったが、その増加は前傾の方が早かった。フランカー課題の干渉時間は、前傾条件の60分時点でプレー前および後傾条件と比べて有意に短縮し、120分以降は元の水準に戻った。フランカー課題の正答率は、前傾条件のプレー中に後傾条件と比べて低下した。瞳孔径は前傾条件で120分以降に縮小し、フランカー課題の干渉時間と負の相関を示したが、これらの変化や関係は後傾条件ではみられなかった。 本研究により、前傾座位は eスポーツプレー時の面白さや覚醒度とともに情報処理速度を高めやすい姿勢であることが初めて確認された。一方、後傾座位は情報処理精度の維持に役立ち、120分以上の長時間プレー時に生じる認知疲労を緩和する可能性がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第7会場 2号館1階12教室

生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長：館 俊樹（静岡産業大学）

9:00 ~ 9:15

[生涯スポーツ-B-04] 身体障害児・者を持つ母親のソーシャルサポート向上を目指した親子運動プログラムが運動継続に対する見込み感に与える効果（ア）

*瀬川 海[1]、大平 雅子[2] (1. 兵庫教育大学、2. 滋賀大学)

9:16 ~ 9:31

[生涯スポーツ-B-05] 地域高齢者のためのスマートシューズによる健康・見守り支援クラウドシステムの検討（介,測）

e-テキスタイルセンサを用いた歩行能力評価の検討

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

9:32 ~ 9:47

[生涯スポーツ-B-06] Fリーグ共同開催試合の集客事業に参画した学生の学び（経）

*古田 康生[1] (1. 岐阜協立大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：館 俊樹（静岡産業大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第7会場 (2号館1階12教室)

09:00 〜 09:15

[生涯スポーツ-B-04]身体障害児・者を持つ母親のソーシャルサポート向上を目指した親子運動プログラムが運動継続に対する見込み感に与える効果（ア）

*瀬川 海[1]、大平 雅子[2] (1. 兵庫教育大学、2. 滋賀大学)

子育て世代の母親がソーシャルサポートを得ることによって、運動行動は促進されることが報告されている。しかし、子育て世代の中でも障害児・者を持つ母親が、ソーシャルサポートを得ることで運動へのやる気や運動を継続して行う見込み感が向上するかまでは検討されていない。そこで、本研究では、障害児・者を持つ母親が障害児・者と一緒に運動プログラムへ参加することによってソーシャルサポートを認知し、運動を継続する見込み感が高まるかを検証した。

中学・高校生の身体障害児・者3名とその母親3名を対象とし、2021年10月下旬に親子で運動プログラムに２日間参加してもらった。1回30分の運動プログラムの内容は、家でも取り組みやすいペアストレッチやエクササイズを中心に構成した。母親に対して運動プログラムの参加前・後で質問紙調査を行い、質問項目は運動セルフエフィカシー尺度（岡、2003）とスポーツソーシャルサポート尺度（菅ら、2011）とした。さらに、プログラム実施後の2021年12月中旬に、母親に対する運動実施状況や運動プログラム参加中や参加後の影響などを調査するため、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。

質問紙調査の結果、母親３名の運動セルフエフィカシー尺度の得点が運動プログラム参加後に増加した。つまり、親子で運動プログラムに参加することは母親の運動に対するやる気や継続への意識を高める可能性が示唆された。それと同時に、スポーツソーシャルサポート尺度の下位尺度である手段的サポートの得点が運動プログラム参加後に増加した。インタビュー調査で、「身体障害のある親子同士で運動を行う環境であったため、周りを気にせず楽しむことができた」という意見もあり、手段的サポートを感じやすかったのかもしれない。したがって、親子運動プログラムは母親のソーシャルサポートの認知を高め、運動継続に対する見込み感を向上させる可能性がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：館 俊樹（静岡産業大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第7会場 (2号館1階12教室)

09:16 〜 09:31

[生涯スポーツ-B-05]地域高齢者のためのスマートシューズによる健康・見守り支援クラウドシステムの検討（介,測）

e-テキスタイルセンサを用いた歩行能力評価の検討

*佐藤 進[1] (1. 金沢工業大学)

発表者は、これまでの地域高齢者に対する転倒予防介入研究において実施した支援が結果的に一部の限られた集団にしか届いていない現状を鑑み、従来の人間ドッグ型（施設通所型）支援からモニタリング型・センサー型支援の必要性を認識した。異分野の専門家同士が長所を持ち寄ることで、これまで様々な学術研究・自治体における健康施策で問題とされてきた「健康支援策をいかにして地域全体・広範囲に展開・浸透させるのか」という課題に対する新しい領域横断的アプローチが可能となった。発表者は e-テキスタイルを利用した歩容センサ内蔵のスマートシューズで計測した日常生活中の歩容（歩き方の特徴）や生活空間（活動範囲など）の情報を、公衆通信網を介してクラウドシステムと連携し、高齢者本人、家族、自治体などが健康・見守り支援に活用できるシステムの構築を試みている。個人データのフィードバックにより行動変容（活動量増加・行動範囲拡大）を促すことで健康増進や認知機能維持、骨粗鬆予防につながる可能性も期待できる。データ蓄積により個人内変動や年代別・性別の目安値なども健康情報として提供できる。同居や遠隔地居住の高齢者家族への情報共有も可能であり、健常な独居高齢者のみならず、認知症高齢者などの安否確認や見守り支援としての利用も期待される。これらのシステム構築には解決すべき課題は多く、センサーから得られる情報をどのように評価・フィードバックするかもその重要な一つである。今回の発表では、本研究で利用する e-テキスタイルセンサーを介して得られる歩行時の時間的変数を主に用いた歩容変数等を利用した歩行能力評価について検討した結果を報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：館 俊樹（静岡産業大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第7会場 (2号館1階12教室)

09:32 〜 09:47

[生涯スポーツ-B-06]Fリーグ共同開催試合の集客事業に参画した学生の学び（経）

*古田 康生[1] (1. 岐阜協立大学)

Fリーグは日本トップリーグ機構に属する1つのリーグで、フットサル競技のトップリーグである。このリーグの特徴として競合開催方式がある。つまり、一つの試合開催都市にてリーグに所属する全てのチームが試合する方式である。2019年11月8~10日に開催された全12試合の集客事業に PBI型授業の一環としてスポーツ経営を専攻する学生が参画し、その実践的学びをテキストマイニングにより分析し、今後の PBI型授業づくりの基礎的資料とすることを目的とした。50強の企画立案がされ、主にｴｽｺｰﾄｷｯｽﾞ事業とｻｲﾝ会事業がリーグにより採用され、その運営にあたった。ｴｽｺｰﾄｷｯｽﾞ事業では東海三県のフットサルクラブを学生が回り勧誘し、600名弱の集客成果を得た。参画による学びの自由記述では199件のサンプルを得、分析対象とした。その結果、最も多く抽出されたのは「改善する点」で<参加児・保護者対応>や<スタッフ間の情報共有>といった改善点が抽出された。今回、参画学生から得られた「改善する点」は PBL型授業をより充実させ、事業参加における事前指導の内容に反映させることで質の高いスポーツ経営に関する実践教育づくりに役立つ資料が得られた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第8会場 2号館2階21教室

健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

9:00 ~ 9:15

[健康福祉-B-01] 段差跨ぎ動作時における保守的な衝突回避戦略と動作の多様性の関係（介）

*須田 祐貴[1]、中村 高仁[1,2]、坂崎 純太郎[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 埼玉県立大学保健福祉学部)

9:16 ~ 9:31

[健康福祉-B-02] 高齢者のダンス活動がもたらす心理・社会的フレイルの予防効果と活動継続動機との関連（介）

*岡 千春[1] (1. お茶の水女子大学)

9:32 ~ 9:47

[健康福祉-B-03] 高齢者を対象とした移動物体との衝突予測評価（介,測,心）

インターセプト課題の有用性

*佐藤 和之[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第8会場 (2号館2階21教室)

09:00 〜 09:15

[健康福祉-B-01]段差跨ぎ動作時における保守的な衝突回避戦略と動作の多様性の関係（介）

*須田 祐貴[1]、中村 高仁[1,2]、坂崎 純太郎[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. 埼玉県立大学保健福祉学部)

高齢者が身体の持つ冗長性を十分に利用できず単調な動きの繰り返す特徴は、転倒の要因として注目されている。このような単調な動きは、段差跨ぎ場面に「必要以上に足を挙げて回避する保守的な回避戦略」にもみられる。保守的戦略は、確実な衝突回避に寄与するものの、どんな高さの障害物でも同じ動作パターンでの回避を誘導する。すなわち、高齢者は保守的な戦略の結果、動作の多様性が減少している可能性がある。本研究では、こうした動作の多様性を Uncontrolled manifold（ UCM）解析を用いて筋骨格系の協調性の観点から評価し、段差跨ぎ時における協調性の年齢変化ならびに跨ぎ脚による影響を検証した。さらに、保守的戦略と協調性の関連も検討した。対象者は26名の高齢者と21名の若齢者であり、高さ8cmの段差を歩行しながら跨いだ。先導脚、後続脚それぞれが障害物を跨ぐ瞬間において UCM解析を実施した。 UCM解析で得られるΔ Vzが高い場合、足尖挙上を一定に維持する関節協調パターンが多いことを示す。検証の結果、段差跨ぎ動作時の身体協調性は、年齢による著明な違いが見られなかったものの、跨ぎ脚間の制御の違いや足を高く上げる人ほど、協調性が低下することが明らかとなった。Δ Vzに対する年齢（高齢者、若齢者）× 跨ぎ脚（先導脚、後続脚）の２要因分散分析では、交互作用及び年齢による主効果はみられなかった。一方で、跨ぎ脚での主効果は有意であり、年齢にかかわらず、先導脚の方が有意に多様な関節協調パターンを利用していることがわかった。さらに、クリアランスとΔ Vzの相関分析では有意な負の相関がみられ、年齢にかかわらず、クリアランスが大きい人ほど、動作の多様性が低下していることがわかった。したがって、保守的な回避戦略による歩行習慣は、単調な動きへと誘導する可能性があり、必ずしも有益な回避戦略とは言えないことが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第8会場 (2号館2階21教室)

09:16 〜 09:31

[健康福祉-B-02]高齢者のダンス活動がもたらす心理・社会的フレイルの予防効果と活動継続動機との関連（介）

*岡 千春[1] (1. お茶の水女子大学)

高齢者がダンス活動を継続的に行うことは、身体的フレイルおよびサルコペニアの予防として効果が認められている。さらに認知機能の維持向上、代謝改善の効果も示唆されている。筆者は高齢者がダンスを継続することによる影響の中でも、特に心理的・社会的フレイルの予防に着目した。本研究では、ダンス活動を継続する高齢者へのインタビュー調査から、ダンスのどのような側面が高齢者の心理・社会的フレイルへ働きかけるのか、またどのようなダンスプログラムがより適しているのかを明らかにすることを目的とする。
先行研究から、高齢者を対象としたダンス活動には様々なジャンルが存在しており、抑うつ症状へ影響を及ぼす可能性が示唆されている。筆者は、リズムダンスを中心としたダンス活動を継続する3名の高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、ダンス活動を開始したことによる心身の変化および活動継続の理由について質問を行った。その結果、3名の対象者ともダンス活動を開始する前と開始した後では、特に気分の開放や他者とのコミュニケーションについて変化を感じており、身体的な効果はあまり実感されていないことがわかった。活動継続の理由も、主に気分転換や気持ちの開放、仲間とのコミュニケーションの機会が挙げられ、身体運動としての機会よりも心の健康、社会的健康を求めて活動に参加していることが明らかになった。特に音楽やリズムに合わせて身体を動かすことをはじめとして、他者とともに身体表現を行うことによる開放感や非日常体験から、心理的影響を受けているという回答が得られた。ダンスのこうした側面によって、身体的フレイルだけでなく心理・社会的フレイルを予防・改善する効果があると考えられる。また、高齢者がより心理的な開放や社会的健康を実感することを目指し、即興的身体表現を取り入れたプログラムの実施が効果的であると考えられ、今後検証が必要であるといえる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題Ｂ】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：樋口 貴広（東京都立大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第8会場 (2号館2階21教室)

09:32 〜 09:47

[健康福祉-B-03]高齢者を対象とした移動物体との衝突予測評価（介,測,心）

インターセプト課題の有用性

*佐藤 和之[1]、福原 和伸[1]、樋口 貴広[1] (1. 東京都立大学)

【目的】

安全な移動のためには、周囲の環境を適切に知覚し、衝突の有無などを正しく予測することが不可欠である。本研究では衝突予測スキルの評価として、ヴァーチャルリアリティ（ VR）環境下でのインターセプト課題（ Steinmetz ST, et al. 2020）の有用性、および予測スキルの年齢的差異に関連する要因を比較検討した。この課題では、移動物体と観察者間になす3つの角度情報(α角:互いの水平面上の位置関係 / γ・φ角:移動物体の拡大情報)を正確に利用した衝突予測が可能か評価できる。

【方法】

高齢者18名(73±5.4歳)、若年者12名(23.8±4.1歳)が参加した。 Control条件、γ・φ・α外乱の4条件とし、各条件90試行（1ブロック30試行）実施した。γ・φ外乱条件とα外乱条件は別日に実施した。アウトカムに衝突予測の正確性を反映したスコアを求めた。統計解析は年齢・外乱条件・ブロックを要因とする3要因分散分析を実施した。高齢者はもともとα・γ・φ角の情報を利用していないため、若齢者のみが外乱による負の影響を受けるという仮説を立てた。

【結果】

γ・φ外乱条件にスコアにおいて、年齢と外乱種類に1次交互作用(F(2, 30)= 3.83, p= 0.02)を認め、若齢者におけるγ外乱条件が Control条件よりも低値であった。α外乱条件のスコアにはいずれの交互作用も認めなかったが、年齢(F(1, 30)= 45.59, p= 0.00)と外乱種類(F(1, 30)= 4.32 , p= 0.04)に主効果を認め、若齢者よりも高齢者、 Control条件よりもα外乱条件で有意に低値を示した。

【考察】

仮説が一部支持され、高齢者は拡大情報(γ・φ)に対する外乱の影響を受けなかった。この結果は、高齢者における衝突予測においては、物体の拡大情報の貢献度が低い可能性が示唆された。これに対して、空間的位置関係(α)に対する外乱は、高齢者のパフォーマンスも低下させたことから、年齢を問わず衝突予測に利用される可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第9会場 2号館2階22教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長：周東 和好（上越教育大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-01] 哲学「プレイ・アンド・エクササイズPlay and Exercise」序論（哲）

Taiiku、模倣、生き方

*林 洋輔[1] (1. 大阪教育大学)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-02] どのようにしてパルクール（Parcours ）はパルクール（Parkour）となったのか（社,史,哲）

エベルの「メトード・ナチュレール」のポストコロニアルな転用に関する一考察

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-03] 長野県諏訪市「御柱祭」に見るエクストリームスポーツの要素（人）

伝統スポーツとエクストリームスポーツの接点を捉える

*豊島 誠也[1] (1. 広島大学大学院)

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：周東 和好（上越教育大学）

2022年9月1日(木) 09:00 ～ 09:47 第9会場 (2号館2階22教室)

09:00 ～ 09:15

[スポーツ文化-B-01]哲学「プレイ・アンド・エクササイズ Play and Exercise」序論（哲）

Taiiku、模倣、生き方

*林 洋輔[1] (1. 大阪教育大学)

「スポーツ文化」における「文化」の実質を問い直す時宜である。「体育学にとって『文化』とは何か」との問いを立て、「プレイ Play」ならびに「エクササイズ Exercise」両概念が再考されるべきこと、また「体育 Taiiku」概念を援用することで新たな文化哲学を構想しうる論拠ならびに以後の行論の端緒となる知が本発表で示される。

「スポーツ文化」の実質を哲学より捉える際、この術語の基底詞である「文化」の実質を究める作業が不可欠である。しかし体育学では「スポーツ」への問いが体育学の全領域で強い関心の下に陸続するのに対し、「文化」への問いを体育学の独自性に拠りつつ掘り下げた議論は斯界研究史でも極僅少である。これまで深く問われ得なかった「体育学における『文化』」概念に斯界全領域の成果を踏まえつつ、議論の全体構想ならびに起点となる知が「体育の哲学 Philosophy of Taiiku」を介して以下の通り示される。

着眼とする「プレイ」ならびに「エクササイズ」両概念について注記する。「スポーツ文化」の実質が問われる際、過去の議論にて例外なく参照されたのは遊戯論の古典である『ホモ・ルーデンス』および『遊びと人間』である。本発表では後者における遊びの分類の一である「模倣の遊び」としての「ミミクリ」に着眼し新たな議論を興す。というのも文化の起源は「遊び」に存する一方、その文化の生成と発展はすべて「模倣」に拠ると考えられるからである。他方で「模倣」によって或る文化が生成そして発展する際、その原動力となるのは目標の完遂を期した人間とその意志である。すなわち意志をもって「先人の生き方を模倣する」ところに文化が生成し発展するのであって、この有様を「エクササイズ」概念で説明づける。

結論かつ討議の対象となる命題は次の通りである。文化とは「生き方の模倣に努めること」であり、構想された議論の外郭より帰結したこの命題の妥当性を聴講者と共に吟味する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：周東 和好（上越教育大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第9会場 (2号館2階22教室)

09:16 〜 09:31

[スポーツ文化-B-02]どのようにしてパルクール（ Parcours ）はパルクール（ Parkour）となったのか（社,史,哲）

エベルの「メトード・ナチュレール」のポストコロニアルな転用に関する一考察

*市井 吉興[1] (1. 立命館大学)

本報告の目的は、国際オリンピック委員会と国際体操連盟がスケートボードやサーフィンに続くオリンピック公式競技への採用を目指すパルクール（ Parkour）の文化的な特性を整理することにある。本報告は、まず、パルクール(Parcours / Parkour)のルーツとなっているジョルジュ・エベル(Georges Hé bert) の「メトード・ナチュレール（ mé thode naturelle）」の要点を確認する。ここでの要点は、まず、パルクール(Parcours)とは障害物を配置した兵士の訓練場を意味する「パルクール・ドゥ・コンバッタント(parcours du combatant)」に語源的、かつ、実践的なルーツがある。つぎに、この訓練場でなされたことは「役に立つために強くあれ」というスローガンのもと、エベルが開発したメトード・ナチュレールという身体訓練方法を通じて、具体的な生活技能に優れ、その能力によって状況を克服する人間を形成することにあった。つぎに、パルクール（ Parcours ）がパルクール（ Parkour）へと「進化」していく背景を、第2次世界大戦後、フランスの大都市のバンリュー（郊外）とそこに建設された(Sité)と称される公営住宅団地をめぐるカルチュラル・ポリティクスに注目し、その分析を試みる。バンリューとは「郊外」を意味するフランス語ではあるが、牧歌的な環境に囲まれた大規模な一戸建て住宅といったアメリカ的なイメージとは異なっている。フランスにおいてバンリューと言えば、「貧困地区」、「犯罪多発地区」、「同化政策への抵抗の場」という「スティグマ」が1980年代から現在にかけて強固なものとなっていく。パルクールの文化的特性を把握するためにも、そこに至る過程とその後、つまり、パルクールが世界中に広まっていく2000年代初頭までのバンリューの歴史的な変遷とそこへの「スティグマ」を確認する。以上のことから、バンリューやシテへのカルチュラル・ポリティクスや「スティグマ」に対する創意と自発性に満ちた若者たちの実践が、パルクール(Parcours)からパルクール(Parkour)への「進化」を可能にしたと結論づける。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：周東 和好（上越教育大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第9会場 (2号館2階22教室)

09:32 〜 09:47

[スポーツ文化-B-03]長野県諏訪市「御柱祭」に見るエクストリームスポーツの要素（人）

伝統スポーツとエクストリームスポーツの接点を捉える

*豊島 誠也[1] (1. 広島大学大学院)

本発表の目的は、長野県諏訪市で7年に一度の大祭と言われる「御柱祭」からエクストリームスポーツの要素を見出し、伝統スポーツをエクストリームスポーツと捉える現象(New Traditional Sports)の分析を試みることである。

エクストリームスポーツとは、サーフィン、スケートボード、ロッククライミング、スカイダイビングなど、危険を伴うアグレッシブな身体活動として、特に若者文化と共に発展してきた背景を持つスポーツを指す。若者を中心に支持を受けてきたエクストリームスポーツであるが、近年は古くから各地域の文化内で継承されてきた伝統スポーツをエクストリームスポーツと捉える現象が確認できる。それは、もともと伝統スポーツに内在していた「極限性」をエクストリームスポーツと同様のものと認識しているためと思われる。

そういった伝統スポーツの極限性に注目する動きは、大手エナジードリンク会社であり、エクストリームスポーツのスポンサー活動を積極的に行う、レッドブルのオンライン動画サイト「 Red Bull TV」においても見ることができる。その中の「 Archaic Festivals」というトピックには、世界各国の過激な要素を含む伝統スポーツの様子がドキュメンタリー方式で詳細に取り上げられており、御柱祭もその一つとして紹介されている。事実、「敢えて危険へ挑む」、「危険へ立ち向かう評価」、「度胸試し」といった要素は、伝統スポーツとエクストリームスポーツの接点、「極限性」として捉えることができる。

本研究では、御柱祭を Red Bull TVの映像資料、現地での聞き取り調査結果から、エクストリームスポーツと捉えられる背景を整理する。そして、そこから極限性の諸要素を顕在化させ、それら要素の細分化及び考察を目的とする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第10会場 2号館4階45教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-04]「インテグリティ（integrity）」の使用事例にみるスポーツの倫理的問題（政）

78国際競技団体公式サイトの分析を通して

*石原 康平[1]、來田 享子[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-05] スポーツ・インテグリティ・インデックス大学版開発に向けた下位尺度の検討（経）

*庄司 直人[1] (1. 朝日大学)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-06] 日本語版IViS（Interpersonal Violence in Sport）の開発と対人暴力が齎す病理性（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第10会場 (2号館4階45教室)

09:00 〜 09:15

[スポーツ文化-B-04]「インテグリティ（ integrity）」の使用事例にみるスポーツの倫理的問題（政）

78国際競技団体公式サイトの分析を通して

*石原 康平[1]、來田 享子[2] (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

スポーツの価値を毀損する事象、主としてスポーツに関わる倫理的問題に対応すべく、近年、インテグリティという語が使用されている。しかし、倫理的問題の多様さに加え、将来起きうる問題への予防的取り組みにも注意が払われているために、この語の定義は確立していない。この状況下でインテグリティという語を使用することは、具体的な解決課題をかえって不明瞭にすることが懸念される。例えば日本ではインテグリティという語に包含される倫理的問題のうち、主としてドーピング、ガバナンスの欠如、暴力・ハラスメントへの対応はみられるが、賭博や八百長への対応には重きが置かれていない。これは、賭けに関する文化的状況が欧米諸国と異なるためであると考えられる。したがって、インテグリティの射程を捉えるためには、このような文化的な差異をも視野に入れる必要がある。本研究では、インテグリティという語の射程を把握するひとつの方法として、国際スポーツ組織におけるこの語の使用状況について検討を行う。 IOCが承認するオリンピックの正式および非正式競技統括団体 (78組織)の公式サイト上で、①語の使用の有無、②使用している場合、どのような倫理的問題を射程に含めているか、について明らかにする。検討の結果、38組織が倫理的問題全体を包含する語として使用し、25組織は特定の倫理的問題のみを射程としていた。また、15組織では語の使用がみられなかった、確認された倫理的問題の上位はドーピング(52組織)、不正操作・八百長(31組織)であった。特定の倫理的問題をインテグリティの射程に含めた25組織では、虐待(15組織)、ハラスメントとドーピング(14組織)が除外され、”Safeguarding”という語で包括する事例が多くみられた。以上から、国際競技団体はインテグリティという言葉を倫理的な問題に対して使用する一方で、選手の安全に関する問題についてはその射程に含まない組織が存在することが明らかになった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第10会場 (2号館4階45教室)

09:16 〜 09:31

[スポーツ文化-B-05]スポーツ・インテグリティ・インデックス大学版開発に向けた下位尺度の検討（経）

*庄司 直人[1] (1. 朝日大学)

近年、スポーツ・インテグリティの保護・強化がスポーツにおける重要課題となっている。実際にスポーツ現場における暴力、虚偽の情報発信に関する報道も散見されている。こうした社会課題に取り組み、解決に向けた具体的対策を展開するためには、スポーツ・インテグリティを評価する指標が必要である。現状では、スポーツ競技団体のガバナンス・コードが公表されるなど進展する過程であるものの、アスリートを暴力やハラスメントなどの脅威から保護するためには、アスリートが身を置く最前線のチームやクラブのインテグリティを客観的に評価する指標が必要であろう。また、スポーツにおいてインテグリティに関する議論は、単に不正と距離を置き負の事柄を抑え込むものとして議論されることが多く、規則、コード、原則、教育、監視、制裁などによる方法論が用いられてきた。しかし、スポーツの価値と原則が個人の発達を促し、パフォーマンスの卓越性を強化することも説かれており（ Ibrahim, 2016）、人のポジティブな側面にも着目した競技パフォーマンスの向上と相互に補完し合うものとしてインテグリティをとらえた指標が必要であるとも考えられる。そこで、本研究では競技スポーツの一翼を担う大学スポーツを対象としたスポーツスポーツ・インテグリティ・インデックス大学版の作成を見据えた下位尺度の検討をおこなった。研究方法は、文献調査および関連領域専門家を対象としたヒアリングであった。その結果、下位尺度の候補として、正義、公正、尊厳、優しさ、卓越性、倫理、モラル、社会性、スポーツマンシップ、平等、責任、行動規範、一貫性、道徳性、説明責任、キャリアの見通し、社会資本が挙げられた。本研究で示された概念以外にも適切な概念があると考えられ、視点を変えた研究が必要である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：加藤 えみか（京都産業大学）
2022年9月1日(木) 09:00 ～ 09:47 第10会場 (2号館4階45教室)

09:32 ～ 09:47

[スポーツ文化-B-06]日本語版 IViS（ Interpersonal Violence in Sport）の開発と対人暴力が齎す病理性（心）

*豊田 隼[1] (1. 山梨大学大学院医工農学総合教育部)

指導者による体罰や不適切な指導ハラスメント等の対人暴力は、喫緊の倫理的問題である。昨今の諸外国研究では、青少年期の被対人暴力経験は成人期における心理的苦痛の増大及び QOL低下と関連し（ Vertommen et al.,2018）、自尊心低下や PTSD症状の上昇にも影響することが明らかにされている（ Parent et al.,2021）。しかし、国内では、こうした負の心理的影響を定量的に検討した知見は未だ僅少である。また従来、自己報告の被対人暴力経験は名義尺度水準の回答が主であり、被経験内容や受傷頻度の具体性に乏しいという測定上課題が残存する。そこで本研究は、網羅的に被対人暴力経験の測定が可能な IViS（ Vertommen et al.,2016）の日本語版の開発を試み、心的外傷性ストレス症状への影響を明らかにすることを目的とした。調査参加者295名のうち欠損を除く大学生196名（*M*=19.65歳；*SD*=1.14）を分析対象とした。日本語版 IViSの開発では CFA及び EFAを繰り返し最終的に18項目から成る心理的・身体的暴力の2因子構造が得られ、ω係数は十分な値を示した。基準関連妥当性の検討では、 IES-R（ Asukai et al.,2002）下位尺度と其々正の相関を示した。競技最高成績を基準とした重回帰分析の結果、心理的暴力被経験は、高等学校期及び大学期の成績高群において侵入・回避・過覚醒症状の全てに正の影響を及ぼしていた。大学期成績高群では過覚醒症状への被経験の交互作用が認められ、単純傾斜分析の結果、心理的暴力被経験が相対的に少ない場合、身体的暴力被経験は症状亢進に関連しない一方、心理的暴力被経験が相対的に多い場合には、身体的暴力被経験により寧ろ症状が低減する傾向が窺えた。こうした結果は卓越した競技成績群に限定的で、スポーツ指導場面における対人暴力が齎す特異な病理性の一端を示唆している。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第11会場 2号館4階46教室

スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長：山口 理恵子（城西大学）

9:00 ~ 9:15

[スポーツ文化-B-07] プロスポーツクラブスタッフのキャリアに関する研究（社）

中間報告　クラブの現状

*上代 圭子[1]、野仲 賢勝[2]、東明 有美[3] (1. 東京国際大学、2. （株）電通、3. 関東学園大学)

9:16 ~ 9:31

[スポーツ文化-B-08] 地域の史実に由来するスポーツ・イベントの可能性（人,史）

「北灘ワンデリング大会」におけるアンケート調査結果から

*山田 理恵[1]、藤谷 雄平[2] (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿屋体育大学大学院)

9:32 ~ 9:47

[スポーツ文化-B-09] パラリンピックと非パラリンピックアスリートの（ディス）エンパワメント（ア）

ソーシャルフットボール選手に着目して

*秋本 成晴[1] (1. 筑波大学)

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表③

座長：山口 理恵子（城西大学）

2022年9月1日(木) 09:00 ～ 09:47 第11会場 (2号館4階46教室)

09:00 ～ 09:15

[スポーツ文化-B-07]プロスポーツクラブスタッフのキャリアに関する研究（社）

中間報告　クラブの現状

*上代 圭子[1]、野仲 賢勝[2]、東明 有美[3] (1. 東京国際大学、2. （株）電通、3. 関東学園大学)

“ DREAM JOB”　多くの候補者の中から選ばれなければならない大人気の職業であることから、スポーツビジネスはアメリカではこのように表現され（ Forbs、2016）、日本でも、「スポーツに関連した仕事に就きたい！」と多くの学生が口にし、プロスポーツクラブに就職を希望する学生は多いが、せっかく就職をできても若い人が数年で辞めていく傾向がある。したがって、日本のプロスポーツクラブのマネジメント職はドリームジョブではなく、数年働くうちに夢から醒めてしまうのかもしれない。

だが、2017年より施行されている第2期「スポーツ基本計画」では、「スポーツを『する』『見る』『ささえる』スポーツ参画人口の拡大と、そのための人材育成・場の充実」が謳われている。また、スポーツ庁が2025年までに「スポーツ産業3倍計画」を掲げ、市場規模を2015年の5.5兆円から2025年には15兆円にすることを目標とするなど、国として日本経済活性化においてスポーツ市場は期待されているなかで、問題となることが考えられる。

新規学卒就職者の3年目までの離職率は32.0%である（厚生労働省、2019）ことから、若者の離職状況はスポーツ界特有の現象ではないのかもしれないが、現在はスポーツ界に由来する要因なのかどうかについては明らかされていない。総じて、国策としてスポーツ界で活躍できるような人材を育成しても、日本のプロスポーツ界では活用・活躍できていないことが推測されるが、その要因は明らかになっていないのである。

そこで本研究では、若者の職場としての視点から、プロスポーツクラブの①職務 ②人材育成プラン（ Career Development Plan： CDP）③離職に着目し、日本のスポーツ組織における若者の就業状況と課題に関する情報を収集し、スポーツ政策の基礎データを提供することを目的とする。そしてその中で、本発表においては、若者が就業する上でのクラブの現状について中間報告を行う。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表③

座長：山口 理恵子（城西大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第11会場 (2号館4階46教室)

09:16 〜 09:31

[スポーツ文化-B-08]地域の史実に由来するスポーツ・イベントの可能性（人,史）

「北灘ワンデリング大会」におけるアンケート調査結果から

*山田 理恵[1]、藤谷 雄平[2] (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿屋体育大学大学院)

地域の歴史的事実や地域ゆかりの人物に由来するスポーツ・イベントは、その地域の持続的な発展においてどのような有用性があるのかー。それについて考察することによって、スポーツを通じた地域開発の意義と可能性を考えるうえでの有効な手がかりを得ることができる。

そのような地域の歴史的事実に基づいて企画されたスポーツ・イベントのひとつに、「北灘ワンデリング大会」（徳島県鳴門市北灘町）が挙げられる。「北灘ワンデリング大会」とは、第一次世界大戦時、徳島県の板東俘虜収容所に収容されていたドイツ兵俘虜たちが遠足や競歩大会で地元の人々との交流を深めた北灘町一帯を、彼らの足跡をたどって歩くという企画で、同町住民有志により2018年に始められた（山田、2019）。当初は年に２回開催されていたが、コロナ禍の2020年、2021年は、年１回、規模を縮小し予防対策を充分行ったうえで開催された。本研究では、主催者や参加者に３回にわたり実施したアンケート調査結果から、同イベントの意義と課題、今後の方向性を検討することを通して、地域に固有のスポーツ・イベントの取り組みや実践がもたらす、地域づくりや地域の持続的発展における可能性について考察することを目的とした。

ところで、地域の歴史的事実に由来し定着している行事の事例として、鹿児島の伝統的運動文化である「妙円寺詣り」が注目される。今日、「妙円寺詣り」は観光化され、秋風の薩摩路は、往事に想いを馳せながら自由に歩く参加者やウォークリーに申し込んで歩く参加者で賑わう。本研究では、この「妙円寺詣り」の場合（山田ほか、2020）との比較もまじえながら考察を行うこととする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 B】口頭発表③

座長：山口 理恵子（城西大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第11会場 (2号館4階46教室)

09:32 〜 09:47

[スポーツ文化-B-09]パラリンピックと非パラリンピックアスリートの（ディス）エンパワメント（ア）

ソーシャルフットボール選手に着目して

*秋本 成晴[1] (1. 筑波大学)

「インクルーシブ社会の創造」を掲げるパラリンピックであるが、パラリンピックは、競技大会であるという特性上、クオリファイや参加資格を有さない多くの障害者を排除することで成り立っており、障害者にとって一見、非常に排他性の高い大会である。故に、そうした障害者をエンパワメントし、積極的に社会に包摂していくことを考えていく上で、大会という枠組みを超えた、パラリンピックムーブメントに期待される役割が大きいのである。しかし、十分な競技力を有しながらも、参加資格を有さないがために大会に出場できない障害者アスリート（＝非パラリンピックアスリート）が、同ムーブメントからどのようにエンパワメントされているのかは、ほとんど検討されてきていない。

そこで、本研究では、非パラリンピックアスリートがパラリンピックからどのようにエンパワメント（を阻害）されているのか、その実態を明らかにすることを目的とした。

上記目的を達成するため、本研究では、精神障害を有する人に親しまれている、ソーシャルフットボールのトップ選手を対象に、インタビュー調査を実施し、得られた逐語録データを、テーマティック・アナリシス法を用いて分析した。

その結果、努力を美徳とするパラリンピックの価値観や、障害者の代表としてパラリンピアンが表象されること、パラリンピアンとの様々な格差等が、彼らのエンパワメントを阻害していることが明らかになった。また、パラリンピックで取り上げられることの多い肢体不自由や全盲といった視覚的に認知し易い障害の理解推進は、精神障害（者スポーツ）の理解に繋がっていかないという声があった。なぜなら、精神障害（者スポーツ）は、健常者にとって体験することが難しく、観戦からだけでは、彼らに必要な配慮やアダプテーション、卓越性を理解することが困難だからである。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第1会場 3号館3階301教室

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長：原 祐一（岡山大学）

9:00 ~ 9:15

[学校保健体育-B-01] 体育授業において痛みを経験することの意味に関する検討（哲）

*中野 大希[1] (1. 筑波大学大学院)

9:16 ~ 9:31

[学校保健体育-B-02] アダプテッド体育・スポーツの観点の定着に向けた小学校の校内研修プログラムの検討（ア）

*村上 祐介[1]、曽根 裕二[2]、安藤 佳代子[3]、萩原 大河[4,5]、小沼 博義[6]、松原 豊[7]、澤江 幸則[8] (1. 順天堂大学、2. 大阪体育大学、3. 日本福祉大学、4. 兵庫県姫路市立水上小学校、5. 広島大学大学院人間社会科学研究科、6. 茨城県立つくば特別支援学校、7. こども教育宝仙大学非常勤講師、8. 筑波大学)

9:32 ~ 9:47

[学校保健体育-B-03] ダンスの実技力や実技指導力に関わる運動観察力の醸成に係る教材開発（教）

*栫 ちか子[1]、浜田 幸史[1] (1. 鹿屋体育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：原 祐一（岡山大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第1会場 (3号館3階301教室)

09:00 〜 09:15

[学校保健体育-B-01]体育授業において痛みを経験することの意味に関する検討（哲）

*中野 大希[1] (1. 筑波大学大学院)

本発表の目的は、体育授業における痛みの経験の意味を検討することである。この検討の背景には、現代社会を生きるわれわれの、痛みに対する態度がある。今日われわれは様々な状況において、痛みを発生させる原因を排除することによって、痛みを経験する機会を取り除いている。この傾向は、体育授業においても見受けられる。例えばドッジボールをする際、弾力性のあるボールを使用するといった対策が講じられている。それが「誰によるものか」を具体的に示すことは容易ではないと考えられる。なぜならそれは、学校体育に関係する多くの人間の無自覚な欲望が複雑に絡み合った結果、生じるものだと考えられる。

もちろん、不快を回避しようとすることは人間の自然な態度であるといえる。そのため、そのこと自体に問題の所在を求めることはできないだろう。しかし、この傾向をわれわれが無批判に許容し続けるならば、体育授業において痛みを経験する機会がますます失われていくことになりかねない。今日の体育授業において失われつつあるこの痛みの経験は、児童・生徒に意味のある事柄を提供してきたことが考えられるのではないだろうか。

本発表では、その意味を検討するために、哲学、特に現象学において論じられてきた身体論を参照したい。なぜなら、自らの身体と、そこにおいて生じる痛みを生きたものとして捉えることによってこそ、その意味を検討することができるからである。これを視点として、体育授業における痛みの経験が、児童・生徒の自己の安定や、さらには他者とのかかわりを可能にすることを論じていく。以上の検討から、体育授業において痛みを回避しながらも、われわれはその態度に批判的なまなざしを向ける必要があることが示されるだろう。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：原 祐一（岡山大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第1会場 (3号館3階301教室)

09:16 〜 09:31

[学校保健体育-B-02]アダプテッド体育・スポーツの観点の定着に向けた小学校の校内研修プログラムの検討（ア）

*村上 祐介[1]、曽根 裕二[2]、安藤 佳代子[3]、萩原 大河[4,5]、小沼 博義[6]、松原 豊[7]、澤江 幸則[8] (1. 順天堂大学、2. 大阪体育大学、3. 日本福祉大学、4. 兵庫県姫路市立水上小学校、5. 広島大学大学院人間社会科学研究科、6. 茨城県立つくば特別支援学校、7. こども教育宝仙大学非常勤講師、8. 筑波大学)

地域の小中高等学校ではインクルーシブな体育授業が求められている。しかし、その実践には課題も多く、不安や戸惑いを抱えている教員も少なくない。この状況を解決するために、筆者らはこれまでアダプテッド体育・スポーツ（以降、アダプテッド）の観点の定着を目的とした研修会の内容を検証してきた。そこでは、障害児の体育指導に関する講義に加えてアダプテッドやインクルーシブに関する演習を組み合わせる「定着研修会コアカリキュラム」の有効性が確認された。しかしこれらの研究は、研修会の時間枠として3時間あるいは6時間を想定したものであったため、例えば約1.5時間の枠で実施される校内研修等には対応できない内容となっていた。また先行研究において、小学校の教員へのアダプテッドの定着化が課題として指摘されていた。そこで本研究では、アダプテッドの観点の定着に向けた小学校の校内研修プログラムについて検証することを目的とした。分析対象は関東地区にある公立のＸ小学校（参加者15名）とＹ小学校（参加者26名）の校内研修とした。研修の内容は、「定着研修会コアカリキュラム」を基盤として「障害児の体育指導の意義と理念」（講義）と「インクルーシブな体育実践」（演習）」を設定した。研修の効果にはアダプテッド・センシティブ尺度（澤江ら，2020；齊藤ら，2021）を使用した。事前事後の比較の結果、両方の校内研修においてアダプテッドに関する望ましい変化を確認することができた。一方で、 X小学校と Y小学校では「障害者のポジティブイメージ」の変化量に差が確認され（ X小学校：事前2.15±0.97，事後3.07±1.08， t(13)=2.14， p=.053；Ｙ小学校：事前2.56±2.84，事後3.28±2.29， t(24)=2.82， p=.009）、研修の時間に応じた目標の明確化や事例の扱いの検討などが今後の課題として示された。アダプテッドの理念を通して「子どもの可能性を引き出す」という視点を大事にしながら、インクルーシブな体育授業について今後検討していく必要がある。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：原 祐一（岡山大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第1会場 (3号館3階301教室)

09:32 〜 09:47

[学校保健体育-B-03]ダンスの実技力や実技指導力に関わる運動観察力の醸成に係る教材開発（教）

*栫 ちか子[1]、浜田 幸史[1] (1. 鹿屋体育大学)

文部科学省（2015）は、教員養成課程の役割として、教員としての最小限必要な資質能力を学生に身に付けさせることが重要であると示している。教員養成を担う大学の実技授業では、実践的指導力を高めるための様々な取り組みが行われているが、指導力の養成には、示範等に必要な運動技能向上のみならず、動きを評価する力、すなわち運動観察力を育成することも重要である。これまで筆者は、大学のダンス授業内において、 ICTを活用した実践（栫ほか，2018）や、技能評価の観点を明示した実践（栫ほか，2019；2020；2021；2022）等、ダンスの指導力を高めるための取組を行ってきた。その結果、運動観察力の育成に関して一定の成果が得られているが、さらにその能力を発展・定着させるためには、授業時間外での学生の自学自修を促すための取組が必要であると考えた。そこで本研究では、ダンスの運動観察力の醸成に係る教材を開発し、その成果と課題を検討することを目的とした。まず、中学校・高等学校の学習指導要領のダンス領域の「技能」の例示の内容を整理し、動きを見る観点を明示する図を作成した。次に各例示について、評価規準及び判定基準（ルーブリック； Ａ・ Ｂ・ Ｃの3段階）を設定し、判定基準に沿って、 Ａ・ Ｂ・ Ｃの3段階の運動技能、それぞれの映像について学生を見本として撮影・編集し、映像コンテンツを作成した。最後に学内の e-learningシステムを活用し、学修課題や動きを見る観点の図、技能の評価規準・判定基準及び映像コンテンツを閲覧できるよう設定した。本教材については、信頼性・妥当性を高めるため、舞踊教育専門家及びスポーツ運動学研究者、体育科教育学研究者によりメンバー・チェッキングを行った。2022年度前期にダンス授業を履修している学生78名を対象に、作成した映像コンテンツを含む教材を活用して、授業時間外学修として課題に取り組むよう促した結果、学生の運動観察力の向上に貢献しうる可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 9:47 | 第2会場 3号館4階401教室

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士舘大学）

9:00 ~ 9:15

[学校保健体育-B-04] 高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）

大学生を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2]、坂本 譲[3]、西脇 雅人[4]、島本 英樹[5]、黒川 修行[6] (1. 東北大学、2. 福岡県立大学、3. 東北学院大学、4. 大阪工業大学、5. 大阪大学、6. 宮城教育大学)

9:16 ~ 9:31

[学校保健体育-B-05] 中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

大学生が思う体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、大坪 健太[2,3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、小椋 優作[6]、春日 晃章[7] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学短期大学部、7. 岐阜大学)

9:32 ~ 9:47

[学校保健体育-B-06] 中学保健の知識定着度および活用意識に影響を及ぼす要因（測）

大学生を対象として

*大坪 健太[1,2]、春日 晃章[3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、東海林 沙貴[6]、小椋 優作[7] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、3. 岐阜大学、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学、7. 中部学院大学短期大学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士舘大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第2会場 (3号館4階401教室)

09:00 〜 09:15

[学校保健体育-B-04]高等学校における体育実技授業の実態調査（教,方）

大学生を対象としたアンケート調査から

*藤本 敏彦[1]、中原 雄一[2]、坂本 譲[3]、西脇 雅人[4]、島本 英樹[5]、黒川 修行[6] (1. 東北大学、2. 福岡県立大学、3. 東北学院大学、4. 大阪工業大学、5. 大阪大学、6. 宮城教育大学)

高等学校における体育実技の意義や実施方法について、これまで評価はほとんど行われていない。そこで、5つの大学の1〜2年生2485名を対象に、高校時代の体育実技について2020年に調査を行った。調査にはグーグルフォームを利用し、885名から回答を得た（回答率35.8%）。体育実技の必要性について、「生徒が意義を理解していなくても必要」53.2%、「生徒が意義を理解した上で必要（知らなくてもなくす必要は無い）」40.6%、「生徒が意義を理解していなければ不要」4.9%、「生徒が意義を理解していても不要」1.4%であり、大学生の約半数はその意義を問わず高校での体育実技が必要と答えているが、一方で約40%の大学生は体育実技の意義の重要性を認識していた。また、「体育実技を行う意義を理解して授業を受けていましたか」という問に対しては、「十分理解していた」18.2%、「ある程度理解していた」49.8%であり約70%は意義を理解していたが、「ほとんど理解していなかった」25.1%、「全く理解していなかった」6.9%であり、約30%は意義を知らずに受講していたことが明らかとなった。体育実技の意義を具体的に問う質問では、64.3%が「覚えていない、分からない」と回答した。さらに、「担当教員の指導について一番近いものはどれですか」という問に対しては、「先生からのアドバイスはあまりなく、見守っていることが多い指導」22.0%、「先生は授業の開始時と終了時のみで授業時にいないことが多く、生徒が中心となって行われていた」6.2%という回答であった。つまり、大学生の約28%は、高校時代の体育実技において教員の積極的な指導を受けていない可能性が示された。本調査結果から、高等学校における体育実技の実施は生徒に指示されているが、その意義の理解や授業方法に改善する余地があると思われる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士舘大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第2会場 (3号館4階401教室)

09:16 〜 09:31

[学校保健体育-B-05]中学校体育に対する嫌悪感特性（測）

大学生が思う体育授業に対する好嫌度との関連

*竹内 花[1]、大坪 健太[2,3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、小椋 優作[6]、春日 晃章[7] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学短期大学部、7. 岐阜大学)

本研究は、体育嫌いに繋がる要因について幅広い視点から検討し、大学生を対象に、中学校体育に対する嫌悪感要因を明らかにすることを目的とした。対象は G県の大学・短期大学に在学する大学生、大学院生および短期大学生278名（男子143名、女子133名）であった。調査方法は、先行研究より体育嫌いの生起にかかわると考えられる諸要因を抽出し、5要因（運動意欲、自己の能力の低さ、比較・評価、指導者への不信感、授業に対する嫌悪感）77項目で構成される質問紙を用いて、調査を実施した。そして、中学校体育に対する嫌悪感に関する因子構造を検討するため、因子分析（斜交回転プロマックス法）を適用し、全因子得点を算出した。また、体育授業に対する嫌悪感要因の性差および体育授業の好嫌度による違いを検討するため、二要因分散分析（性×好嫌度）を適用した。因子分析の結果より、6因子（運動劣等感、教師の指導方略、スキル獲得能力、運動環境、他者評価、非難体験）が抽出された（累積寄与率：61.84%）。二要因分散分析の結果より、6因子全てにおいて、性および体育授業の好嫌度に有意な交互作用は認められなかった。性別においては他者評価因子のみ有意な主効果が認められ、女子は男子よりも評価に対して特に嫌悪感を抱くことが示唆された。そして、体育授業の好嫌度においては6因子全てに有意な主効果が認められた。非難体験因子を除く5因子において、体育授業への愛好的態度の低い者が高い得点を示したことから、愛好的態度が低い者は、授業場面での成功体験の少なさから運動劣等感を抱いたり、教師の指導に対して否定的感情を抱いたりと、体育授業の様々な要因に対して嫌悪感を抱きやすいことが示唆された。一方で、非難体験因子のみ体育授業への愛好的態度の高い者が高い得点を示したことから、愛好的態度の高い者は仲間からの指摘に敏感に反応する傾向があることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題Ｂ】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士舘大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 09:47 第2会場 (3号館4階401教室)

09:32 〜 09:47

[学校保健体育-B-06]中学保健の知識定着度および活用意識に影響を及ぼす要因（測）

大学生を対象として

*大坪 健太[1,2]、春日 晃章[3]、小栗 和雄[4]、篠田 知之[5]、東海林 沙貴[6]、小椋 優作[7] (1. 兵庫教育大学大学院、2. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、3. 岐阜大学、4. 岐阜聖徳学園大学、5. 岐阜協立大学、6. 中部学院大学、7. 中部学院大学短期大学部)

本研究は、大学生を対象に、中学校保健の知識について調査し、その定着度および保健知識の活用意識と保健授業・健康に関する意識および情報取得媒体との関係について検討することを目的とした。対象は、大学および短期大学に通う665名であった。中学校保健の知識の調査には、中学の教科書より学習指導要領の各単元内容に対応させた計72問の問題を作成した。得られた回答より合計正答数を算出するとともに、平均値と標準偏差を用いて3段階に区分した。保健知識の活用意識、中学時代の保健授業への意欲および価値認識、現在の健康関心度の4項目（保健授業および健康に関する意識）と、中学時代の学業成績を問う項目の計5項目についてそれぞれ5段階で回答を得たのち、3段階に再区分したデータを分析に用いた。加えて、健康情報を取得する媒体（医者・専門家、友人・家族、テレビ・ラジオ、インターネット、新聞、書籍）の有無について調査した。保健知識の定着度および活用意識と保健授業・健康に関する意識および情報取得源との関連について検討するため、χ^2検定および残差分析を適用した。

分析の結果、保健知識の定着度と有意な関連が認められた項目は、保健授業への意欲、学業成績および現在の健康関心度の3項目であった。知識の活用意識では、保健授業への意欲、価値認識および健康関心度の3項目において有意な関連が認められた。なお、保健知識と活用意識において有意な関連は認められなかった。また、情報取得媒体の有無との関連について、知識定着度とテレビ・ラジオ、インターネットおよび書籍との間に、知識の活用意識と友人・家族、新聞および書籍との間にそれぞれ有意な関連が認められた。これらのことから、大学生の中学校保健の知識定着度および活用意識の高さの直接的な関連性は弱く、知識の定着度と活用意識の向上にはそれぞれ異なる要因が影響していることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 10:19 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

9:00 ~ 9:15

[競技スポーツ-B-01] 全国トップレベルの競技性をもつ高等学校運動部指導者に求められる概念（方）

所属する生徒へのフォーカスグループインタビューを基に

*清野 隼[1,2]、田丸 尚稔[3,4]、高橋 義雄[1,2] (1. 筑波大学 体育系、2. 筑波大学 スマートウエルネスシティ政策開発研究センター、3. 株式会社アシックス、4. 筑波大学 スポーツウエルネス学学位プログラム)

9:16 ~ 9:31

[競技スポーツ-B-02] 継続的に集積可能な心拍数データに関する実践研究（方,測）

大学女子テニス選手を対象に

*長久保 大樹[1]、福家 瑠都[2]、河村 剛光[3] (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学大学院、3. 順天堂大学)

9:32 ~ 9:47

[競技スポーツ-B-03] 学生アスリートにおける月経の身体・精神症状とパフォーマンスの関連について（方,女性アスリート）

*堀野 博幸[1] (1. 早稲田大学)

9:48 ~ 10:03

[競技スポーツ-B-04] 空手の組手競技における先取点獲得の有効性（方）

東京五輪予選大会における日本代表選手のパフォーマンス分析を参考に

*大徳 紘也[1]、松本 剛志[1]、大石 健二[1] (1. 日本体育大学大学院)

10:04 ~ 10:19

[競技スポーツ-B-05] バスケットボール競技におけるタイムアウトの有用性に関する研究（方）

得点効率に着目して

*浅野 秀太[1] (1. 東海大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 10:19 第3会場 (3号館4階402教室)

09:00 〜 09:15

[競技スポーツ-B-01]全国トップレベルの競技性をもつ高等学校運動部指導者に求められる概念（方）

所属する生徒へのフォーカスグループインタビューを基に

*清野 隼[1,2]、田丸 尚稔[3,4]、高橋 義雄[1,2] (1. 筑波大学 体育系、2. 筑波大学 スマートウエルネスシティ政策開発研究センター、3. 株式会社アシックス、4. 筑波大学 スポーツウエルネス学学位プログラム)

本研究は、高等学校運動部の中でも、勝利や個人の潜在能力の最大限発揮と卓越性の獲得を求めて活動する部活動を、「競技部活動」と定義し、国内トップレベルの競技部活動を行う生徒が指導者に求める概念を、事例的に明らかにすることを目的とした。 対象者は、関東地方の私立 A高等学校硬式野球部（以下、野球部）、ならびに同校駅伝部に所属する生徒とし、選定条件の結果、野球部が8名、駅伝部は6名となった。調査は、フォーカスグループインタビューを採用し、生徒同士の相互作用を引き出すことに留意してインタビューガイドを基に実施した。調査日は、対面での実施許可が学校から得られた日を調整し、野球部が2021年11月28日、駅伝部が2022年1月26日であった。得られた質的データは、 KJ法を用いて分析した。本研究は、株式会社アシックス臨床研究倫理審査の承認を経て実施した（第21-0206号）。分析の結果、野球部においては85の逐語から39のコードが抽出され、28の下位カテゴリ、8の中位カテゴリ、3の上位カテゴリが生成された。また、駅伝部においては74の逐語から27のコードが抽出され、19の下位カテゴリ、5の中位カテゴリ、2の上位カテゴリが生成された。 結論として、家族のような優しさを備え、選手と対等な存在でありながら厳しさを伴い、心理的安全性を共存できる指導者が求められていることが明らかとなった。また、全国トップレベルの競技結果と指導経験に裏付けられ、時代の変化に伴い進化する高度な指導力と、組織マネジメント力を兼ね備えていることも、求められる概念であることが示された。これらは、指導者一人で実現するには限界があり、複数のエキスパートが関わる運動部指導のシステムに関する有効性の検討が必要と考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 10:19 第3会場 (3号館4階402教室)

09:16 〜 09:31

[競技スポーツ-B-02]継続的に集積可能な心拍数データに関する実践研究（方,測）

大学女子テニス選手を対象に

*長久保 大樹[1]、福家 瑠都[2]、河村 剛光[3] (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学大学院、3. 順天堂大学)

【背景】これまでのテニス競技指導現場では、基礎運動能力を把握するためのフィールドテストや、スキルやゲーム特性を分析するための映像分析が多く行われてきた。これらは、特定の限られた場面において集積されたデータであり、縦断的にデータを集積することは手間と莫大な時間がかかる事から敬遠されてきた。しかし、近年ではウェアラブルデバイスの進化により、データ集積に伴う時間の短縮が可能となった。本研究では、日々のトレーニングやゲーム時に心拍センサーを選手に装着させ、指導者がコーチングを行う上で必要なデータの取り方を指導現場における実践から明らかにする事を目的とした。また、その中で、できる限り負担なく現場から継続してデータ集積するための方策についても検討していく。【方法】関東大学テニス1部リーグ所属女子選手18名を対象に、日々のトレーニングおよびゲーム時においてウェアラブルな心拍センサーを装着し、継続したデータ集積を行った。測定期間は、被験者に対して使用方法等のレクチャー後、1週間のテスト装着期間を経て、15日間実施した。その間、研究者からの機器の装着の指示やリマインドに関してのアナウンスは一切行わない事とし、選手のデータ収集状況を調査した。【結果と考察】15日間の測定期間において、平均して12.2±1.2日間の測定が実施された。また、測定実施日数に対し正常にデータ集積が行われた割合は78.2±14.8%となった。比較的継続してデータを集積する事が可能であった一方、一定数の測定不備が確認された。正常にデータ集積が行われなかった理由として、「装着後のデバイス動作不良」「デバイスの電池切れ」等が挙げられた。今後は、より長期的に調査を行い、継続的な集積を可能とする方策や留意点を明らかにしていく必要がある。そして、トレーニング時とゲーム時、競技レベル別における心拍数の差異についても明らかにする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題Ｂ】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）
2022年9月1日(木) 09:00 〜 10:19 第3会場 (3号館4階402教室)

09:32 〜 09:47

[競技スポーツ-B-03]学生アスリートにおける月経の身体・精神症状とパフォーマンスの関連について（方,女性アスリート）

*堀野 博幸[1] (1. 早稲田大学)

＜はじめに＞近年、競技スポーツにおける女性アスリートの活躍が顕著となっている。女性アスリートには、月経、妊娠、出産、育児等、女性特有の課題がある。その中でも、月経周期が、女性アスリートのコンディションに影響を与えることが報告されてきた。またコンディションと月経周期には密接な関係があることが示され（橋本・目崎、2001）、主に月経期と黄体期にコンディションが低下することが多いことが報告されている。

そこで本研究では、女性アスリートを対象に、月経による身体症状と精神症状の関連を調査し、パフォーマンスに与える影響を検討することを目的とした。

＜方法＞対象者：大学体育会活動に所属している女性アスリート141名（有効回答数135名）

手続き：調査は託送方式による無記名自記式質問紙調査法にて実施した。

調査用紙：橋本・目崎（2001）をもとに、月経に関する身体・精神症状に加え競技パフォーマンスへの影響に関する項目をもとに作成した。

＜結果および考察＞

カイ二乗検定の結果、身体症状のある選手では精神症状のある者が有意に多く、精神症状のない者は有意に少なかった。一方、身体症状のない選手では精神症状のある者が有意に少なく、精神症状のない者は有意に多かった（ x^2=9.51, df=1, p<.01）。月経とパフォーマンスの関連では、月経前１週間から月経中の期間に比べ、月経後１週間から月経中間期をパフォーマンス良好期と主観的に捉えている選手が有意に多かった（ F=76.28, df=3, p<.001）。

本研究結果から、月経の身体症状が精神症状に強く影響を及ぼし、月経周期により主観的パフォーマンスが影響されることが示された。月経の症状とパフォーマンスの関連について検討することが今後の課題となる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 10:19 第3会場 (3号館4階402教室)

09:48 〜 10:03

[競技スポーツ-B-04]空手の組手競技における先取点獲得の有効性（方）

東京五輪予選大会における日本代表選手のパフォーマンス分析を参考に

*大徳 紘也[1]、松本 剛志[1]、大石 健二[1] (1. 日本体育大学大学院)

空手の組手競技は複数の動作からなる攻撃並びに防御技術により試合が展開され、有効な技を決めることによる得点数によって勝敗を競うスコア競技である。世界空手連盟（ WKF）が2017年1月に施行したルールに「 SENSHU（先取）」がある。組手競技における「先取」というルールは、同点で試合終了した場合に先取点を獲得していた選手を勝者と判定する内容である。つまり、組手競技における先取点は1点という得点に加え、勝敗の判定基準の一つでもある。このように先取点は他の得点とは異なる価値を有する得点であると同時に、優位に試合を展開していく上でも重要となる。先取点を獲得することにより得られる権利は、他競技にはないルールであり組手競技を戦術的に考察する上で重要と考えられる。 本研究では、先取点を獲得することがその後の試合展開にどのような影響を与えるのかを考察し、先取点の戦術的特徴について明らかにすることを目的とした。分析対象は、2019年から2020年に行われた東京五輪予選大会における日本代表選手の550試合とし、各試合のパフォーマンス分析を行った。分析項目は、先取点を含めた得失点の内容とその時間帯、先取点の獲得率、スコア変動の推移などを分析した。その結果、男女共に勝利した試合の70%以上が先取点を獲得していたことが明らかとなり、先取点を獲得した技の68%が突き技による得点であった。一方で、先取点を獲得したにもかかわらず、その後逆転を許し敗戦した試合の失点技では、上段への蹴り技が78%と顕著に高くなることが明らかとなった。 先取点の有効性を戦術として活かすためには、先取点獲得のための戦術理解と同様にその後の戦術をどのように組み立てるかが重要と考えられる。本研究における先取点獲得時の勝率は男女共に70%を超える値であったが、先取点の獲得率は50%強と比較的低い値を示した。勝率の高い戦術を検討するためには、先取点の獲得率を向上させる戦術プランが必要と考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

競技スポーツ研究部会【課題 B】口頭発表①

座長：田井 健太郎（群馬大学）

2022年9月1日(木) 09:00 〜 10:19 第3会場 (3号館4階402教室)

10:04 〜 10:19

[競技スポーツ-B-05]バスケットボール競技におけるタイムアウトの有用性に関する研究（方）

得点効率に着目して

*浅野 秀太[1] (1. 東海大学大学院)

バスケットボール競技において、タイムアウトは試合前半(第1クォーター・第2クォーター)で2回、試合後半(第3クォーター・第４クォーター)で3回のタイムアウトの申請が認められている。バスケットボール競技のゲーム分析に関する研究は多岐にわたるが、タイムアウトに関する研究は多くは見られない。本研究では、タイムアウト取得前後の得点効率と試合状況を比較する事で、タイムアウトの有用性を明らかにする事とともに、タイムアウト取得の要因を明らかにする事を目的とした。研究方法は、タイムアウトに関するルール改正が行われた2018年以降の試合を対象に試合後半のタイムアウトを収集した。収集したタイムアウト前後の最大5つのポゼッションを分析した結果は、タイムアウト取得前後で得点効率の平均に有意差が認められた。よって、タイムアウトが有効に機能している事が示唆された。また、ゲーム分析に関する先行研究からタイムアウト取得に影響を与えると考えられる項目を抽出して、タイムアウト前後の得点効率との関係性を分析する事でタイムアウト取得に起因する要因について報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 14:00 ~ 15:03 | 第10会場 2号館4階45教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-05] 運動が苦手な子どもの体育の授業における居場所感の重要性（ア）

*花村 春香[1]、澤江 幸則[1]、齊藤 まゆみ[1] (1. 筑波大学)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-06] 運動の苦手な子供における効果的な指導方法について（ア）
メタ分析を用いた検討

*堀田 愛[1]、高橋 達己[2]、齊藤 まゆみ[3] (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 田園調布学園大学、3. 筑波大学体育系)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-07] 身体活動を伴う普通教室での授業に対する中学生の所感（発）

*田中 良[1,2]、野井 真吾[3] (1. 大阪体育大学、2. 日本体育大学体育研究所、3. 日本体育大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-08] 児童の運動行動および体力自己評価とGRITスコアの関係（測,発）

*中野 貴博[1]、四方田 健二[2] (1. 中京大学、2. 名古屋学院大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）
2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第10会場 (2号館4階45教室)

14:00 〜 14:15

[学校保健体育-C-05]運動が苦手な子どもの体育の授業における居場所感の重要性（ア）

*花村 春香[1]、澤江 幸則[1]、齊藤 まゆみ[1] (1. 筑波大学)

本研究は、運動が苦手な子どもの体育の授業における居場所感が体育の授業の印象に及ぼす影響について明らかにすることを目的に、中学生445名を対象にした質問紙調査の結果をもとに因子分析を行ったところ「受容感」と「本来感」、「自己有用感」が抽出された。それぞれの因子と運動の苦手さ（苦手群と非苦手群）を要因とした二元配置分散分析を行った結果、苦手群よりも非苦手群の方が、「受容感」下位群よりも上位群の方が体育の授業の印象が良いことが明らかになった。一方で、「苦手・受容感上位群」と「非苦手・受容感下位群」の間に、体育の授業の印象の差があるとは言えなかった。また、苦手群よりも非苦手群の方が、「本来感」下位群よりも上位群の方が体育の授業の印象が良いことが明らかになった。一方で、「苦手・本来感上位群」と「非苦手・本来感下位群」の間に、体育の授業の印象の差があるとは言えなかった。さらに、苦手群よりも非苦手群の方が、「自己有用感」下位群よりも上位群の方が体育の授業の印象が良いことが明らかになった。一方で、「苦手・自己有用感上位群」と「非苦手・自己有用感下位群」の間に、体育の授業の印象の差があるとは言えなかった。以上の結果から、運動が苦手な子どもにおいても苦手でない子どもにおいても、体育の授業において居場所を感じられることは重要であると考えられた。また、運動が苦手な子どもにおいては、運動の苦手さを軽減することに加え、体育の授業における居場所感を高めていく必要性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第10会場 (2号館4階45教室)

14:16 〜 14:31

[学校保健体育-C-06]運動の苦手な子供における効果的な指導方法について（ア）

メタ分析を用いた検討

*堀田 愛[1]、高橋 達己[2]、齊藤 まゆみ[3] (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 田園調布学園大学、3. 筑波大学体育系)

本研究の目的は、運動有能感の向上に効果的な指導方法を明らかにするとともに、特に運動の苦手な子供に焦点を当てて効果の大きい指導方法を検討することとした。そのためにメタ分析を用いて、運動有能感を測定した研究を統合し、効果量を算出して分析した。その結果、運動苦手群を設定した研究にフォーカスしたところ、本研究でレビューした研究全体と比較して、運動有能感の向上において効果量が高いことが明らかとなり、下位因子の中では特に「受容感」の効果量が最も高いことが示された。そこで運動苦手群の「受容感」において指導方法別にみた効果量を分析したところ、「段階的指導」と「学習者同士の関わり」による効果量が比較的大きいことが明らかとなった。これらの結果をもとに、運動が苦手な子供の効果的な指導方法について考察したところ、「段階的指導」は、通常の運動場面では成功することが難しい運動苦手群にとって、自分に適した課題や環境が段階的に設けられていたことで、自ら運動を行おうという動機付けにつながったのではないかと考えられた。また、「学習者同士の関わり」は、学習者同士が共有できる客観的情報の提供やグループでの活動の場を設けることにより、通常の運動場面では注目されることの少ない運動苦手群が他の学習者から認められていると実感できていたのではないかと考えられた。これらの考察から、体育授業においては、運動の苦手な子供の特性のみに焦点を当てて問題解決しようとするのではなく、その子供を含む集団に働きかけ、受容的な集団を育成することが重要であると考えられた。その実践方法のひとつとして、個人と環境、課題の３要素の関連性を重視したアダプテッドのエコロジカルモデルの視点が必要ではないかと考えるに至った。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第10会場 (2号館4階45教室)

14:32 〜 14:47

[学校保健体育-C-07]身体活動を伴う普通教室での授業に対する中学生の所感（発）

*田中 良[1,2]、野井 真吾[3] (1. 大阪体育大学、2. 日本体育大学体育研究所、3. 日本体育大学)

学校生活中の座位行動を減らす介入には、「立ち机を導入する（ Kidokoro et al., 2019）」「座学授業に身体活動を組み込む（ Norris et al., 2020）」等が挙げられる。これらの介入は、身体活動量を増やすだけでなく、疲労感を減少させ、実行機能課題成績を向上させる（田中・野井、2020）。また、授業担当教諭が授業に組み込まれた身体活動に子どもと一緒に参加することが子どもの活動強度に与える影響についても検討されている（ Errisuriz et al., 2021）。先行研究は、学校生活中の座位行動を減らすことが子どもの活動量や強度、実行機能課題成績等に与える影響を報告しているものの、参加者の子どもが授業中に身体活動を行うことをどう感じたかは明らかにしていない。そこで本研究では、身体活動を伴う授業に対する中学生の所感を明らかにすることを目的とした。 東京都 A中学校の1年生4クラス130名で、そのうち2クラスを対照クラス、2クラスは介入クラスとした。身体活動を伴う授業の実施と調査を行ったのは、2021年3月24日の1〜4限であった。介入クラスの教諭には、「授業中に行う活動は5〜10分間実施し、10分を超えない」よう依頼した。調査は、記名式調査票を用いて、授業前後に普段または今日の「授業中にからだを動かしたり、伸ばしたりしたくなることがあったか」「授業には集中できたか」等を尋ねるとともに、「今日の授業中にあなたのからだと心におこったことや感じたこと」「今日の授業でのクラスの雰囲気について感じたこと」等について自由記述にて回答を求めた。本研究の結果、介入クラスにおいて普段は授業中にからだを動かしたいと感じていたものの、介入授業中には感じなかったと回答する者が多かった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）
2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第10会場 (2号館4階45教室)

14:48 〜 15:03

[学校保健体育-C-08]児童の運動行動および体力自己評価と GRITスコアの関係（測,発）

*中野 貴博[1]、四方田 健二[2] (1. 中京大学、2. 名古屋学院大学)

［背景・目的］子どもの運動促進に関しては、体力・運動能力の向上のみでは不十分であると考える。つまり、社会的、教育的な効果を見込める運動活動へと変えていかなければ、物資的に満たされた現代において、子どもの体力・運動能力や運動活動の重要性は低下していくことが予想される。本邦では学校体育が根付いていることからも、子どもの運動や体育的活動が、社会的、教育的効果を期待し得るものであると考えられていることは間違いない。近年、社会的成功との強い関連が実証された能力である GRITは、社会的な能力の代表とも言える。我々は、 GRITは子どもの運動実施を通して育むことが期待できる能力であると考えている。そこで、本研究では児童の運動実施、体力の自己評価、運動への嗜好性などと GRITスコアとの関連性を検討することを目的とした。［方法］1〜6年生の児童5856名を対象に、平日および週末の一日の平均運動時間、体力の自己評価、運動嗜好性および、8項目で構成される GRIT尺度を調査した。先行研究に倣い、 GRIT尺度の調査データに因子分析を適用し、2つの下位尺度（ GRIT根気、 GRIT一貫性）の存在を確認した。次に、 GRIT全体および各下位尺度のスコアを、主たる構成項目の単純和により算出した。続いて、各 GRIT尺度の性別の平均値を分岐値とした2群を構成し、運動時間の差を t検定により検討した。さらに、体力の自己評価および運動嗜好性による各 GRITスコアの違いを t検定および分散分析により検討した。［結果・考察］各 GRITスコアが良好な児童ほど、運動時間が有意に長いことが確認された。但し、 GRIT一貫性スコアだけは、平日の運動時間に有意な差が確認されなかった。体力自己評価が5段階評価で3以上の児童において各 GRITスコアが有意に高かった。また、運動への嗜好性が良好な児童ほど各 GRITスコアが高いことも確認された。以上より、児童期の運動実施や体力と GRITスコアには有意な関係があることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 14:00 ~ 15:03 | 第11会場 2号館4階46教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-09] ボール運動系領域におけるICT機器活用に関する研究（2）（教）

*藤田 育郎[1] (1. 信州大学教育学部)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-10] 体育授業に適用できる状況判断力の評価方法の検討（教）

*中島 友樹[1]、後藤 幸弘[2] (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-11] ノリ感を重視したリズムの乗り支援の検討（教,方,バ,心）

*小島 理永[1]、松井 敦典[2]、伊藤 京子[3] (1. 神戸女子大学、2. 鳴門教育大学、3. 京都橘大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-12] 現代的なリズムのダンスにおける基本動作「ダウン」と「アップ」の学習方法に関する実践提案（教）

反省分析によって提案された実践方法の有効性と課題の検討

*川瀬 雅[1]、長谷川 晃一[2] (1. 環太平洋大学、2. 上越教育大学大学院　芸術・体育学系)

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第11会場 (2号館4階46教室)

14:00 〜 14:15

[学校保健体育-C-09]ボール運動系領域における ICT機器活用に関する研究（2）（教）

*藤田 育郎[1] (1. 信州大学教育学部)

本研究は、ボール運動・球技領域を対象として、学習者の「できる」と「わかる」を結びつけることに貢献し得る ICT活用の視点について、実際の授業実践の成果から探究していこうとするものである。
本研究の第一報において、ネット型・連携プレイタイプのゲームを対象としたゲーム記録アプリケーションの開発を試み、それを活用した小学校５年生を対象とする授業実践の成果について検討した。その結果、単元を通したゲームパフォーマンスの向上が見られ、ゲーム記録アプリを用いた作戦タイムにおける子どもたちのコミュニケーションの内容も単元経過とともに課題解決に直結する内容が増加していくことが確認できた。一方で、単元を通して活用することでゲーム記録アプリの課題点も明らかになった。課題として挙げられたのは、ゲーム記録アプリの機能面の充実などであった。
第二報である本報告においては、開発中のゲーム記録アプリを活用した中学校３年生を対象とするネット型・連携プレイタイプのゲームの授業実践の成果について検討した。任意に抽出した１チームを対象として、ゲームパフォーマンスおよび作戦タイムにおける発言内容を集約し、作戦タイムにおける発言内容が実際のゲームパフォーマンスにどのように反映されているかを事例的に検討した。その結果、単元の進行に伴うゲームパフォーマンスの向上が確認できた。また、このことの背景には、生徒たちがゲーム記録アプリを活用することによって自チームのプレイの実態を認識するとともに、課題解決に向けて創出されたプレイの仕方やアイデアがゲームパフォーマンスに反映されていたことによるものであることが確認できた。これらのことより、ゲーム記録アプリの活用はネット型・連携プレイタイプのゲーム学習に一定の効果を有していることが確認できたと考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第11会場 (2号館4階46教室)

14:16 〜 14:31

[学校保健体育-C-10]体育授業に適用できる状況判断力の評価方法の検討（教）

*中島 友樹[1]、後藤 幸弘[2] (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

本研究の目的は、バスケットボールを例に体育授業に適用できる状況判断力の評価方法を示すことである。これまで、状況判断力の評価では、コートと人を俯瞰し模式的に示した図や、プレーヤー目線での状況を示した写真、プレーが撮影された動画を視聴させ、その状況でどのような判断をするのかについて回答させる方法が多く用いられてきた。しかし、これらの方法による評価は、運動の遂行を伴わないことから、実際にプレーした際の状況判断と必ずしも同一のものとはならない。また、人・時間・機材的な資源が限られる体育授業に適用するには困難な方法も存在する。

そこで、実際の状況判断に近似し、かつ体育授業で実施可能な評価方法を選定するため、競技レベルの異なる中学生を対象として、攻撃側の意図が反映されやすいアウトナンバーでの攻撃場面（攻撃３人、守備２人）を中心として構成された試合状況を設定し、３つの方法（①コートと人を俯瞰し模式的に示した図、②プレーヤー目線での状況を示したイラスト、③実際にプレー）で回答させ、③との関係について分析した。さらに、判断の根拠について、半構造化インタビューによって得られたことばを分類するとともに、 KH Coderを用いた計量テキスト分析によって集計・可視化した。また、集団的技能について、用いたプレーパターン・シュートまでの手数等から分析した。

その結果、①と③で用いたプレーパターンについて、競技レベルの低い者は隔たりが大きく、競技レベルの高い者は隔たりの小さい傾向のあることが示唆された。また、競技レベルの高い者の半構造化インタビューからは、②のイラストでは守備の意図が読み取りにくく、判断の根拠が示しにくいという回答も散見された。これらのことから、状況判断能力の評価方法は、競技レベルによって異なる可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第11会場 (2号館4階46教室)

14:32 〜 14:47

[学校保健体育-C-11]ノリ感を重視したリズムの乗り支援の検討（教,方,バ,心）

*小島 理永[1]、松井 敦典[2]、伊藤 京子[3] (1. 神戸女子大学、2. 鳴門教育大学、3. 京都橘大学)

平成20年改訂学習指導要領で「現代的なリズムのダンス」が導入されてから10年以上が経つ。しかし、そのダンスの技能にあたる「リズムの乗り」については、「リズムに乗る」そのものに関する見解が散見されている（宮本，2011；松尾，2015；原田，2018）。この「現代的なリズムのダンス」は他のダンス内容に比べ実施率が高く、生徒らに人気が高いダンスである（中村・浦井，2006）。一方で、苦手な生徒の理由の一つには「リズムに乗れない」ことが指摘されている（松尾，2015）。そこで本研究では、音楽や音楽心理学の分野で用いられている「ノリ」に着目した。「ノリ」とは演奏時や鑑賞時の楽しさや高揚感、一体感といった気分の他、リズムパターンによって体を動かしたくなる音楽や演奏時の音楽表現に用いられる。また「ノリ」は、西洋音楽でのグルーブ（ Groove）と同類とされている（ Etani et al., 2018）。そこで本研究では、気分がノッて踊る、すなわちノリノリで踊ることをノリ感と定義し、ノリ感の有無やリズムの乗りでの屈伸動作（ダウン）の動作特徴量より差異の検討を行った。実験参加者にはダンス専門家2名〔世界大会（ FISU）1位受賞者およびダンス専門教員〕に125bpmのリズム音にて3つの異なる条件（無感情、リズムの乗り、気−−−−分のノリ）でのダウン動作について、マーカレス骨格推定ソフトウエアを用いた動作解析を行った。その結果、無条件に比べリズムの乗りや気分のノリでのダウン動作では、無感情に比べ振幅が大きく屈伸時のタイミングが音より速く行われていることが示された。さらに半構造化インタビューの結果、気分のノリのダウン動作は、自由や開放的に実施しやすいことが明らかになった。これらの結果より、ノリ感を重視した指導はリズムに乗って全身で踊る一助となる可能性が示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第11会場 (2号館4階46教室)

14:48 〜 15:03

[学校保健体育-C-12]現代的なリズムのダンスにおける基本動作「ダウン」と「アップ」の学習方法に関する実践提案（教）

反省分析によって提案された実践方法の有効性と課題の検討

*川瀬 雅[1]、長谷川 晃一[2] (1. 環太平洋大学、2. 上越教育大学大学院　芸術・体育学系)

本研究の目的は、長谷川（2022）が実践の反省分析によって提示したダウンの指導方法の有効性や課題を検証することである。検証は、中学校及び高等学校教諭免許状（保健体育）の取得を試みる学生51名を対象にし、倫理審査の承認と参加者へのインフォームドコンセントを得て実施した。検証においては、現代的なリズムのダンスにおける授業を想定した「ダウン」と「アップ」の動作習得を3回の授業にわたって指導した。ダウンの指導は長谷川が実践の反省分析によって提示した指導方法を実践し、その方法を転用してアップの指導をした。各授業回終了後に、授業についての質問紙調査を実施し、ダウンとアップの習得状況を10段階で自己評価することと動作習得にあたり難しいと感じた点と新たに得たコツを記述することを求めた。記述内容をクラスターごとに分類し、授業の様子を撮影した動画と合わせて反省分析の資料とした。

結果として、ダウンとアップは基本の動きではあるが、動きを統合することに困難を感じていることが明確になった。習得状況の自己評価の平均値は授業回を重ねるごとに向上し、標準偏差は減少した。コツに関しては授業回を重ねるごとに具体的になり、何かに例えることをコツとする記述が増えた。「膝でリズムをとることは容易にできる」、「腕或いは肘の動きが膝の曲げ伸ばしと連動しない」、「2つ目の指示まではできるが指示が3つになると混乱する」という記述が複数あったことから、長谷川が提案したようにアップとダウンの動作を step1から step3まで区切って段階的に習得していくことは有効だと考えられる。しかしながら、膝はリズムとテンポに合わせて動かせているが、腕の動きが加わることで全体の動きを統合できなくなる。「腕を動かす」と同時に「胸を動かす」ことは最後まで課題が残った。結果の詳細については当日発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 14:00 ~ 15:03 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

14:00 ~ 14:15

[学校保健体育-C-01] 中学校体育教師における一般的因果律志向性および基本的心理欲求の充足・不満が欲求支援・阻害行動に及ぼす影響（教）

*寺岡 英晋[1]、岡出 美則[1] (1. 日本体育大学)

14:16 ~ 14:31

[学校保健体育-C-02] 児童の「伝える力」を育成する教師の活動に関する研究（教）

跳び箱運動にみる学習場面の設定と教師の発言について

*徳永 隆治[1] (1. 安田女子大学)

14:32 ~ 14:47

[学校保健体育-C-03] 中学校の創作ダンス授業における指導未経験教師の教師行動に関する事例研究（教）

指導上の困難点と課題の検討

*君和田 雅子[1] (1. 順天堂大学)

14:48 ~ 15:03

[学校保健体育-C-04] 発達障害児に対する運動指導場面における指導者の関わりに関する研究（ア）

*佐藤 豪[1]、村上 祐介[2]、渡 正[2]、尾高 邦生[2]、渡邉 貴裕[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第5会場 (2号館4階4E教室)

14:00 〜 14:15

[学校保健体育-C-01]中学校体育教師における一般的因果律志向性および基本的心理欲求の充足・不満が欲求支援・阻害行動に及ぼす影響（教）

*寺岡 英晋[1]、岡出 美則[1] (1. 日本体育大学)

【緒言】子ども達のメンタルヘルスに関する問題を背景に、学校体育において情意領域（ Affective domain）の学習成果への注目が高まっている。本研究では、情意領域の学習成果に影響を与える体育教師の取り組みに関して、自己決定理論に基づいた欲求支援・阻害行動に着目した。しかし、欲求支援行動を実践もしくは阻害行動を抑制できる教師の特性についてあまり知られていないことが課題である。そこで、欲求支援・阻害行動に影響を与える体育教師の個人特性について検討することとした。本研究では、自己決定理論を踏まえ、教師自身の仕事に対する自律性、有能感、同僚教員や生徒との関係性から構成される基本的心理欲求の充足及び不満と、教師自身の一般的因果律志向性がどの程度欲求支援行動に影響を与えているか検証することを目的とした。【方法】教師の欲求支援・阻害行動を評価する質問紙は Situations-in-School-PE(SIS-PE)を用いた。 SIS-PEは、教師の欲求支援行動として「自律性支援」と「構造」があり、欲求阻害行動として「統制」と「放任」の計4つの下位尺度で構成されている。教師の個人特性を規定する変数としては、一般的因果志向性尺度と基本的心理欲求の充足・不満尺度の日本語版を用いた。調査は中学校体育教師を対象として Webアンケートで実施した。ランダムに抽出した東京都の公立中学校の学校長宛てに研究参加協力を依頼し、これまでに32名（男性27名、女性5名）から調査協力への同意を得た。データ分析は、 SIS-PEの各下位尺度を従属変数、各個人要因の変数を独立変数とした回帰分析を行った。【結果】回帰分析の結果、自律志向性から自律性支援行動、構造行動、放任行動を推定する有意な回帰式が得られた。さらに、関係性への欲求不満が放任行動と有意な関連を示した。本研究の結果は、中学校体育教師にとって、仕事に対する自律性と職場における良好な関係性が、体育授業における欲求支援・阻害行動に影響を及ぼす可能性を示唆した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第5会場 (2号館4階4E教室)

14:16 〜 14:31

[学校保健体育-C-02]児童の「伝える力」を育成する教師の活動に関する研究（教）

跳び箱運動にみる学習場面の設定と教師の発言について

*徳永 隆治[1] (1. 安田女子大学)

現行の学習指導要領において体育科の目標に「他者に伝える力」の育成が挙げられている。児童相互の伝え合いはこれまでも体育学習に見られてきたが、それをすべての子どもの学習活動として意図的に高めていくためにどのような指導が求められるかを追究したい。筆者はこれまで低学年及び中学年のボールゲーム、高学年の体つくり運動の学習を対象に、授業中の教師の活動及び児童の学習活動を録画と音声録音によって収録し、その分析から児童の伝え合いを引き出していると考えられる教師の活動を事例的に明らかにした。その一つに、本時学習課題へ児童の意識を向け、思考・判断を深める発問や、児童個人やグループの活動に対して肯定的に評価する言葉かけなどの教師の発言が挙げられる。教師の発言をもとに児童相互の伝え合いが進み、学習が本時目標に向けて深められていった。指導目標を踏まえた教師の意図的な発言が、児童の学習課題の明確化や学習意欲の向上に効果をもたらすとともに、児童の「伝える力」を養う契機になっていると考えられた。しかし、このような効果はすべての体育学習において認められるか、異なる学年や領域の授業を対象にした追究が不可欠である。本研究では中学年の跳び箱運動の学習を対象に主題に迫った。教師の発問や評価の言葉かけが児童相互の伝え合いを促している実態とともに、児童相互に見合う・評価し合う学習の場面を設けることで、児童の伝える活動が活性化されていることが確かめられた。他領域の体育科学習と同様に教師の活動の効果がみられたが、跳び箱運動などのクローズドスキルの学習では、ボールゲームなどのオープンスキルの学習に比べ、教師の発言が児童相互の伝え合いを促すためにより一層、効果的な働きかけになるのではないかとも考えられ、運動の特性を踏まえて教師の活動の在り方を検討することが重要ではないか。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第5会場 (2号館4階4E教室)

14:32 〜 14:47

[学校保健体育-C-03]中学校の創作ダンス授業における指導未経験教師の教師行動に関する事例研究（教）

指導上の困難点と課題の検討

*君和田 雅子[1] (1. 順天堂大学)

【背景と目的】

中学校のダンス領域の内容として創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスの3つがあるが、中でも創作ダンスは「指導が難しい」と感じている教師が多い（中村、2013）と報告されている。体育・スポーツを専門とし、一定の目標に向かって「競う」「鍛える」ということに慣れ親しんできた体育教師の多くは、「多様に表現する」ことを目標とする創作型ダンスの授業の指導において、やりづらさや困難さを感じることが推察される。

そこで本研究は、ダンス指導未経験の教師が創作型ダンスの授業のどのような場面に困難を感じるのかについて分析するとともに、指導力向上のための課題を検討することを目的とした。

【方法】

授業者は、ダンス指導未経験の教師１名（教職2年目、男性）であった。学習指導書に掲載された単元計画に則った中学校１年生の創作ダンス授業6時間の単元での教師行動を分析対象とした。

①授業中の教師行動を動画及び音声で記録し、同校の熟練教師（ダンス指導経験３３年）による同単元の記録動画の授業展開と比較した。

②授業前半の直接的指導の場面に着目し、未経験教師と熟練教師の発した指導言語のカテゴリー別発話数比較を行った。

③授業者に、授業のどのような場面で困ったか、「学習目標と内容の理解」「言葉かけ」「フィードバック」などの項目について半構造化インタビューおよびアンケートを実施し、①②の結果と合わせて、未経験教師の困難点と課題を分析した。

【結果】

未経験教師は創作ダンスの教材解釈が深まっておらず、特に「指導の手順」に混乱が見られた。また、生徒の動きを引き出すための「言葉かけ」が少なく、「フィードバック」も不十分だった。授業者本人も、授業で押さえるべき技能をはっきりと把握できずに授業に臨むことに困難点を感じていた。以上から、「学習目標と内容の理解」が未経験教師にとって優先すべき課題であると示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第5会場 (2号館4階4E教室)

14:48 〜 15:03

[学校保健体育-C-04]発達障害児に対する運動指導場面における指導者の関わりに関する研究（ア）

*佐藤 豪[1]、村上 祐介[2]、渡 正[2]、尾高 邦生[2]、渡邉 貴裕[2] (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

障害のある人が運動・スポーツ活動を行うにあたり、それぞれの障害特性等に応じて適切な指導をすること、すなわち個々人の特性に合わせた指導が重要であるとされている。知的障害および発達障害のある子ども（以下、発達障害児）においても、子ども一人一人の特性に応じた関わりが重要であるとされているものの、それが実践現場でどのように行われているのかが明確でなく、実践現場における具体的な指導方法を検討する必要がある。子どもを対象とした運動指導は指導者と子どものコミュニケーションによってなされていることから、個々人の特性に合わせた指導も人々のコミュニケーションによってなされていると推測できる。 そこで本研究では、発達障害児に対する個々人の特性に合わせた指導がどのように行われているかについて、指導者と子どものコミュニケーションに焦点を当て、検討することを目的とした。研究方法は、 A県の個別の運動指導を行っている放課後等デイサービス事業の活動を対象に、指導場面のビデオ撮影及び参与観察を行い、質的に分析した。スポーツにおけるコーチングを指導者と選手間のコミュニケーションとして捉え分析した渡（2020）の研究を参考に、運動指導における修正実践に着目し分析した。 結果として、発達障害児の運動指導場面においても、①修正の開始、②間違いの提示、③解決策の提案という修正連鎖の基本的な連鎖が確認された。また、②間違いの提示の際に、同時に肯定的な評価を行うという異なる連鎖も確認できた。以上のことから、発達障害児に対する運動指導においては、基本的な修正実践に加えて、肯定的な評価を伴う特徴的な修正実践を行っている可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2022年9月1日(木) 14:00 ~ 15:03 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

14:00 ~ 14:15

[健康福祉-C-01] 生活環境下における受光と主観的睡眠状況との関係（発）

*湊谷 勇次[1]、鹿野 晶子[1]、野井 真吾[1] (1. 日本体育大学)

14:16 ~ 14:31

[健康福祉-C-02] 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣は著しく乱れていた（測）

*山田 孝禎[1]、青木 宏樹[2]、野口 雄慶[3]、杉浦 宏季[3]、近藤 雄一郎[1]、出村 友寛[4]、内田 雄[5]、山次 俊介[1]、野田 政弘[4] (1. 福井大学、2. 福井工業高等専門学校、3. 福井工業大学、4. 仁愛大学、5. 仁愛女子短期大学)

14:32 ~ 14:47

[健康福祉-C-03] コロナ禍における児童の生活習慣が心理・社会的側面に与える影響（測）

*木部 聖[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

14:48 ~ 15:03

[健康福祉-C-04] コロナ禍における児童の運動頻度および運動時間が心理・社会的側面に及ぼす影響（測）

*冨士本 有希[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第1会場 (3号館3階301教室)

14:00 〜 14:15

[健康福祉-C-01]生活環境下における受光と主観的睡眠状況との関係（発）

*湊谷 勇次[1]、鹿野 晶子[1]、野井 真吾[1] (1. 日本体育大学　)

目的：日本では、子どもの睡眠状況の悪化が問題視されている。日中の受光はメラトニンリズムの位相を前進させ、日没後の受光はそれを後退させる。また、同程度の照度であっても受光のタイミングによってその影響が異なることも確認されている。しかしながら、受光と睡眠状況との関連については実験室レベルでの検討が数多く行われている一方で、生活環境下における検討は実施されていない。そこで本研究では、子どもの生活環境下における受光と主観的睡眠状況との関係を明らかにすることを目的とした。 方法：対象は小学4年生から中学2年生までの32名であり、調査は平日、休日、キャンプ期間を含む2019年及び2021年の７月から8月の期間に実施された。 調査期間中の受光は、環境センサ2JCIE-BL（オムロン株式会社製）を用いて起床直後から就床直前まで５分間ごとに測定した。一方、調査期間中の主観的睡眠状況（寝つき、中途覚醒、睡眠の質、朝の眠気）は、就寝前に5件法で評価した。分析では、最初に受光量のデータをクリーニングした後、日没までの18時台までは3,000lux以上、日没後の19時台以降は1,000lux以上の高照度受光時間を1時間ごとに算出した。次に、平日、休日、キャンプ期間の睡眠問題あり群となし群の割合を算出した。その上で、睡眠問題あり群となし群とにおける1時間ごとの高照度受光時間を対応のない t検定により比較した。 結果：睡眠問題あり群となし群の高照度受光時間を比較した結果、寝つきは8、9、10、15時台で、睡眠の質は10時台で、朝の眠気は８、9、10、11、12、13、14時台でなし群の高照度受光時間が有意に長い様子が確認された。対して、寝つきの17、18時台、中途覚醒の13時台は、なし群に比してあり群の高照度受光時間が有意に長い様子が確認された。一方、19時台以降には両群間の有意差は認められなかった。 付記：本研究は令和3年度日本体育大学学術研究補助費（代表：野井真吾）の援助を受けて実施された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第1会場 (3号館3階301教室)

14:16 〜 14:31

[健康福祉-C-02]新型コロナウイルス感染症（ COVID-19）の感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣は著しく乱れていた（測）

*山田 孝禎[1]、青木 宏樹[2]、野口 雄慶[3]、杉浦 宏季[3]、近藤 雄一郎[1]、出村 友寛[4]、内田 雄[5]、山次 俊介[1]、野田 政弘[4]
(1. 福井大学、2. 福井工業高等専門学校、3. 福井工業大学、4. 仁愛大学、5. 仁愛女子短期大学)

本研究の目的は、令和2年3月から5月にかけての COVID-19感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣特性を明らかにすることであった。 A県 B市の全小学生（5,033名）の保護者が、学校再開1ヶ月後に、休校前および休校中の児童の生活習慣について回答した（回収率92.3%）。欠損や異常値が除外された4,246名の有効回答（有効回答率91.3%）のうち、休校前に体調不良の訴えがなかった児童3,594名を分析対象とした。そのうち3,335名は休校中も体調不良を訴えなかったが（ H群）、259名は月に1回以上体調不良を訴えた（ S群）。休校前の睡眠の質および友人と会う頻度のみ、両群間に有意差が認められたものの、その他の生活習慣項目に有意差は認められなかった。休校前の両群の生活習慣は概ね同様であったと示唆される。他方、睡眠時間を除く両群の休校中のいずれの生活習慣も、休校前より有意に乱れていた。つまり、両群とも休校中の生活習慣は、学習時間が有意に伸びたものの、運動頻度・時間および屋外での活動は減り、屋内でのテレビ視聴時間やスマートフォン使用時間が増え、食事や睡眠が不規則になった。運動頻度、睡眠時間および学習時間を除く休校中の S群におけるいずれの生活習慣も、 H群より有意に乱れていた。上述のとおり、両群とも休校前よりも休校中の生活習慣が有意に乱れたが、その程度は S群において顕著だったと示唆される。以上から、 COVID-19感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中、児童らの学習時間は延伸したが、運動頻度・時間および屋外での活動は減り、屋内でのテレビ視聴時間やスマートフォン使用時間が増え、食事や睡眠が不規則になった。これらの乱れは、休校中体調不良を訴えた児童において顕著だったため、児童の体調不良と密接に関係していると示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第1会場 (3号館3階301教室)

14:32 〜 14:47

[健康福祉-C-03]コロナ禍における児童の生活習慣が心理・社会的側面に与える影響（測）

*木部 聖[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

本研究は、コロナ禍における児童の生活習慣と心理・社会的側面との関係について検討することを目的とした。対象は G県の公立小学校に通う児童2042名（1・2年生613名、3・4年生667名、5・6年生762名）であった。研究方法は心理・社会的側面の測定項目として、肯定的感情、否定的感情、社会性および集中力の4項目(5件法）を、生活習慣に関して、朝食摂取、睡眠時間、主観的睡眠感およびスクリーンタイム(以下 ST)の4項目をそれぞれ質問紙により調査し、回答を得た。生活習慣4項目を独立変数、心理・社会的側面4項目をそれぞれ従属変数とする一元配置分散分析を適用し、有意な主効果が認められた場合は多重比較検定を行った。分析は低学年・中学年・高学年に分けて行った。分析の結果、全ての学年において朝食摂取と肯定的感情、否定的感情、社会性および集中力との間に有意な差が認められた。毎日朝食摂取をしている児童は朝食摂取をしない日がある児童と比べて肯定的感情、社会性および集中力は高く、否定的感情は低かった。睡眠時間については、睡眠時間が長い児童の肯定的感情、社会性および集中力は高く、否定的感情は低い傾向を示した。主観的睡眠感については、特に中・高学年において、ぐっすり眠ることができている日数の多い児童ほど心理・社会的側面が安定していることが推察された。 STについては、特にスマートフォン所有率が低い低学年において、 STが長い児童ほど心理的・社会的側面は不安定な傾向にあり、感染症対策としてのステイホームによる自宅活動時間の増加が関連していると考えられた。以上のことから、コロナ禍により生活様式が大きく変化せざるを得ない状況下においても、毎日朝ご飯を食べること、睡眠不足に陥らずにぐっすり眠ること、過度な STは避けることなど規則正しい生活習慣を送ることは、心理・社会的側面の安定に対して重要であることが推察された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：田中 愛（明星大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第1会場 (3号館3階301教室)

14:48 〜 15:03

[健康福祉-C-04]コロナ禍における児童の運動頻度および運動時間が心理・社会的側面に及ぼす影響（測）

*冨士本 有希[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 岐阜大学)

本研究は、コロナ禍における児童の運動頻度および運動時間と心理・社会的側面との関係を検討することを目的とした。対象は、 G県の公立小学校に通う児童2042名(低学年1、2年生613名、中学年3、4年生667名、高学年5、6年生762名)であった。

研究方法は、運動習慣に関して、運動頻度および運動時間の2項目（4件法）を、心理・社会的側面の測定項目として、肯定的感情、否定的感情、社会性および集中力の4項目（5件法）をそれぞれ質問紙により調査した。

運動習慣2項目を独立変数、心理・社会的側面をそれぞれ従属変数とする一元配置分散分析を適用し、有意な主効果が認められた場合には多重比較検定を行った。分析は低学年・中学年・高学年に分けて行った。

分析の結果、全ての学年において運動頻度と肯定的感情、否定的感情、社会性および集中力との間に運動頻度の違いによる有意差が認められた。運動時間について、肯定的感情との間には高学年においてのみ、否定的感情では低学年と高学年においてそれぞれ有意な差が認められた。社会性については全ての学年において運動時間による有意差は認められなかった一方で、集中力においては全ての学年において運動時間の多寡による有意差が認められた。

これらのことから、コロナ禍における児童の運動習慣を心理・社会的側面との関係は運動時間よりも運動頻度がより強く、運動頻度が高い児童ほど心理・社会的側面は安定していることが示唆された。また、学年に関わらず運動時間が短い児童は集中力に欠ける傾向にあることが推察された。高学年における運動頻度および運動時間との関係が強かったことから、発達レベルが高い高学年児童の運動習慣は、心理・社会的側面に影響を及ぼすことが推察された。コロナ禍により運動機会および運動時間が減少している中で、まずは短い時間であっても運動頻度を高めることが心理・社会的側面の観点から見ても重要であることが考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 14:00 ~ 15:03 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

14:00 ~ 14:15

[競技スポーツ-C-01] サッカーのゲームパフォーマンスデータにおける二値測定の妥当性（測）

量的データと質的データの因子構造および因果構造の比較

*徐 広孝[1]、松岡 弘樹[2]、安藤 梢[2]、西嶋 尚彦[2] (1. 静岡産業大学、2. 筑波大学)

14:16 ~ 14:31

[競技スポーツ-C-02] サッカーゲームにおける速攻プレー特性の測定（測）

*松岡 弘樹[1]、安藤 梢[1]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学)

14:32 ~ 14:47

[競技スポーツ-C-03] WEリーグとUEFA女子チャンピオンズリーグにおける速攻プレー特性の比較（測）

*安藤 梢[1]、松岡 弘樹[2]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学　体育系、2. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

14:48 ~ 15:03

[競技スポーツ-C-04] 東京2020オリンピックバドミントン競技における得点経過に着目した勝利ゲームの傾向（方,測）

*松本 剛志[1]、大徳 紘也[1]、大石 健二[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第3会場 (3号館4階402教室)

14:00 〜 14:15

[競技スポーツ-C-01]サッカーのゲームパフォーマンスデータにおける二値測定の妥当性（測）

量的データと質的データの因子構造および因果構造の比較

*徐 広孝[1]、松岡 弘樹[2]、安藤 梢[2]、西嶋 尚彦[2] (1. 静岡産業大学、2. 筑波大学)

スポーツアナリティクスの普及と発展によって、トップレベルのサッカーにおいては、試合中に測定されるゲームパフォーマンスデータを用いた分析が日常的に行われるようになった。ところが、近年は高機能な測定機器やシステムが導入され、測定されるゲームパフォーマンスデータの量が膨大化している。それゆえ、指導現場のアナリストにとって、ゲームパフォーマンスデータを処理することは容易ではない。また、客観的なデータを分析したとしても、選手の技能評価は未だに指導者の主観に依存する傾向があり、サッカー技能の達成度評価法を開発する必要がある。

ゲームパフォーマンスデータは、パスの回数や位置座標などの量的尺度で測定されることが多い。そのため、達成度評価基準を構築可能な項目反応理論を適用することができない。しかし、量的なゲームパフォーマンスデータを二値に変換することができれば、項目反応理論を適用できるようになるとともに、測定コストの削減が期待される。

そこで本研究は、サッカーの攻撃における二値のゲームパフォーマンスデータの妥当性を検証することを目的とした。対象は2011年のJリーグにおける全686試合の攻撃パフォーマンスデータ（147,302プレー）であった。まず、分類二進木分析を適用して、項目ごとに量的データを二値に変換するための達成基準を分析した。次に、達成基準に従って二値のデータセットを構築し、探索的因子分析を適用して因子構造を明らかにした。その結果、攻撃技能の7つの下位因子が抽出され、量的データよりも二値データの方が妥当な因子構造が確認された。さらに、最尤法で推定した因子スコアの分散共分散行列からパス解析を行った結果、サッカーの攻撃スタイルを反映した妥当な因果構造が二値データで確認された。

以上のことから、サッカーにおける二値のゲームパフォーマンスデータは妥当であることが明らかになった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第3会場 (3号館4階402教室)

14:16 〜 14:31

[競技スポーツ-C-02]サッカーゲームにおける速攻プレー特性の測定（測）

*松岡 弘樹[1]、安藤 梢[1]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学)

サッカーゲームにおける攻撃プレーの高速化が進展している。サッカーの体力・技術・戦術トレーニングをデータ主導型で計画的に推進するためには、サッカーゲームにおける速攻プレー特性を測定することが必要である。本研究の目的は、 UEFAチャンピオンズリーグ(UEFACL)における速攻プレー特性を明らかにすることであった。【方法】 UEFACL2018-19から2020-21までの3シーズンの準々決勝、準決勝決勝から、ワイスカウトのカウンターアタックに分類される75速攻プレー映像を収集した。 Dartfishを使用してボール移動から速攻プレー特性項目を測定した。ハーフライン(HL)から30mラインまでの22.5m区間（30mL）と、30mLからペナルティエリアまでの13.5m区間（ PA）における縦移動区間速度(m/s)を測定した。速攻プレーの技能要因としてドリブル距離(m)とスルーパス距離(m)、プレー位置要因として相手ゴールからの距離(m)を測定した。分散分析と多重比較検定を適用して、シーズン要因とプレー区間要因（30mL, PA）の効果を分析した。有意水準は P<0.05とした。【結果】 プレー区間（30mLと PA）とシーズンを要因とした二元配置分散分析の結果、2018-19と2019-20の２シーズンにおいて30mLから PAまでの区間の縦移動速度が有意に低下したが、2020-21シーズンでは30mLから PAまでの区間の縦移動速度が維持された。一元配置分散分析の結果、2019-20シーズンと比較して2020-21シーズンの速攻プレーのドリブル距離は有意に長く、過去２シーズンと比較して最も相手ゴールから遠い位置から速攻プレーが開始された。2020-21シーズンの速攻プレーのスルーパス距離は2018-19シーズンと比較して短い距離であり、スルーパス位置は過去２シーズンと比較して最も相手ゴールに近い位置であった。【結論】 UEFACL2018-19から2020-21までの3シーズンにおける速攻プレー特性は、 HLから PAまでのプレー速度が維持され、速攻プレーの技能要因として相手のゴールから遠い位置から開始した長いドリブルと短いスルーパスから構成されていた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第3会場 (3号館4階402教室)

14:32 〜 14:47

[競技スポーツ-C-03]WEリーグと UEFA女子チャンピオンズリーグにおける速攻プレー特性の比較（測）

*安藤 梢[1]、松岡 弘樹[2]、西嶋 尚彦[1] (1. 筑波大学　体育系、2. 筑波大学　スポーツイノベーション開発研究センター)

【目的】女子サッカー WEリーグ(WEL)では攻撃プレーの高速化を推進している。サッカーの体力・技術・戦術トレーニングを計画的に推進するためには、サッカーゲームにおける速攻プレーの特性を測定することが必要である。本研究の目的は WEリーグの速攻プレーの特性を測定し、上位の UEFA女子チャンピオンズリーグ(UEFAWCL)との差異を明らかにすることであった。
【方法】ワイスカウトのカウンターアタックに分類される攻撃プレー映像を収集した。標本は、第18節までのWEL2021-22における速攻32プレーであった。比較基準の標本は、 UEFAWCL 2021-22、準々決勝と準決勝の1st legと2nd legにおける速攻30プレーであった。 Dartfishを使用してボール移動から速攻プレー特性項目を測定した。ボール奪取から終了までの速攻プレー全体、相手守備ライン(DFL)を通過したスルーパス、ドリブルの距離、時間、速度、縦移動速度を測定した。ハーフライン(HL)を基準として、5m、10m、15m、20m、30m、ペナルティエリア(PA)、40mの区間縦速度を測定した。分散分析を適用して、 WELと UEFAWCLの速攻プレー特性を比較した。有意水準は P<0.05とした。
【結果】 WELの速攻プレー速度は4.73±0.74m/s であり、 UEFAWCLの5.79±0.99m/s との間に1.0m/s の有意差が認められた。 WELのドリブル速度は4.71±0.96m/s であり、 UEFAWCLの5.83±0.78m/s との間に1.0m/s の有意差が認められた。 WELのドリブル距離は25.05±11.08mであり、 UEFAWCLの37.60±11.70m との間に12mの有意差が認められた。スルーパス速度には有意差が認められなかった。また、自陣から HLを通過してPAまでのカウンターアタックの速攻プレーの縦移動速度は WELが5.20±1.24m/s であり、 UEFAWCLの6.59±1.32m/s との間に1.3m/s の有意差が認められた。
【結論】 UEFAWCLと比較して WELの速攻プレー速度が1.0m/s 程度低く、縦移動速度では1.3m/s 程度低いことが明らかとなった。速攻技能要因ではドリブル速度が1.0m/s 程度低く、距離が12m程度短いことが明らかとなった。これらの速攻プレー特性の差異は UEFAWCLを到達目標水準とする WELの速攻プレーの数値目標となり、データ主導型のコーチングに有用なデータとなることが推察される。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：中村 泰介（大阪大谷大学）

2022年9月1日(木) 14:00 〜 15:03 第3会場 (3号館4階402教室)

14:48 〜 15:03

[競技スポーツ-C-04]東京2020オリンピックバドミントン競技における得点経過に着目した勝利ゲームの傾向（方,測）

*松本 剛志[1]、大徳 紘也[1]、大石 健二[2] (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

バドミントン競技は、1人対1人、または2人対2人で、ラケットを使ってネット越しにシャトルを打ち合い、得点を競うゲームである。バドミントン競技の得点経過に着目した先行研究では、試合終盤での逆転は難しく、試合の流れのなかで連続得点の機会をより多く掴むことが勝利するために重要であると報告されている(Barreira et al.,2016)。しかし、先行研究は5点ごとの得点経過を分析しており、戦術を組み立てる際により有益な知見を得るためには1点ごとの得点経過を分析することやゲームのどの場面で連続得点が必要なのかなどを加味したより詳細な分析が必要であると考えた。

そこで本研究の目的は、東京2020オリンピックのオープンデータを用いて、現在のバドミントンの得点経過から勝敗の分岐点や得点傾向を明らかにすることで、指導者や選手が戦術を組み立てる際の一助となる知見を得ることを目的とした。

対象大会は、東京2020オリンピックのバドミントン競技とした。対象試合は、男子シングルス計54試合、116ゲームとした。女子シングルスは、計57試合、121ゲームとした。分析項目は、東京オリンピック委員会から提供されたオープンデータから取得したゲームの勝敗と得点経過とした。

各得点先取時の相手との得点差と勝敗数の結果から男子シングルスは7点先取時で相手先取との得点差が1点差の場合12勝13敗と敗北試合が多い結果であった。8点先取時以降は1点差であっても勝利試合が多い結果であった。しかし、女子シングルスは決勝トーナメントの17点先取時において相手選手と得点差が1点差の場合0勝3敗と敗北試合が多い結果であった。本研究結果から、男子と女子のシングルスでは試合展開が異なる可能性が示唆された。男子シングルスは、先行研究を支持する結果であったが女子シングルスは試合終盤でも逆転される可能性があることから指導者は男子シングルスと女子シングルスでは異なった戦術を指導する必要性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2022年9月1日(木) 15:20 ~ 16:39 | 第6会場 2号館1階11教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

15:20 ~ 15:35

[生涯スポーツ-C-01] 児童・生徒におけるスポーツ傷害リスク要因の定量化（発）

*重松 良祐[1]、中田 由夫[2]、鈴木 宏哉[3]、笹井 浩行[4] (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 筑波大学体育系、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 東京都健康長寿医療センター研究所)

15:36 ~ 15:51

[生涯スポーツ-C-02] 我が国における大学スポーツ環境のマネジメントに関する研究（経）

体育会運動部及びサークルについて

*中路 恭平[1] (1. 南山大学)

15:52 ~ 16:07

[生涯スポーツ-C-03] 運動生活の再形成過程に関する研究（経）

スポーツ環境の変化に着目して

*奥田 直希[1]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

16:08 ~ 16:23

[生涯スポーツ-C-04] 20代から50代のビジネスパーソンのスポーツ実施状況（政,社）

スポーツライフデータ1998と2018からみる特徴と変化

*大勝 志津穂[1] (1. 愛知東邦大学)

16:24 ~ 16:39

[生涯スポーツ-C-05] 発散型の運動プログラム（フリーダムコラボレーションダンス：FCD）における運動継続率向上について（社,感性コミュニケーション）

*太刀山 美樹[1]、松﨑 守利[2] (1. 株式会社MIKI・ファニット、2. 下関市立大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第6会場 (2号館1階11教室)

15:20 〜 15:35

[生涯スポーツ-C-01]児童・生徒におけるスポーツ傷害リスク要因の定量化（発）

*重松 良祐[1]、中田 由夫[2]、鈴木 宏哉[3]、笹井 浩行[4] (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 筑波大学体育系、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 東京都健康長寿医療センター研究所)

我々は先に、児童・生徒におけるスポーツ傷害リスクについて、スポーツに費やす時間と、1種目に限定する専門化の2つをリスク要因とみなして関連性を定量した。その結果、小学校低学年、同高学年、中学校、高校によって2要因の関連度が異なっていることを確認した。特に中学校と高校では両要因ともスポーツ傷害に有意に関連していなかった。その理由として、中学校と高校では90%以上が1種目しか実践しておらず、専門化によるリスクを検出できるサンプルサイズではなかったことが考えられた。また、スポーツ庁のガイドラインによって週あたりのスポーツ時間の上限が2018年に定められたことから、今後はスポーツ時間の影響が限定的になると思われる。これらを踏まえ、本研究ではスポーツ時間と専門化以外の要因も加味してリスク要因を定量することとした。三重大学教育学部の1〜4年生に質問紙調査を2017年に実施し、有効回答を提出した569名 のうち、小学校〜高校の1校種以上でスポーツ組織に所属したことがある484名を対象とした。校種ごとのスポーツ経験者が含まれる割合はそれぞれ61%、73%、93%、67%であった。質問紙ではスポーツ傷害（外傷と障害）の他、性、スポーツ開始年齢、全国・県大会出場経験、前校種での受傷経験も尋ねた。ポワソン回帰分析にて受傷者の出現割合比（prevalence ratio: PR）を算出したところ、小学校低学年では全要因が有意でなかった。小学校高学年ではスポーツ時間と専門化の交互作用が有意であり、同じスポーツ時間であれば複数種目の受傷者率が小さかった（PRと95%信頼区間は0.99, 0.98–1.00）。中学校では全国・県大会に出場している者で受傷リスクが高かった（1.07, 1.04–1.12）。高校では男性（1.39, 1.02–1.89）、全国・県大会出場（1.04, 1.01–1.08）、中学校での受傷経験（1.34, 1.00–1.77）の者で受傷リスクが高かった。以上のことから、リスク要因の関連性の程度は校種によって異なっており、校種ごとに対策を講じる必要性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第6会場 (2号館1階11教室)

15:36 〜 15:51

[生涯スポーツ-C-02]我が国における大学スポーツ環境のマネジメントに関する研究（経）

体育会運動部及びサークルについて

*中路 恭平[1] (1. 南山大学)

2019年3月、「大学スポーツの振興」と「大学スポーツ参画人口の拡大」を組織理念に置いた大学スポーツ協会（ UNIVAS）が発足した。しかしながら、その事業活動の内容をみると、「デュアルキャリア（学業と競技活動の両立）」や「安心安全（運動部活動の環境整備）」などが挙げられ、専ら競技的な運動部活動に焦点が当てられていることがわかる。我が国の大学スポーツを考えるとき、競技的な運動部活動の学生アスリートだけでなく、サークル・同好会や、それら集団に所属しない一般学生に対しても運動の機会を保障することを検討する必要があると考える。学習指導要領によって学習内容が規定されている中学、高校に比べて、大学では多彩な学部学科が存在しており、さらに1991年の大学大綱化によって各大学の裁量が増え、保健体育科目は全学必修科目ではなくなった。大学設置基準によって大学が保有すべき体育施設の規程はミニマムある。体育会運動部に力を入れて日本の競技力を支えている大学もあれば、そうでない大学も多いと思われる。大学によってそうしたいわゆるスポーツ環境は大きく異なることが考えられるが、これまでにその実態を明らかにしようとした研究・調査は管見のところ見当たらない。そこで、本研究では日本の大学のスポーツ環境について、体育会運動部活動およびサークル活動の実態を明らかにすることを目的とした。全国の大学（短期大学、専門職大学、大学院大学およびキャンパスを持たない通信制大学を除く）760校（国立82校、公立91校、私立587校）に対し、郵送法による質問紙調査を実施した。調査期間は2021年11月〜12月であり、回収数は307（回収率は40.4%）であった。分析は大学の設置者、設立年度、学部規模を基準に比較し、大学のスポーツ環境の傾向を捉えようとした。詳細については当日報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第6会場 (2号館1階11教室)

15:52 〜 16:07

[生涯スポーツ-C-03]運動生活の再形成過程に関する研究（経）

スポーツ環境の変化に着目して

*奥田 直希[1]、清水 紀宏[2] (1. 高松大学、2. 筑波大学)

2012年に第1期スポーツ基本計画が策定されてから10年が経過したが、未だスポーツ実施率は目標数値に届いておらず、中でも働き世代のスポーツ実施率の低調さが指摘されている（スポーツ庁、2022）。とりわけ20代は、他と比較して生活環境の変化が顕著な世代である（総務省統計局、2022）ことから、それに伴うスポーツ環境の変化をきっかけに、スポーツから離脱せざるを得ない人々が多い年代であるといえよう。

他方、20代であっても、ライフステージの移行を経てスポーツから離脱した後、再びスポーツ実施に至る人々がいることが明らかにされている（乾・長ヶ原、2013）。このような人々が、どのような過程を経て、スポーツの離脱から運動生活の再形成に至るのかを検討することは、スポーツ経営学において、重要な研究課題であると考えられる。しかしながら、そのような研究は管見の限り見当たらない。

そこで本研究は、ライフステージの移行に伴うスポーツ環境の変化によって、スポーツから離脱せざるを得なくなったにもかかわらず、運動生活を再形成することができた人々に着目し、どのような運動生活の再形成過程を辿るのかという問いの解明を目的とした。この問いを解明することで、豊かなスポーツ生活の実現のための実践的示唆の獲得につながることが期待される。

この目的を達成するために、スポーツ環境の変化を経験した２名を対象に半構造化インタビューを実施し、キャリア・トランジション論（ブリッジズ、2014）を手掛かりに分析、考察を試みた。それらの結果、スポーツライフの再形成においては、スポーツからの離脱を「終わり」の契機とし、過去のスポーツライフに対する内省を経て、自身のスポーツ欲求を明確化した後に、その欲求充足が可能なスポーツ環境を確保するという過程を辿るということが明らかとなり、本研究における研究課題を解決するための証拠の一つが得られた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2022年9月1日(木) 15:20 ～ 16:39 第6会場 (2号館1階11教室)

16:08 ～ 16:23

[生涯スポーツ-C-04]20代から50代のビジネスパーソンのスポーツ実施状況（政,社）

スポーツライフデータ1998と2018からみる特徴と変化

*大勝 志津穂[1] (1. 愛知東邦大学)

スポーツ基本計画では、第1期においてライフステージに応じたスポーツ活動の促進が掲げられ、第2期では、ビジネスパーソン、女性、障害者のスポーツ実施率向上が目標として掲げられた。第3期では、女性、障害者、働く世代・子育て世代のスポーツ実施率向上が掲げられ、ビジネスパーソンから働く世代・子育て世代へと対象が広がった。第2期においてビジネスパーソンがターゲットとされた背景には、20代から50代の働く世代のスポーツ実施率が低調であることがあげられる。では、実際に働く世代のスポーツ実施率はどのような状況にあるのか。本研究では、笹川スポーツ財団のスポーツライフデータ1998と2018のデータを用いて、20代から50代の働く世代のスポーツ実施状況を明らかにし、その特徴と20年間の変化を検討する。分析対象者は、20代から50代の勤め人である。

分析の結果、実施レベルでは、2018年にはレベル0が増加した一方で、週2回以上の定期的な実施者も増加していた。性別にみると、2018年のレベル0は男女ともに増加、定期的な実施者では女性の増加率が高かった。年代では、20代から40代のレベル0は増加、50代では減少していた。また、30代と50代において定期的な実施者が増加していた。18歳以下の子どもと同居する人では、2018年では全体の定期的な実施者は増加しており、中でも50代の増加率が高かった。一方、18歳以下の子どもと同居していない40代は他の世代と比較して、定期的な実施者が少なかった。年1回以上のスポーツ種目の実施率の変化では、ボウリングや釣り、ゴルフ練習場、ゴルフコースが減少、筋力トレーニング、ジョギング・ランニング、サイクリングが増加していた。さらに、2018年のデータにおいて、勤め人とそれ以外の人を比較すると、定期的な実施者は勤め人の方が少なかったが、レベル0も勤め人の方が少なく、不定期な実施者を定期的な実施者に移行させる方策の必要性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：赤澤 暢彦（早稲田大学）

2022年9月1日(木) 15:20 ～ 16:39 第6会場 (2号館1階11教室)

16:24 ～ 16:39

[生涯スポーツ-C-05]発散型の運動プログラム（フリーダムコラボレーションダンス： FCD）における運動継続率向上について（社,感性コミュニケーション）

*太刀山 美樹[1]、松﨑 守利[2] (1. 株式会社MIKI・ファニット、2. 下関市立大学)

【テーマ】発散型の運動プログラム（フリーダムコラボレーションダンス： FCD）は運動継続率を高めることができるか 【目的】本研究では、スポーツ実施者の増加を促進するように改良した、新しい発散型運動プログラム（ FCD）が、運動実施率の向上につながるか検証した。【方法】 FCDとはファニット交流タイム、有酸素運動（チアダンス１曲振り付け）、筋力トレーニング、ヨガで構成されるプログラムである。医療・福祉現場などに勤務する女性33名を対象に、スタジオで行う「対面 FCDレッスン」を週2回と、 web上に提供された録画映像での「自宅 FCDレッスン」を15分間週4回、4週間実施した。また実施率を上げるために、スマートフォンで利用できる LINE、 Google Formsを用いて、レッスンの予約、運動の実施記録、動画配信、 Q&Aなど、参加者がレッスンを受けやすく継続する工夫をした。レッスン期間終了後に、レッスンプログラム内容、実際の阻害要因、促進要因について Google Formsを用いてアンケート調査を実施した。【結果】レッスンの内容に関しては概ね好評であった。本事業への参加後の運動継続については、9割以上は継続について意欲的であった。阻害要因については「時間の調整」約8割「通うこと」約5割であった。促進要因としては、「生活サイクルに組み込む」、「毎日の記録と適度な諦め」「 LINEメッセージが届きやらねばと思った」「短いプログラムの連続で飽きない」など様々な意見が見られた。【結論】本研究では、「対面 FCDレッスン」「自宅 FCDレッスン」の併用、自分で行う日々の記録や、アプリを活用し習慣を定着させる伴走型サポート（寄り添いや励ましのような言葉かけ）によりモチベーションの維持向上にも繋がったと思われる。 FCDプログラムは、働く女性の運動継続率を高めることを示唆している。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

2022年9月1日(木) 15:20 ~ 16:39 | 第7会場 2号館1階12教室

生涯スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）

15:20 ~ 15:35

[生涯スポーツ-C-06] スポーツウエルネス吹矢を実施している高齢者の心理的効果について（心）

*高山 昌子[1]、土屋 裕睦[2] (1. 大阪国際大学、2. 大阪体育大学)

15:36 ~ 15:51

[生涯スポーツ-C-07] 『笑うスポーツ』によるスポーツの楽しさを伝える取り組み（社）

産官学連携したスポーツイベントの開催への取り組みとその課題

*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

15:52 ~ 16:07

[生涯スポーツ-C-08] 「する」「みる」「ささえる」スポーツの構造化（政,社）

*高峰 修[1] (1. 明治大学)

16:08 ~ 16:23

[生涯スポーツ-C-09] スポーツ・ボランティア研究における〈支援〉の再考（ア,社）

*植田 俊[1]、山崎 貴史[2] (1. 東海大学、2. 北海道大学)

16:24 ~ 16:39

[生涯スポーツ-C-10] 東京2020オリンピックはスポーツ・運動に興味・関心が無い者にスポーツ・運動に対する興味関心を持たせ、運動の実践に寄与したか（介）

*片山 靖富[1]、若葉 京良[2] (1. 皇學館大学、2. 十文字学園女子大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）
2022年9月1日(木) 15:20 ～ 16:39 第7会場 (2号館1階12教室)

15:20 ～ 15:35

[生涯スポーツ-C-06]スポーツウエルネス吹矢を実施している高齢者の心理的効果について（心）

*高山 昌子[1]、土屋 裕睦[2] (1. 大阪国際大学、2. 大阪体育大学)

厚生労働省（2019）によると平均寿命は女性87.45歳、男性81.41歳。一方、健康寿命は女性74.21歳、男性71.19歳である。健康寿命を伸ばすために次世代を含めたすべての人の健やかな生活習慣形成、疾病予防、フレイル対策、認知予防していくことで健康寿命延伸にも繋がる。健康づくりは、生活習慣改善だけではなく趣味や社会活動の視点からも考える必要性がある（竹島，2013）。 そこで本研究は、スポーツウエルネス吹矢（以下、SWF）を行っている高齢者を対象に SWFの楽しさが心身に与える影響について知見を得ることを目的とした。対象者は、 SWF教室に所属している高齢者49名（男性26名、女性23名：平均年齢は73.69歳±5.09歳）、介助の必要がなく自立して練習会場に参加できる人であった。調査時期は2021年10月に実施した。調査項目は、「運動習慣」「心身への変化」について自由に記述してもらい、生きがい意識調査 Ikigai-9（今井ら,2012）、二次元気分尺度(坂入ら,2003)、 SWFの主観的運動強度(小野寺ら,1976)について質問紙調査を行った。自由記述は KJ法を用いてクラスター分析を行い、自由記述の原文から同じ意味と解釈できる原文をまとめ、カテゴリーとして集約し、そのカテゴリー内容を表す見出しを付けた。心理尺度については得点を算出した。 その結果、「運動習慣」では半数の人が60分程度のウォーキングを毎日の日課としていることが示唆された。「心身への変化」については、「集中力」「ストレス解消」「肺活量」「腹式呼吸」など6個のカテゴリーに分類できた。 Ikigai-9:生きがい意識調査の合計得点の平均が30.73（±5.78）で、 SWFを行っている高齢者の生きがいが高いことが示唆された。二次元気分尺度では、 SWFを実施している時間は活性度が高く「活動に適したエリア」にあることが示唆された。主観的運動強度の平均値は10.88（±1.86）と「11：楽である」だった。 SWF実施者にとって運動強度は低いが、競技を続けることで心身の健康維持増進に関係があることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）

2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第7会場 (2号館1階12教室)

15:36 〜 15:51

[生涯スポーツ-C-07]『笑うスポーツ』によるスポーツの楽しさを伝える取り組み（社）

産官学連携したスポーツイベントの開催への取り組みとその課題

*橋本 剛幸[1] (1. 近畿大学)

子どもたちの運動に対する「二極化」が進んでいると言われており、“する子ども”と“しない子ども”の体力差も大きな問題となっている。「運動嫌い」を少なくし、幼少時から運動することやスポーツに興味を持たせることは非常に重要である。令和2年10月より、吉本興業株式会社との共同研究を開始し、『笑うスポーツ』の共同開発をスタートした。これは、子供たちにスポーツをする楽しさを体験してもらう機会を提供するため、見ても楽しい、やったらもっと楽しいスポーツを創造し、その体験会を様々なところで開催し、スポーツに興味を持ってもらうための試みである。また、子どもたちにとどまらず、その保護者など一般成人にもスポーツの楽しさを伝えていくことを狙いとしている。

　これまでのさまざまなスポーツイベントへの取り組みの中で、お笑い芸人の発信力と笑いや楽しさを伝えるコミュニケーション力の力を借りて、子供たちやその保護者にスポーツの楽しさを伝えていく取り組みは非常に有効な方法であることが明らかになってきた。また、継続していくための課題も明確になってきた。今後も、課題の解決に向けて検討を加え、産官学連携したこのような取り組みを継続していくことが重要であろうと考える。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）

2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第7会場 (2号館1階12教室)

15:52 〜 16:07

[生涯スポーツ-C-08]「する」「みる」「ささえる」スポーツの構造化（政,社）

*高峰 修[1] (1. 明治大学)

第2期スポーツ基本計画においては国民のスポーツ参画を「する」「みる」「ささえる」の3つの指標から把握し、その拡大を図ることが施策の一つとして示され、その方向性は第3期スポーツ基本計画にも引き継がれている。しかしながら、これらの指標はそれぞれ個別のものとして取り扱われることが多く、それらを構造化させた重複の度合いであったり、各グループの構成員の特徴的な諸属性等についての検討はほとんど行われていない。政策の具体的施策としてこれらの3つの指標を設定するのであれば、まずはその現状を把握することが必要となろう。

スポーツの「する」「みる」「ささえる」を構造化させた数少ない先行研究の一つに松尾（2012）があるが、そこでは「する」のみのグループが35.7%で最も多く、「する･みる･ささえる」の全てに関わるグループが12.7%いる一方で、「する･みる･ささえる」の全てに関わらないグループも18.8%を占めることが示されている。本研究ではこの松尾（2012）の分析枠組みに準拠し、笹川スポーツ財団が実施している「スポーツライフデータ」を用いて分析を行った。

2012年と2016年のデータを比較すると、運動･スポーツ実施率は2012年74.4%、2016年72.4%、スポーツ直接観戦率は2012年31.7%、2016年32.9%、スポーツボランティア実施率（無自覚者を含む）は2012年27.7%、2016年22.4%であり、スポーツ直接観戦率は1.2ポイント増加傾向を示すが、運動･スポーツ実施率とスポーツボランティア実施率はいずれも減少していた。これらを組み合わせて構造化すると、2012年に35.7%で最も多かった「する」のみのグループは2016年には35.5%とほぼ同じ割合を占めた。「する･みる･ささえる」の全てに関わるグループは2012年の12.7%から2016年の10.6%へと約2ポイント減少する一方、「する･みる･ささえる」いずれも実施しなかったグループは18.8%から20.7%へ約2ポイント増加していた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）
2022年9月1日(木) 15:20 ～ 16:39 第7会場 (2号館1階12教室)

16:08 ～ 16:23

[生涯スポーツ-C-09]スポーツ・ボランティア研究における〈支援〉の再考（ア,社）

*植田 俊[1]、山崎 貴史[2] (1. 東海大学、2. 北海道大学)

本研究の目的は、「支えるスポーツ」として意義づけられてきたスポーツ・ボランティアに関する既存研究において、〈支援〉がどのように議論されてきたかを再考するとともに、新たな研究の課題・視座を提起することである。 本研究では、スポーツボランティア活動の萌芽と目される1985年に開催された「ユニバーシアード神戸大会」以降に発表された文献を対象とし、以下の4つの観点から分析を行った。1）ボランティアをどのような要素で構成される概念と捉えて定義し研究の前提においてきたか（定義）、2）ボランティアの実践的場面における何（誰）に焦点を当てているか（対象）、3）対象をどのような方法で調査したか（方法）、その結果、4）ボランティアのどのような側面を解明課題としたか（問い）。 分析の結果、既存研究は参加誘因論と効果論の二つに大別して捉えることができた。この二つの議論の共通点は、スポーツ・ボランティアの意義を「する側」が活動を通じて得る「利得」にあると捉えている点であり、その前提として、スポーツにおけるボランティア活動を1）する側が担う「役割」と認識し、2）受ける側とする側の関係は常に良好であり、する側が担う役割を受ける側は無条件に受容すると考えていた。そのため、「支えるスポーツ」の研究でありながら、多くの既存研究は支援を受ける側を考察の対象から外し、ボランティア活動における「する一受ける側」関係や活動における支援の実態を描いてこなかったことが明らかとなった。そこで報告者らは、スポーツ以外のボランティア研究にも射程を広げて検討を行い、今後のスポーツ・ボランティア研究が解明するべき課題として、1）ボランティアを「する一受ける」関係として捉えること、2）ボランティアの現場における支援活動や関係の内実を描くこと、そして3）「する一受ける」関係にもとづく支援活動を成り立たせる論理を探ることの3点を提起した。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：水上 博司（日本大学）
2022年9月1日(木) 15:20 〜 16:39 第7会場 (2号館1階12教室)

16:24 〜 16:39

[生涯スポーツ-C-10]東京2020オリンピックはスポーツ・運動に興味・関心が無い者にスポーツ・運動に対する興味関心を持たせ、運動の実践に寄与したか（介）

*片山 靖富[1]、若葉 京良[2] (1. 皇學館大学、2. 十文字学園女子大学)

オリンピックなど世界的に著名なスポーツイベントの開催は、人々のスポーツ・運動への興味・関心を高め、スポーツ・運動実践の増加に寄与するものと期待されているが、そのオリンピックでさえ、人々の健康や身体活動量（歩数）の増加に影響しなかったという報告がある。しかしこれまでの報告は、すでに運動・スポーツの実践がある者も調査対象者に含まれており、運動・スポーツに興味・関心が無い者や運動実践の無い者を対象に調査されたものではない。そこで本研究では、運動・スポーツに興味・関心が無い者や運動実践の無い者を対象に、東京2020オリンピックの開催が、どのくらいの人たちに、スポーツ・運動の興味・関心を持たせ、運動実践を始めさせることに寄与したのかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、 K大学教育学部および大学院修士課程教育学研究科の学生945名に対し Web調査をおこない、オリンピック開催前と閉会から６か月後のスポーツ・運動に対する興味・関心と運動の実践状況（自主的な運動実践が週に合計30分以上あれば「運動実践あり」と判断）、およびそれらの変化はオリンピックの影響によるものであったかを回答してもらった。

有効回答数は226件（名）であり、有効回答率は23.9%であった。回答者のうち、オリンピック開催前に興味・関心の無かった者が106名、そのうち閉会から６か月後の時点で、このオリンピックの影響で、興味・関心を有するようになった者や運動を実践するようになった者が15名（オリンピック開催前に興味・関心の無かった者の14.2%）、そのうち2名（1.9%）が運動を実践するようになった。オリンピック開催前に興味・関心はあっても運動実践がなかった者51名のうち、オリンピックの影響で興味・関心が増した者が23名（運動実践がなかった者の45.1%）、運動を実践するようになった者は1名（2.0%）であった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第8会場 2号館2階21教室

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）

15:30 ~ 15:45

[スポーツ文化-C-01] 動きの質の違いを共有し認め合うダンス発表会の意義に関する研究（教）

東京都における高等学校ダンス部のオンライン発表会の実践を通して

*中村 なおみ[1]、渡辺 律子[2]、笠井 里津子[3]、布施 典子[4] (1. 東海大学、2. 文教大学、3. 日本体育大学、4. 上野学園中学高等学校)

15:46 ~ 16:01

[スポーツ文化-C-02] 国際ストーク・マンデビル競技大会の表記に関する研究（ア）

1964年東京大会から1968年テルアビブ大会までの新聞記事に着目して

*阿部 崇[1]、澤江 幸則[2] (1. 東京家政大学、2. 筑波大学)

16:02 ~ 16:17

[スポーツ文化-C-03] 大学生アスリートを対象とするアンチ・ドーピング教育に向けた倫理・道徳教育とその限界（哲）

*深澤 浩洋[1] (1. 筑波大学)

16:18 ~ 16:33

[スポーツ文化-C-04] 東京2020ホストタウン事業における国際交流と地域活性化に関する事例研究（教）

山形県村山市とブルガリア新体操チームの交流

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第8会場 (2号館2階21教室)

15:30 〜 15:45

[スポーツ文化-C-01]動きの質の違いを共有し認め合うダンス発表会の意義に関する研究（教）

東京都における高等学校ダンス部のオンライン発表会の実践を通して

*中村 なおみ[1]、渡辺 律子[2]、笠井 里津子[3]、布施 典子[4] (1. 東海大学、2. 文教大学、3. 日本体育大学、4. 上野学園中学高等学校　)

競技スポーツでの競技大会では「競い合う」ために集い、「競争」を通して交流する場と なっている。その一方で、体操・ダンスの分野では、一緒に動く、または動きを発表・鑑賞し「動きを共有する」ために集い、相互に認め合うことで交流する場としてきた。体操・ダンスは、多種多様な動きの価値を共有し、動きの質的な違いを受け止め、多様性の尊重を学ぶことができる運動文化としてその意義があると考える。 東京都女子体育連盟では、発表会への参加人数の増加傾向を捉え、「高等学校におけるダンス部の活動実態及部員の意識調査〜東京都における急増するダンス部の現状と課題〜」(2013)の調査研究を行い、急増する部員の実態を明らかにし、指導上の課題として①活動場所が保証されていない②専門的な知識を持った指導者がいない③生活指導面での問題が多い、という3点を明らかにした。その後もダンス部の人気は高く、多くの高等学校で新しい部活動として認められてきている。こういった高校生のダンス人口の増加により、様々な形態のダンスコンクールが開催されるようになり、ダンスも勝敗、優劣を競い合うといった傾向が見られるようになってきている。 本研究では、東京都女子体育連盟が開催してきた高等学校のダンス発表会を事例として報告する。2020年度（第49回大会）はコロナ禍で充分な部活動ができない状況であったが 、発表の場の意義を改めて考え、初めてのオンラインよる大会を企画実施した。企画運営に関わった教員への調査、および出場校34校へのアンケート調査から、新たな活動形態の模索、部員間、顧問やコーチとのコミュニケーションの重要性、オンライン（映像）ならではのダンスの表現方法など、を学んだという結果が得られた。大会を通して、改めて他の学校の異なる表現（動きの質の違い）を発表しあうことは、相互に繋がり合うことだと再確認された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第8会場 (2号館2階21教室)

15:46 〜 16:01

[スポーツ文化-C-02]国際ストーク・マンデビル競技大会の表記に関する研究（ア）

1964年東京大会から1968年テルアビブ大会までの新聞記事に着目して

*阿部 崇[1]、澤江 幸則[2] (1. 東京家政大学、2. 筑波大学)

【目的】パラリンピックの源流とされる国際ストーク・マンデビル競技大会の新聞記事における大会名称の変遷とその特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】本大会の表記について新聞記事より分析を行った。分析対象は当時の発行部数、購読者数が上位３社の朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の朝刊、夕刊とした。大会名の表記は「身障者五輪」、「国際ストーク・マンデビル競技大会」、「パラリンピック」、「国際身体障害者スポーツ」の４つに分類した。対象期間は1964年から1968年までとした。

【結果】新聞に掲載された本大会に関する記事数は1964年が157件、1965年が39件、1966年が13件、1967年が12件、1968年が19件と東京大会後に減少したことが明らかとなった。大会名の表記として「パラリンピック」は1964年に最も多かったが徐々に割合が減少し、テルアビブ大会の開催された1968年にわずかに増加が見られた。正式名称の「国際ストーク・マンデビル競技大会」は1965年、1966年に、「国際身体障害者スポーツ大会」は1966、1967年に、「身障者五輪」は1968年に多くの割合で表記されたことが明らかとなった。

【考察】本大会は1964年の東京大会において「パラリンピック」として最も多く表記され、当時の「身体障害者」、「身障者」のもつネガティブなイメージを払拭させるものであった。しかし、その後記事数の減少と共に大会名としての正式名称ではなかった「パラリンピック」は定着が見られなかったため、1965年から1967年にかけては「パラリンピック」だけでなく「国際ストーク・マンデビル競技大会」、「国際身体障害者スポーツ大会」と多様な表記されたといえよう。また、1968年のテルアビブ大会においてはオリンピック開催年ということもあり身体障害者版の「身障者五輪」として記事の紹介がなされたと考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）
2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第8会場 (2号館2階21教室)

16:02 〜 16:17

[スポーツ文化-C-03]大学生アスリートを対象とするアンチ・ドーピング教育に向けた倫理・道徳教育とその限界（哲）

*深澤 浩洋[1] (1. 筑波大学)

大学生アスリートを対象とするアンチ・ドーピング教育の課題に関して、昨年度筆者は、次のことを示した。すなわち、うっかりドーピングに象徴されるように、日本では、ドーピングに対する知識の欠如を補うことがアンチ・ドーピング教育の優先課題に据えられており、ドーピングがスポーツ文化を毀損する可能性に対する認識や倫理・道徳的な教育が不足していることである。しかしながら、海外での国家ぐるみのドーピング問題に鑑みると、こうしたアスリートを対象とした教育を推進するにはある種の限界があることが想像できる。そこで、本発表では、アンチ・ドーピングに対する倫理教育の限界と可能性を見定めることとする。この目的に迫るために、①倫理的な教育の可能性を探るべく、ドーピングの誘発要因やドーピングをしないアスリートに見られるアンチ・ドーピングの理由を見定める、②それら得られた知見がアンチ・ドーピングを進める諸活動に対してどういった部分をカバーしうるかを検討する、の2つの課題を設定する。これらの検討から浮かび上がるのは、アスリート自身の権利の保持と同時に他者の権利を保障するという2つの側面を満たすための教育の推進となろう。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ文化研究部会【課題 C】口頭発表①

座長：朝倉 雅史（筑波大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第8会場 (2号館2階21教室)

16:18 〜 16:33

[スポーツ文化-C-04]東京2020ホストタウン事業における国際交流と地域活性化に関する事例研究（教）

山形県村山市とブルガリア新体操チームの交流

*宮崎 明世[1] (1. 筑波大学体育系)

東京オリンピック・パラリンピック大会の開催に向けて内閣官房は、全国の地方公共団体と大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図るとともに、地域の活性化等を推進することを目的として、2016年度より「ホストタウン事業」を創設した。さらに2017年には、東日本大震災の被災3県を対象とした「復興ありがとうホストタウン」、同年11月に、パラリンピアンの受け入れを契機に、各地における共生社会の実現に向けた取り組みを加速する「共生社会ホストタウン」が追加された。本事業の登録数は、大会までに462件（自治体数533、相手国・地域185）に昇った。 本研究では、山形県村山市を対象として、ブルガリアの新体操チームとの国際交流の実態と、地域の活性化に関する成果や課題を明らかにすることを目的とした。2019年度から3回（各年度に1回）にわたって、村山市のオリ・パラ推進課の担当者に対するインタビューとフィールド調査を行った。2020年度からは新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けたため、その影響と対策に関する実態も明らかにした。 村山市では、市の花がバラであること、新体操が盛んな地域であることからブルガリアの新体操チームを相手として交流協定を締結した。2017年6月から年1回の事前キャンプを受け入れ、コロナ禍によって中止された2020年を除く4回に渡って継続的に行われた。” Rose Camp” と名付けられた事前合宿は、スポンサーや地元ボランティアによって支えられ、来日した選手や関係者と地域住民や学校訪問などの直接交流が行われた。運営面では、市の職員として国際交流員を雇用して、学校や地域との交流に役立てた。コロナ禍において直接交流が困難になってからは、交流員を現地との連絡や、オンラインセミナーに活用するなどの対策がとられた。さまざまな取り組みが地域の活性化につながったと考えられ、計画当初から大会後を見据えた視点を持っていたことも明らかとなった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第10会場 2号館4階45教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-17] 幼児期における体力と非認知機能の関連（測）

*杉山 莉聖[1]、大坪 健太[2,3]、小椋 優作[4]、春日 晃章[5] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 中部学院大学短期大学部、5. 岐阜大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-18] 異なる年齢区分データを用いたBTT法による身長発育急増年齢予測値の妥当性の検証（発）

*広瀬 統一[1]、岡部 文武[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-19] ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量の観点から

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

16:18 ~ 16:33

[学校保健体育-C-20] 幼児の加速度計評価による座位行動と身体活動の置き換えと運動能力の関連（発,生）

Isotemporal Substitution モデルによる検討

*米野 吉則[1,2]、朽木 勤[1]、町田 修一[2] (1. 兵庫大学、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第10会場 (2号館4階45教室)

15:30 〜 15:45

[学校保健体育-C-17]幼児期における体力と非認知機能の関連（測）

*杉山 莉聖[1]、大坪 健太[2,3]、小椋 優作[4]、春日 晃章[5] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員（DC2）、4. 中部学院大学短期大学部、5. 岐阜大学)

本研究は、幼児期における体力と非認知機能の関連を明らかにすることを目的とした。対象は、2017年度〜2021年度に私立幼稚園に在籍していた年長児1280名（男児：644名、女児：636名）であった。体力は、幼児用体力組テストを用いて7項目を測定した。また、体力テスト7項目の主成分分析から得られた第一主成分得点を性別および年齢別（0.5歳区分）に Tスコア化したものを体力総合得点とし、5群（1： X＜35、2：35≦ X＜45、3：45≦ X＜55、4：55≦ X＜65、5：65≦ X）に区分した。非認知機能は、 Gutman &Schoon（2013）の先行研究を参考に作成した16設問からなる質問紙を用いて、幼児のクラス担任より5件法で回答を得た。幼児の非認知機能の因子構造を検討するため、因子分析（直行回転バリマックス法）を適用した。得られた因子得点を年齢別（0.5歳区分）に Tスコア化したものを非認知機能得点とし、以降の分析に用いた。体力5群間における非認知機能の差を検討するため、二要因分散分析（体力×性）を適用した。因子分析の結果、幼児の非認知機能の因子構造は、やり抜く力因子、対処能力因子、創意工夫因子、自信・リーダー因子の4因子が抽出、解釈された。二要因分散分析の結果、全ての因子に有意な交互作用は認められなかった。性に有意な主効果が認められた項目は、自信・リーダー因子を除く3因子であり、多重比較検定の結果、女児が男児よりも高い値を示し、女児の方がやり抜く力、対処能力および創意工夫に関する非認知機能が高いことが示唆された。体力に有意な主効果が認められた項目は、創意工夫因子を除く3因子であり、多重比較検定の結果、体力総合得点が高い群ほど高い値を示す傾向にあり、やり抜く力、対処能力および自信・リーダーなどの非認知機能は、体力向上の要因となる運動遊びなどを通して育成されることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第10会場 (2号館4階45教室)

15:46 〜 16:01

[学校保健体育-C-18]異なる年齢区分データを用いた BTT法による身長発育急増年齢予測値の妥当性の検証（発）

*広瀬 統一[1]、岡部 文武[1] (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

成長段階を加味した成長期児童の体力トレーニング立案や運動能力評価において、身長発育急増年齢（ PHVA）が用いられる。 PHVA推定法として The Bock-Thissen-du Toit (BTT) 法が広く用いられているが、身長発育の年代や地域の差がどの程度反映されているかが不明である。また、 BTT法は最低5か年の身長と暦年齢データによりPHVA推定が可能だが、用いるデータの年齢区分の相違が推定値に及ぼす影響についても検討が必要である。そこで本研究は高校生男女の小学校1年生時から調査時までの全身長データを用いたスプライン平滑化による実測値とBTT法推定値、および異なる年齢区分のデータ群を用いた BTT法推定値との相関関係と残差から、 BTT法で得られた PHVA推定値の特徴を検討することを目的とした。 高校2・3年生の男女122名の小学校1年生から調査時までの身長、生年月日、身長測定年月日のデータを用いて、スプライン平滑化により身長発育急増年齢を女子は8歳、男子は10歳以上のものを対象にして PHVAを推定した（ SP）。 BTT法は全データ（ all）および小学1年生から中学2年生（8y）、中学1年生（7y）、小学6年生（6y）、小学5年生（5y）までのデータ群を用いて PHVAを算出した。 SPと BTT全条件間の相関をピアソンの相関分析で、また残差が±１歳とそれ以上の各条件での割合を記述統計にて比較した。 全体の SPと BTTの相関係数は5yが最小値、8yが最大値であった（各 r=0.660, 0.825, p<0.001）。また、残差が±１歳を越えるものは allでは18%、5yでは44%であった。また残差が-３歳を越えるものが allで2%、５ yで４%であった。 これらの結果から、特に小学校１年生から５年生までのデータ群を用いてBTT法で算出した PHVA推定値は、スプライン平滑化による推定値との±１歳以上の誤差が約半数に認められ、PHVA値を大きく推定する可能性を持つことから、慎重に活用する必要性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第10会場 (2号館4階45教室)

16:02 〜 16:17

[学校保健体育-C-19]ACPにおける運動遊びの種目別定量的評価（測）

身体活動量の観点から

*塚本 将太[1]、大坪 健太[2,3]、春日 晃章[4] (1. 岐阜大学大学院、2. 兵庫教育大学大学院、3. 日本学術振興会特別研究員(DC2)、4. 岐阜大学)

［目的］本研究は、日本スポーツ協会が開発し推し進める ACP（アクティブ・チャイルド・プログラム）の各運動遊びの身体活動量を定量的に評価することを目的とした。
［方法］対象者は、 G県の G大学に在籍する大学生および大学院生33名（男子18名、女子15名）であった。測定項目は、運動強度、歩数および心拍数とした。運動強度の測定には、3軸加速度計 Active Style Pro HJA-750C（オムロンヘルスケア社製）を使用し、10秒毎の METsを計測した。歩数・心拍数の計測には、腕時計型 Wristable GPS SF-850（ EPSON社製）を使用した。測定した運動遊びは、日本スポーツ協会が発行するアクティブ・チャイルド・プログラムのガイドブックに掲載されている遊びを中心に11種目を選択した。運動遊びごとの身体活動量の個人差の大小を検討するため、各測定項目において変動係数を算出するとともに、 Levene検定を適用し、有意な主効果が認められた場合には、 Bonferroniの方法による二群間の等分散性の検定を適用した。また、運動遊びの身体活動量の比較をするため、一元配置分散分析を適用し、有意な主効果が認められた場合、多重比較検定を適用し検討した。
［結果］ Levene検定の結果、運動強度および歩数に有意な主効果が認められ、二群間の等分散性の検定の結果、しっぽ取りは他の5つの遊びよりも分散が有意に大きく、ねことねずみは他の6つの遊びよりも有意に小さかった。分析の結果、全ての項目において有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、二人組で行う運動遊びであるあっちとんでぴょんが他の全ての運動遊びよりも有意に高い運動強度を示した。
［結論］運動遊びの活動量特性について、活動量の高と個人差の大小を包括的に捉えることで、学校現場で運動遊びを実施する際の重要な指標になり得ることが考えられた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑤

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第10会場 (2号館4階45教室)

16:18 〜 16:33

[学校保健体育-C-20]幼児の加速度計評価による座位行動と身体活動の置き換えと運動能力の関連（発,生）

Isotemporal Substitution モデルによる検討

*米野 吉則[1,2]、朽木 勤[1]、町田 修一[2] (1. 兵庫大学、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科)

【背景】幼児の身体活動と運動能力の関係については多く報告されており、身体活動の強度がより高く、また時間が多い方が運動能力は優れている。しかし、人の活動時間は有限であり、身体活動時間を増やすには他の活動を減らす必要がある。つまり、低い強度の身体活動をより高い強度の身体活動に置き換える必要がある。幼児において座位行動を身体活動に置き換えることが運動能力に関連するのかは明らかにされていない。【目的】等時間置換（ IS）モデルを用いて、幼児を対象に身体活動量計による座位時間および身体活動時間と運動能力の関連を横断的に分析した。【方法】対象は4〜6歳児154名(男児81名、女児73名)である。期間は2018年及び2019年の10･11月である。身体活動の測定は Active style PRO HJA-750C(オムロン社)を用いて、一日当たりの座位行動時間(SB)、低強度の身体活動時間(LPA)、中高強度の身体活動(MVPA)、装着時間(WT)を算出した。運動能力は25m走、立幅跳び、ボール投げの3種を測定した。 ISモデルによる重回帰分析では、 SB、 LPA、 MVPAの身体活動時間のうちいずれか1つを除いて回帰モデルに投入し、加えて WT、共変量を投入した。共変量は性別、月齢、身長、体重、 BMIである。【結果】1日15分の SBを MVPA に置き換えることで25m走が低値（ B=-0.62,P=0.03）、立ち幅跳びが高値（ B=1.78,P=0.01）、ボール投げが高値（ B=0.23,P=0.01）を示した。また LPAを MVPA に置き換えることで立ち幅跳びが高値（ B=2.05,P=0.02）、ボール投げが高値（ B=0.35,P=0.01）を示した。【結論】座位行動を中高強度の身体活動に置き換えることは、幼児の走・跳・投のすべての運動能力が高く、また低強度の身体活動を中高強度の身体活動に置き換えることは、幼児の跳・投の2種のみが高いことが明らかとなった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:17 | 第11会場 2号館4階46教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表⑥

座長：柏木 悠（専修大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-21] 小学生の開脚跳び動作の熟達度を評価する簡易版尺度の作成（教）

熟達度の変容からみた運動指導プログラムの効果検証への活用

*佐野 孝[1]、保田 和奏[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[4] (1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 中京大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-22] 小学生におけるマット運動前転動作の観察的運動動作の因子構造と運動プログラムによる動作の改善（方）

*保田 和奏[1]、國土 将平[2]、佐野 孝[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[4] (1. 神戸大学大学院、2. 中京大学、3. 畿央大学、4. 大阪国際大学)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-23] マット運動における後転の目線に関する研究（方）

首の痛みや動感との関連

*長谷川 晃一[1]、周東 和好[1] (1. 上越教育大学大学院　芸術・体育教育学系)

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:17 第11会場 (2号館4階46教室)

15:30 〜 15:45

[学校保健体育-C-21]小学生の開脚跳び動作の熟達度を評価する簡易版尺度の作成（教）

熟達度の変容からみた運動指導プログラムの効果検証への活用

*佐野 孝[1]、保田 和奏[1]、長野 崇[2]、上田 恵子[3]、國土 将平[4] (1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 中京大学)

【目的】開脚跳び動作の観察的評価基準について、少数の項目から分析を用いずに熟達度を同定できる簡易版尺度を作成し、その熟達度評価に基づき、運動指導プログラムの効果を検証することを目的とする。【方法】小学生513名のうち410名のデータを用いて、佐野ほか（2019）で潜在クラス分析から導出された5つの熟達度パターン（失敗型、腕動作依存型、着地不安定型、安定試行型、切り返し出現型）を再現できる６項目を、全30項目の中から精選した。6項目について、当てはまる評価カテゴリの数を合計することで熟達度を評価できる簡易版尺度を作成し、潜在クラス分析を用いた場合との分類一致率を算出した。また、残り103名のデータを用いて、同様に分析結果と簡易版との一致率を算出し、交差検証を行った。放課後運動プログラム「跳び箱運動」（全8回）に参加した3、４年生21名を対象に、指導前後で簡易版尺度による開脚跳びの熟達度評価を行い、熟達度の変容（クロス集計）と項目得点の比較（ウィルコクソンの符号付順位検定）から指導の効果を検証した。【結果】簡易版尺度に最適な項目群として、踏み切りでの「自由脚の屈曲調整」と「リバウンドジャンプ」、着手での「手の突き放し」と「後方回転」、着地での「両脚の揃え」と「静止姿勢」の6項目が選定された。潜在クラス分析と簡易版尺度の評価との一致率は84.1%で、交差検証では87.9%となった。プログラム前後での熟達度の変容は、指導後に熟達度が向上した児童が10名、変わらなかった児童が8名、下がった児童が３名であった。項目得点を比較した結果、「リバウンドジャンプ」と「手の突き放し」で、指導後に有意な動作改善が認められた（$p<0.05$）。一方、熟達度の下がった児童を確認すると、着地の項目で得点が下がっていたことから、踏み切りでの前方への勢いが増したことで着地の安定性が低下した可能性が考えられる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：柏木 悠（専修大学）
2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:17 第11会場 (2号館4階46教室)

15:46 〜 16:01

[学校保健体育-C-22]小学生におけるマット運動前転動作の観察的運動動作の因子構造と運動プログラムによる動作の改善（方）

*保田 和奏[1]、國土 将平[2]、佐野 孝[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[4] (1. 神戸大学大学院、2. 中京大学、3. 畿央大学、4. 大阪国際大学)

【目的】 小学生のマット運動の前転について、動作因果関係を考慮した特性要因図を作成し、技の運動観察的な動作評価尺度を構成すること、およびその動作評価尺度に基づき、運動指導プログラムの効果を検証することを目的とする。 【方法】 神戸市内の小学校に於いて放課後運動プログラム（全11回）に参加した児童を対象に、前転動作を前方・側方から固定撮影した。撮影は、プログラム初回（61名）と最終回（48名）の２回行った。先行研究ならびに撮影した児童の映像等から、動作因果関係を考慮した前転動作の特性要因図を作成した。特性要因図により得られた動作に、2〜3段階の評価段階を設定し、前転の動作評価尺度を作成した。評価尺度に基づき児童の動作を評価し得点分布を算出するとともに、前転の動作を構成する要因を明らかにするため、各動作項目の得点に対してカテゴリカル因子分析を用いて動作因子を抽出し、抽出した因子に対してバリマックス基準の直交回転を施し、各因子を解釈した。その後、動作要因ごとの運動プログラムの効果を検証するため、初回・最終回調査ともに参加した児童37名を対象に、対応のある t検定を実施し、指導前後の因子得点を比較した。 【結果】 特性要因図の動作観点をもとに、全38項目からなる前転の動作評価尺度が作成された。得点分布から「手の位置」（88.2%）、「手の向き」（80.0%）の着手に関する項目の達成率が高く、「股関節角度」（11.8%）、「腰角の増大」（13.6%）の腰角に関する項目の達成率が低かった。カテゴリカル因子分析の結果、4因子が抽出され、この4因子で全分散の50.2%を説明した。前転の動作要因として「上体支持動作」「重心引き上げ動作」「順次接触動作」「立ち上がり動作」が抽出された。プログラム前後での因子得点を比較した結果、「立ち上がり動作」において指導後に有意な動作の改善が認められた（ $p<0.05$）。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表⑥

座長：柏木 悠（専修大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:17 第11会場 (2号館4階46教室)

16:02 〜 16:17

[学校保健体育-C-23]マット運動における後転の目線に関する研究（方）

首の痛みや動感との関連

*長谷川 晃一[1]、周東 和好[1] (1. 上越教育大学大学院　芸術・体育教育学系)

マット運動における後転の主な技術は、「順次接触技術」「回転加速の技術」「頭越しの技術」とされており、その中でも、「順次接触技術」は、スムーズに後方へと転がるために必要な技術である（金子，1982）。順次接触技術を成立させるには、頭部の腹屈が不可欠の動作となるが、そのためのコツとして、複数の指導書（NPO法人 CSP，2010；中島，2005；文部科学省，2015；三好，2018）では「へそを見る」という記述が見られる。この記述情報は、筆者がこれまで見てきた指導実践現場における助言内容としても度々耳にしてきたことでもあった。しかし、筆頭著者が過去に大学生に後転を指導した際に「へそを見る」意識の有効性に疑問を抱くこととなった。その学生は、後転は一応できているものの回転速度が遅く、首に強い痛みを感じていることを報告していた。報告を踏まえて後転を観察すると、顎が胸に接触するほど頭部が過度に腹屈していることが見受けられた。そこで「どこを見て後転してるのか？」と質問すると「へそを見ています」と回答したため、筆頭著者は代行的にへそを見て後転を行った。すると、首に若干の痛みと技のやりにくさを感じた。そこで、普段実施している仕方で目線はどこに置いているかを自己観察すると、膝かつま先辺りを見ていることが直観された。そのため、今度は学生に膝かつま先を見て実施するように助言したところ、学生からは首の痛みがなくなったと報告された。また、回転速度が速くなったこと、学習者の動感にも変化が生じたことが観察された。

そこで本研究では、へそ、膝、つま先の異なる目線で後転を実施した際に、首の痛みや動感にどのような影響が生じるのかについて、映像記録およびアンケート調査を通して検証する。それにより、効果的な後転の指導方法の構築に資する情報を提示することを目的とする。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題Ｃ】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第5会場 2号館4階4E教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

15:30 ~ 15:45

[学校保健体育-C-13] 体育実技と感染症の学習を関連づけた実践研究（教）

新型コロナウイルス感染症対策に注目して

*髙田 佳孝[1,2]、神谷 拓[3] (1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学大学院、3. 関西大学)

15:46 ~ 16:01

[学校保健体育-C-14] 技能の主観的な振り返りを核にしたOPPシートが児童の認識に与える影響（教）

小学校6年生のハンドボール授業における実践に着目して

*三本 雄樹[1]、大庭 昌昭[2] (1. 新潟市立小針小学校、2. 新潟大学人文社会科学系)

16:02 ~ 16:17

[学校保健体育-C-15] 体育における家庭でのポートフォリオ検討会の効果に関する研究（教）

*石井 幸司[1,2]、高木 宏[2]、鈴木 直樹[3] (1. 宇都宮大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

16:18 ~ 16:33

[学校保健体育-C-16] 小学校における放課後運動プログラムの構築・実施とその有効性ならびに課題（教,測,発）

*國土 将平[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[2]、高見 和至[4]、佐野 孝[4]、保田 和奏[4] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 神戸大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに貢献できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第5会場 (2号館4階4E教室)

15:30 〜 15:45

[学校保健体育-C-13]体育実技と感染症の学習を関連づけた実践研究（教）

新型コロナウイルス感染症対策に注目して

*髙田 佳孝[1,2]、神谷 拓[3] (1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学大学院、3. 関西大学)

これまでの学習指導要領において、体育実技と保健の学習は関連づけて指導することが求められてきたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、その要請は強くなっている。実際に、保健の学習において、新型コロナウイルス感染症に関する正しい知識を理解することが求められてもいる。しかし、そのような保健の学習と体育実技を関連づけた授業実践は停滞しており、感染症の学習と体育実技を関連づけた教材づくりについても研究が蓄積されていない。そこで本研究は、体育実技と保健の感染症に関わる学習を関連づけた実践をおこない、子どもたちが主体となって、新型コロナウイルス感染症対策を意識した三密を防ぐ学習規律やルールを構築しながら、体育実技の学習成果を深める授業のあり方について検討することにした。具体的には、感染症を予防する行動や規律を記載した学習カードの分析を通して、行動の変容を明らかにする計画である。詳細は当日に報告する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第5会場 (2号館4階4E教室)

15:46 〜 16:01

[学校保健体育-C-14]技能の主観的な振り返りを核にしたOPPシートが児童の認識に与える影響（教）

小学校6年生のハンドボール授業における実践に着目して

*三本 雄樹[1]、大庭 昌昭[2] (1. 新潟市立小針小学校、2. 新潟大学人文社会科学系)

現行の小学校学習指導要領では、育成を目指す資質・能力が三つの柱に整理された。堀（2019）は、「資質・能力を育成するためには、学習者自身が自分の学びについて自覚していくことが重要です。 OPPシートを用いることにより、認知の調整すなわちメタ認知的資質・能力を育成することが可能になります。」と述べ、 OPPA論を提唱している。本研究では、児童自身が技能の主観的な評価を記述することができるOPPシートを試作し、小学校6年生28名を対象としたハンドボールの授業実践を行った。今回試作したOPPシートを用いることで、児童の認識にどのような影響を与えることができるのかを事例的に検討することが本研究の目的である。今回試作したOPPシートの特徴は、児童自身が主観的に技能の達成度を評価する「できたメーター」を取り入れたことである。毎時間、長方形の枠に一本の直線を引いて達成度を表し、前時と変わった理由を「できたメーターの長さの理由」として記述させた。そして、児童一人一人が引いた「できたメーター」の直線までの長さを測って数値化し、毎時間のクラス全体の平均値の変化を統計的に分析した。また、「できたメーターの長さの理由」に記述された内容は、計量テキスト分析ソフト KH Coder（樋口、2017）の対応分析機能と共起ネットワーク機能を用いて比較・検討した。その結果、授業が進むにつれ、児童一人一人が「できたメーター」に示した達成度は、統計的に有意に向上する傾向が示された。また、「できたメーター」の長さの増減に合わせて、メインゲームの課題やそれを解決するために必要となる動きに関する記述内容が確認された。これらのことから、「できたメーターを取り入れたOPPシート」を用いることで、小学校6年生の児童自身が技能についての主観的な評価を記述しながら、自己の変容に対する認識を深めることができる可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第5会場 (2号館4階4E教室)

16:02 〜 16:17

[学校保健体育-C-15]体育における家庭でのポートフォリオ検討会の効果に関する研究（教）

*石井 幸司[1,2]、高木 宏[2]、鈴木 直樹[3] (1. 宇都宮大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

ポートフォリオ評価法とは、「ポートフォリオづくりを通して、学習者が自らの学習のあり方について自己評価することを促すとともに、教師も学習者の学習活動と自らの教育活動を評価するアプローチ」である（西岡，2016）。ポートフォリオ評価を用いることで、子供と教師が学習をふりかえりながら到達点を確認することを通して、子供の自己評価を促し、戦術的理解に効果があったことが明らかになっている（川端ら，2005）。このポートフォリオ評価では、自己評価場面としてポートフォリオ検討会が設定され、継続的に収集された評価情報を手がかりに、これからの学びを見直す重要な機会として位置づけられている。さらに、このポートフォリオ検討会に、教師と子供以外にステークホルダーとして保護者が参加することで、子供の学びを促進する効果があることが明らかにされている（ Burkeら，1994；奈須，2020）。一方、家庭で子供を育てる保護者の存在は子供の学びに大きな影響を与えており、保護者の認識は子供の学びを支える大きな要因となるにも関わらず、ポートフォリオ検討会に参加した保護者にどのような効果があるのかは、検討されてきていない。そこで、本研究では、保護者を対象とし、子供が保護者と共に家庭で行なう体育のポートフォリオ検討会の効果を明らかにすることを目的とした。具体的には、1年間を通して定期的に体育のポートフォリオ検討会を家庭で実施した、4地域の小学校第5学年の子供をもつ保護者117名の自由記述アンケートをテキストマイニング分析法と質的帰納的分析法で分析した。調査の結果、保護者は家庭での子供とのポートフォリオ検討会を通して、子供の成長過程に注目しながら、アドバイスをしたり称賛をしたり、次のめあてを共に考えたりするコミュニケーションが増えることが明らかになった。さらに、授業参観等で体育を見るよりも子供の内面を理解しながら体育の活動をまなざすことが明らかになった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表④

座長：末永 祐介（熊本大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第5会場 (2号館4階4E教室)

16:18 〜 16:33

[学校保健体育-C-16]小学校における放課後運動プログラムの構築・実施とその有効性ならびに課題（教,測,発）

*國土 将平[1]、上田 恵子[3]、長野 崇[2]、高見 和至[4]、佐野 孝[4]、保田 和奏[4] (1. 中京大学、2. 大阪国際大学、3. 畿央大学、4. 神戸大学)

【目的】小学校において、放課後に学外の指導者による運動プログラムを提供し、学外指導者の雇用支援体制の設計ならびにシステムを構築・実施し、その有効性や課題を検証する。【方法】神戸市の公立小学校1校（児童数714名、教員数25名）を対象に、2021年10月～2022年1月まで、放課後運動プログラムを実施した。実施に先立ち、7月に実施の告知と保護者のニーズ調査を実施し、そのニーズを参考に、月曜から金曜日まで週5回、体育の復習型（5種類）、身体操作系（9種類）、ゲーム型（5種類）のプログラムを作成した。指導には、外部の運動指導者13名があたり、児童167名、のべ512名が参加した。また、塾経営管理サイトを利用し、参加児童の出席管理並びに保護者との連絡に活用した。プログラムの開始の初期ならびに終了期に児童・保護者に質問調査を実施した。【結果・考察】プログラム全体の出席率は83.1%であり、最も高かったのはマット運動（1・2年生）の91.6%、最も低かったのはバスケットボールの73.6%であった。また週別にみると、最も出席率が高かったのは第1週目の93.0%、最も低かったのは12週目の73.8%であった。児童について、運動プログラムへの満足度は肯定的回答が70%を超えており、大半の児童が満足したと回答していた。5-6年生女子は、肯定的回答が35.7%に、不満であるという否定的回答も28.6%みられた。プログラム継続の希望は、3-4年生の男子で85.3%、女子で69.6%と高く、5-6年生では、男子が72.0%、女子が35.7%であった。保護者について、運動プログラムの継続を93.5%が希望した。また、謝金が必要と想定した場合、 1月当たり2000円が30.8% 、1000円が26.4% 、500円と答えたものが14.3%、3000円が13.7% であった。これらの金額を支払ってでも参加したい者は64.1%、無料なら参加したいと答えた割合は32.6%であった。（本研究はスポーツ庁令和３年度武道等指導充実・資質向上支援事業の助成をうけて実施された。）

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題Ｃ】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第1会場 3号館3階301教室

健康福祉研究部会【課題C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

15:30 ~ 15:45

[健康福祉-C-05] 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下における生活習慣及び健康状態に関する研究（介）

M県S町のスポーツ庁事業参加者の事例

*田中 亨[1]、橋本 実[1]、小池 和幸[1] (1. 仙台大学)

15:46 ~ 16:01

[健康福祉-C-06] 遠隔健康支援のためのダンスプログラムの開発と効果測定（介）

*河野 喬[1]、森木 吾郎[1]、房野 真也[1]、高田 康史[1]、相川 貴裕[1]、加地 信幸[1] (1. 広島文化学園大学)

16:02 ~ 16:17

[健康福祉-C-07] 吉中式マルチ音楽体操の実践（介）

高齢期の運動を長続きさせる手段と効果

*吉中 康子[1] (1. 京都先端科学大学)

16:18 ~ 16:33

[健康福祉-C-08] 精神科リハビリテーションにおける歩行動作改善のための運動プログラムの検討（介）

スクワット動作とジョギング動作を中心としたダンス・プログラムの効果比較

*中村 恭子[1]、鈴木 宏哉[1] (1. 順天堂大学)

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第1会場 (3号館3階301教室)

15:30 〜 15:45

[健康福祉-C-05]新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下における生活習慣及び健康状態に関する研究（介）

M県 S町のスポーツ庁事業参加者の事例

*田中 亨[1]、橋本 実[1]、小池 和幸[1] (1. 仙台大学)

本研究では M県 S町のスポーツ庁事業参加者42人(男性13人68.8±10.9歳、女性29人69.2±7.4歳) を対象にCOVID-19流行前と流行下での生活様式の変化と運動セルフ・エフィカシーを調査した。さらに筋肉量等の体組成成分測定をおこない流行前後で比較した。

結果、体組成成分は男性で体脂肪率増加($p<0.05$)、女性では全身筋肉量減少($p<0.01$)、上肢筋肉量減少($p<0.01$)、体幹筋肉量減少($p<0.01$)、下肢筋肉量減少($p<0.01$)を認めた。さらに約45%に関節痛の増加を認め、そのうち70%以上が女性であり、筋肉量の減少が関節痛発生につながった可能性がある。また、孤独感の増加が約35%に認められた。会合や運動教室などの地域活動減少によりコミュニケーション不足等に起因していると考えられた。男性の運動セルフ・エフィカシーは変化がみられず、体脂肪は増加したが運動時間、体重、筋肉量はあまり変わらなかった。一方、女性は低下傾向にあり、運動時間の減少、筋肉量の減少、体脂肪量の増加傾向がみられた。

本研究では、 COVID-19に対する不安や感染防止策等の行動制限が特に女性に影響を与え、運動継続意欲を低下させた可能性が考えられた。このような環境下でも自宅や1人または少人数でおこなえる運動を継続することが重要であることが明らかになった。今後も S町と連携しソーシャルディスタンス等の感染防止対策を講じた運動教室を開催し人々の健康維持・増進につなげる予定である。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第1会場 (3号館3階301教室)

15:46 〜 16:01

[健康福祉-C-06]遠隔健康支援のためのダンスプログラムの開発と効果測定（介）

*河野 喬[1]、森木 吾郎[1]、房野 真也[1]、高田 康史[1]、相川 貴裕[1]、加地 信幸[1] (1. 広島文化学園大学)

現在、自宅等の安全安心な環境下でも身体活動・運動の実施率を維持・向上させるための遠隔健康支援の取り組みが求められている。本研究では、アダプテッド・スポーツの観点を用いて、一人でも安全に行うことができるダンスプログラムを開発し、その効果を測定することを目的とした。 アダプテッド・スポーツへの参加は、身体的健康だけではなく、主観的健康に好影響を及ぼすことが示されており (Muraki et al., 2000; Diaz et al., 2019)、高齢者ないし要介護高齢者に対しても効果があるとされている (Kawano et al., 2020; 2022)。本報告では、特に、転倒防止に配慮したダンス・プログラムを開発し、その実施による短期的影響及び中期的影響を測定・分析した。短期的影響については、実施回前後の気分プロフィール検査、主観的運動強度、及び自律神経バランスを評価した。自律神経バランスは、 R-R間隔検査の結果をローレンツプロットによって出力し、副交感神経活動について分析した。中期的影響については、実施期間の初回と最終回の健康関連 QOL調査、 Berg Balance Scaleを用いて評価を行った。 これらの結果から、アダプテッド・スポーツとしてのダンスプログラムが、高齢者の身体活動・運動の実施率を維持・向上させる遠隔健康支援として、有用であるかどうかが確認できる。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第1会場 (3号館3階301教室)

16:02 〜 16:17

[健康福祉-C-07]吉中式マルチ音楽体操の実践（介）

高齢期の運動を長続きさせる手段と効果

*吉中 康子[1] (1. 京都先端科学大学)

1960年に Allenらが、体内総カリウム量から加齢に伴う筋量減少を報告して以来、さまざまな手法を用いて加齢と筋量との関連が報告されている。高齢者は歳をとるに従って徐々に日常生活の活動性や自立度が低下し、筋量や筋力の低下によって、やがて要介護状態に陥っていく。しかし、これまでの研究から運動介入により予防や改善が可能であり、音楽体操によって心身両面での改善がみられた。

Sarcopenia（加齢性筋肉減弱症）により、一般的に70歳代で20歳代のピーク時に比べ、骨格筋面積が25〜30%、筋力は30〜40%減少し、50歳以降毎年1〜2%程度筋肉量は減少すると報告されている。人生100年と言われる時代に、70歳以降でも楽しめるプログラムが必要となる。

運動する習慣は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染と重症化のリスを低下させ、ワクチンの効果を高めることを期待できることが、英国のグラスゴー カレドニアン大学やベルギーのゲント大学の研究で明らかになった。

ウォーキングやサイクリングなどの「活発な運動を週に150分以上」継続して行っている人は、市中感染症の罹患リスクが31%低く、感染症関連死のリスクも37%低いという。

マルチ音楽体操実施者のコロナワクチン接種後の後遺症や体力・心身面への効果について発表する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

健康福祉研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第1会場 (3号館3階301教室)

16:18 〜 16:33

[健康福祉-C-08]精神科リハビリテーションにおける歩行動作改善のための運動プログラムの検討（介）

スクワット動作とジョギング動作を中心としたダンス・プログラムの効果比較

*中村 恭子[1]、鈴木 宏哉[1] (1. 順天堂大学)

本研究は精神科患者の歩行動作改善に有効で、かつ気分改善効果のあるダンス・プログラムの検討を目的とした。

精神科デイケア通所の患者4名（46.3±11.4歳、病歴23.2±2.8年）を対象として、1期にスクワット動作中心のダンス（スクワット系）、2期にジョギング動作中心のダンス（ジョギング系）を取り入れた運動プログラムを、各期週1回90分×5週実施した。効果測定として、各ダンスの運動強度、各回前後の気分変化（ STAI A-state、 MCL-s2）、各期間前後の体力・運動能力測定（30秒椅子立ち上がり、ステッピングテスト、10m歩行）を実施した。他に、学生を被験者として筋電図により各ダンスの筋活動を確認した。

各ダンス実施中の% HRRはスクワット系67.9±11.3%、ジョギング系71.6±6.9%で、ジョギング系の方がやや高めであったが有意差はなかった。 METsではスクワット系2.4±0.7METs、ジョギング系7.6±0.8METsで、ジョギング系の方が有意に高かった。一方、筋電図ではスクワット系は前脛骨筋やヒラメ筋、外側広筋が大きく反応しており、下肢筋群への刺激が大きいことが確認された。

各回の気分変化では、スクワット系もジョギング系も STAI状態不安が有意に低減、 MCL-s2ポジティブ感情尺度の快感情とリラックス感が有意に向上、不安感が微減していたことから、いずれのダンス・プログラムも気分改善効果が認められた。

体力・運動能力測定の結果、スクワット系は30秒椅子立ち上がりで12.5±3.2%、ステッピングテストで2.6±4.6%の向上傾向が見られた。また、10m歩行の歩幅が3.1±3.3%伸びて歩数が2.9±3.1%減少した。しかし、ジョギング系ではどの測定項目でも改善が見られなかった。患者の歩行動作改善にはスクワット動作中心のダンス・プログラムが有効であることが示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第2会場 3号館4階401教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

15:30 ~ 15:45

[競技スポーツ-C-05] 北海道マラソンにおけるレース終盤のペース低下要因の走力別検討（生）

*井上 恒志郎[1]、山口 明彦[1]、福家 健宗[1] (1. 北海道医療大学全学教育推進センター)

15:46 ~ 16:01

[競技スポーツ-C-06] 近年の段違い平行棒の傾向と今後の展望（方）

*村山 大輔[1] (1. 京都先端科学大学)

16:02 ~ 16:17

[競技スポーツ-C-07] 平均台の技術開発に関する発生運動学的研究（方）

跳躍技群の始原論的構造分析

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

16:18 ~ 16:33

[競技スポーツ-C-08] 1924年パリ五輪に向かう日本選手団一行の船上でのトレーニングに関する一考察（人,史）

野口源三郎の著作を手掛かりとして

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

2022年9月1日(木) 15:30 ～ 16:33 第2会場 (3号館4階401教室)

15:30 ～ 15:45

[競技スポーツ-C-05]北海道マラソンにおけるレース終盤のペース低下要因の走力別検討（生）

*井上 恒志郎[1]、山口 明彦[1]、福家 健宗[1] (1. 北海道医療大学全学教育推進センター)

市民マラソンでは、記録上位者ほどレースペースが一定で、下位者ほどレース後半のペース低下が大きいため、レース後半のペース低下を抑えたイーブンペースのレース展開が理想とされている。ペース低下は、練習不足やオーバーペースなど様々な要因が原因で起こると考えられるが、夏マラソンや走力別のペース低下要因は不明である。本研究では、夏の北海道マラソンにおける走力別のペース低下要因の検討を目的とした。北海道マラソン2019出場男子選手に、大会直前に身長体重、年齢、走歴、シーズンベスト（ SB）、大会前３ヶ月の月間走行距離・最大一回走行距離・20kmペース走実施の有無をアンケート調査した。ネットタイムと10km毎の通過タイムは大会後に取得し、10km毎のレースペースと最初の10kmに対するペース低下率を算出した。 SBから全体をサブ3、3.5、4、4.5、それ以上の5群に分け、各群をさらに30km以降のペース低下率が小さい（ S）集団と大きい（ B）集団に中央値で分割した。各群で S vs B集団の比較を行い次の結果を得た。1）全群： B集団は S集団よりもネットタイムが遅い。2）サブ3群： B集団は S集団よりも月間走行距離と最大一回走行距離が短く、練習頻度も少ない。3）サブ3.5群： B集団は S集団よりも BMIが大きく、高年齢層が多い。4）サブ4群： B集団は S集団よりも20kmペース走未実施割合が高い。5）サブ4.5＆それ以上群： B集団は10kmまでは S集団よりもレースペースが早いが、20km以降は遅い。またサブ4.5群では、 B集団は S集団よりも最大一回走行距離が短い。以上から、夏マラソンでも30km以降のペース低下が記録低下につながること、またペース低下要因は走り込み不足（サブ3）や体重増加＆加齢（サブ3.5）、20kmペース走の未実施（サブ4）、レース前半のオーバーペース（サブ4.5以上）など走力で異なることが示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

2022年9月1日(木) 15:30 ～ 16:33 第2会場 (3号館4階401教室)

15:46 ～ 16:01

[競技スポーツ-C-06]近年の段違い平行棒の傾向と今後の展望（方）

*村山 大輔[1] (1. 京都先端科学大学)

体操競技における段違い平行棒は、男子の平行棒から段差をつける等の変容を見せて1936年のベルリンオリンピック大会から正式に独立した。2022年までにこの種目は、数々の器具規格の変更やルール変更を経て、技術も大きく変化してきた。とりわけ、近年では懸垂系の技の発展が著しく、演技における実施率も支持系の技に比べて高い。それ故、段違い平行棒は「男子の鉄棒化」と呼ばれることがある。また、多くの選手が似たような演技構成になる「モノトニー現象」も指摘されており、新たな技の出現や傾向が期待されている。

本研究では、近年の段違い平行棒の技術を史的発達の視点から示し、指導現場に有益となる今後の展望について示唆することを目的とした。

方法は、初めに、過去10年の国際大会での段違い平行棒の演技を把握し、近年の演技及び技術の傾向を把握する。史料は、関連の文献、採点規則、日本体操協会が発刊する研究部報、大会映像を用いた。続いて、演技構成や実施の背景にある志向性を捉え、最後にモノトニー現象を改善する方法を提案する。

考察の結果、以下のことが明らかとなった。

1) 近年は、ルールの客観化傾向により、「高難度志向」が認められる

2) 組み合わせ加点(CV)による技の連続で高得点を狙う傾向がある

3) 独創的な単独技がモノトニー現象の打破に繋がる

これらのことから、段違い平行棒特有の独創的単独技の実施が重要であることが分かった。独創的単独技の具体については、当日発表する。

本研究では、近年の段違い平行棒の技術を史的発達の視点から示し、指導現場に有益となる知見が得られた。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

2022年9月1日(木) 15:30 ～ 16:33 第2会場 (3号館4階401教室)

16:02 ～ 16:17

[競技スポーツ-C-07]平均台の技術開発に関する発生運動学的研究（方）

跳躍技群の始原論的構造分析

*仲宗根 森敦[1] (1. 東京学芸大学)

トレーニングの場面では開発された技の価値を検証し、確かめる作業を行う必要がある。それをおこたってしまった場合、歴史的な淘汰に堪えられずに消えてしまう技を産んでしまう可能性を否定できないからである。体操競技においてはこれまで多くの技が開発された一方で、採点規則から削除された技も少なくない。例えば2022年から施行されている女子採点規則において、平均台の〈片膝水平立ちターン〉が削除されている。このようにルールの変更に伴って練習していた技が採点規則より削除された場合にはこれまでの苦労が報われないばかりか、演技構成を大きく見直す必要に迫られてしまい、場合によっては選手生命を左右することもありえる。そのためには始原論的構造分析を欠かすことはできないであろう。発生運動学における始原論的構造分析とは、通時的・共時的な視点から動感形態に匿名的に働く価値志向性を明らかにするためにフーコーのアルケオロジーの視点を取り入れた分析方法である。これにより、今後認められると考えられる新技開発の方向性を定めることができるとともに、トレーニングすべき技の取捨選択をすることができる。さらに、跳躍技群の体系的なトレーニング計画の作成に寄与できるのである。本研究ではこれまでの技術開発の動向、採点規則における技の追加・削除の情報を整理することで平均台の跳躍技群における匿名的な価値志向性を明らかにすることを目的とする。他種目である女子ゆか運動においては、「客観性」と「延長性」という2つの志向性が跳躍技群の固有原理として示されている。平均台でも同様に角度等を用いて客観的に評価できる形態の跳躍、つまり数値を用いて評価可能な技が生き残り、新技として発表された場合には認められる可能性が示唆された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：小西 康仁（東海大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第2会場 (3号館4階401教室)

16:18 〜 16:33

[競技スポーツ-C-08]1924年パリ五輪に向かう日本選手団一行の船上でのトレーニングに関する一考察（人,史）

野口源三郎の著作を手掛かりとして

*大林 太朗[1] (1. 筑波大学)

1912年ストックホルム大会、1920年アントワープ大会に続く三度目のオリンピック出場を控えた日本選手団は、南回り航路（南シナ海ーインド洋ー地中海経由）で開催都市のパリに向かった。約6週間にわたる船旅において、当時のアスリートたちはいかに鍛錬し、どのようにコンディショニングを行ったのか。本発表では、選手団一行に帯同した野口源三郎（大日本体育協会主事）が遺した文献史料を主な手掛かりとして、特に陸上競技と水上競技に出場する各選手の船上での体力・技術トレーニングの内容を分析し、一部の写真史料とともに報告したい。

狭小な甲板上（デッキ）でのランニング・ステップ（足踏み）、尻尾部にひもを括り付けたやり・円盤を洋上に放つ投てき練習、あるいは船の中に設置された約6m四方のプールでの水中トレーニングなど、その多岐にわたる試みは独創的で目を見張るものが多い。あらためて各競技団体（連盟）が発足する以前の時代に着目し、いわば歴史の中に埋もれてしまっている先駆者らの足跡を辿ることで、ひいては現在の日本における科学的根拠に基づくトレーニングの理論と実践に関する一つのルーツに迫ってみたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題Ｃ】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

2022年9月1日(木) 15:30 ~ 16:33 | 第3会場 3号館4階402教室

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）

15:30 ~ 15:45

[競技スポーツ-C-09] ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する個人戦術力の研究（スポーツ運動学）

吉本 遼[1]、曽根 純也[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

15:46 ~ 16:01

[競技スポーツ-C-10] 国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手におけるグループ戦術の実践知に関する事例研究（方）

ピックプレイに着目して

*松本 沙羅[1]、會田 宏[2] (1. 筑波大学大学院コーチング学学位プログラム、2. 筑波大学)

16:02 ~ 16:17

[競技スポーツ-C-11] 日本代表男子および女子水球選手の最大牽引力およびパワーの比較と特徴について（方,バ,生）

電磁ブレーキ式エルゴメータの活用

*若吉 浩二[1]、榎本 至[2]、庭田 建[3] (1. 大阪経済大学、2. 鎌倉女子大学、3. （株）OCL)

16:18 ~ 16:33

[競技スポーツ-C-12] バスケットボールの速攻時の状況認知に関する基礎的知識の因子構造（方）

*八板 昭仁、青柳 領[1]、倉石 平[2]、野寺 和彦[3]、長嶺 健[1]、大山 泰史[4] (1. 福岡大学、2. 早稲田大学、3. 八戸学院大学、4. 佐世保工業高等専門学校)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第3会場 (3号館4階402教室)

15:30 〜 15:45

[競技スポーツ-C-09]ハンドホ゛ールにおける非利き腕のフ゜レーに関する個人戦術力の研究（スポーツ運動学）

本 遼[1]、曽根 純也[2] (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

一般にゴール型球技の指導においては、利き側・非利き側に関わらず両側とも同じように動かすことが理想とされている。例えば、サッカーの育成年代における指導では、利き足だけでなく左右の足を同程度使えるよう育成していくことの重要性が述べられており（日本サッカー協会、2020）、同様にバスケットボールでも、ドリブルやパス等のボールコントロールが左右の手でできるように推奨されている（日本バスケットボール協会、2002）。しかし一方で、ハンドボールの指導教本（日本ハンドボール協会、1992）では、非利き腕の技術指導に関する記述はなく、実際にパス・ドリブル・シュート等の局面に非利き腕の時間が割かれる練習も少ないのが現状である。この事実は、非利き腕の技術がゲーム状況の合目的的な解決に対して有効であると認識されていないことに起因しているものと考えられ、冒頭で述べた両腕での技術を習得する理想に対しハンドボール界では立ち遅れの様相を呈してしまっているのである。しかし、ハンドボール界で非利き腕でのプレーが皆無というわけではない。国内トップリーグですでに若干の事例が散見されている。こうした事例があるにもかかわらず個人の技術として葬り去られていくにはあまりにも無価値といえる。したがって、ハンドボールの非効き腕プレーに関する実践知を明らかにしていくことは後進の育成のためにも急務であるといえる。

そこで本研究では、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関する基礎的な知見を得ることを目的として、日本ハンドボールリーグ経験のある選手2名を対象に面接を実施した。ここでは、ハンドボールの非利き腕プレーに関する動きのコツやそのコツを掴むまでの習熟過程、さらに個人戦術力との関係についても聞き取りを行い、現象学的手法を用いた分析を行った。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）

2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第3会場 (3号館4階402教室)

15:46 〜 16:01

[競技スポーツ-C-10]国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手におけるグループ戦術の実践知に関する事例研究（方）

ピックプレイに着目して

*松本 沙羅[1]、會田 宏[2] (1. 筑波大学大学院コーチング学学位プログラム、2. 筑波大学)

2020年東京五輪では、女子バスケットボール日本代表が銀メダルを獲得する偉業を成し遂げた。これは、体格的ハンデを持つ日本女子チームが、100を超えるフォーメーションを駆使して、技術、戦術を磨きあげた結果である。バスケットボールにおけるフォーメーションは2対2、3対3といったグループ戦術を組み合わせて構成されている。これは、チームの戦術構想を実現する手段として重要な役割をもつ。

本研究の目的は、女子バスケットボール日本代表のポイントガードが有するグループ戦術に関する実践知を、インタビュー調査により事例的に解明し、指導現場に役立つ知見を提供することであった。対象者は、町田瑠唯選手1名であった。対象場面は、バスケットボールにおいて最も多用されているグループ戦術「ピックプレイ」とした。これは、ボールマンであるユーザーとそのディフェンダー、スクリーンをかけるスクリナーとそのディフェンダーの2対2の場面である。調査内容は、ピックプレイ時のユーザーとしての動きのコツ、味方および相手に向けている注意、上達過程での主要な出来事であった。インタビューにおける全ての発言内容を逐語録として文章に起こし、語りの内容としてまとめ、それを質的に解釈した。

その結果、町田氏は、ピックプレイの準備局面では対峙する相手との距離（間合い）を重視していること、主要局面では自らのプレイスピードを協働するスクリナーの動作に合わせつつ、スクリナーディフェンダーの状況を把握できるようにもコントロールしていることが分かった。また、ユーザーディフェンダーを突破した後、自らシュートを狙う場合は味方へパスをする目線を配り、味方へのパスを狙う場合は目線を下げてドライブの演出をしてスクリナーディフェンダーとの駆け引きしていた。しかし、その目線に相手が反応しない場合には目線で示したプレイをそのまま実行する行動戦略を用いていることが明らかになった。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）
2022年9月1日(木) 15:30 ～ 16:33 第3会場 (3号館4階402教室)

16:02 ～ 16:17

[競技スポーツ-C-11]日本代表男子および女子水球選手の最大牽引力およびパワーの比較と特徴について（方,バ,生）

電磁ブレーキ式エルゴメータの活用

*若吉 浩二[1]、榎本 至[2]、庭田 建[3] (1. 大阪経済大学、2. 鎌倉女子大学、3. （株）OCL)

【目的】水球選手では、水中静止状態から水抵抗に打ち勝つための牽引力やボディコンタクトの中で力強く移動する牽引パワーが求められる。その中でもスカーリングと巻き足の同時動作（動作①）やクロール泳と蹴り足の同時動作（動作②）は、水球選手に求められる重要な泳法といえる（若吉2017、 Wakayoshi 2018）。これまで日本男子代表は自らオリンピック出場権獲得を果しているが、女子においては自国開催によるオリンピック出場のみである。そこで、本研究の目的は男女のそれらの泳法の牽引力およびパワーを比較検討し、女子選手の競技力向上に向けた新たな知見を得ることである。
【方法】被験者は男女とも世界大会に向けて合宿に参加した男子選手16名および女子水球選手19名である。牽引負荷装置として電磁ブレーキ式自転車エルゴメータを用いた。男子の牽引負荷は0.5から2.0kp、女子は0.3から1.2kpの範囲で4段階設定し、牽引時間は12秒とした。牽引時の移動動作は動作①と動作②とした。 負荷(x)と速度(y)との関係が y=-ax+bになることから、負荷と速度を乗じることで算出されるパワー（ y）は、 $y=x(-ax + b)$となり、 $y=-a(x - b/2a)^2 + b^2/4a$に変換できる。つまり $x - b/2a=0$の時にパワー（ y）は最大牽引パワー（ $b^2/4a$）となり、最大牽引力は y=0として b/aで求められる（若吉、2017）。
【結果および考察】男女全ての測定において負荷と牽引速度は顕著な直線関係を示し、最大牽引力とパワーの推定が可能となった。動作①と②の最大牽引力およびパワーとも女子は男子の63～67%の範囲となり、大きな差があることが判明した。またポジション別にも、男女に顕著な差や特徴がみられたことから、女子選手の牽引力およびパワーをより高める必要があるのではないかと考える。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 C】口頭発表③

座長：横山 克人（札幌国際大学）
2022年9月1日(木) 15:30 〜 16:33 第3会場 (3号館4階402教室)

16:18 〜 16:33

[競技スポーツ-C-12]バスケットボールの速攻時の状況認知に関する基礎的知識の因子構造（方）

*八板 昭仁、青柳 領[1]、倉石 平[2]、野寺 和彦[3]、長嶺 健[1]、大山 泰史[4] (1. 福岡大学、2. 早稲田大学、3. 八戸学院大学、4. 佐世保工業高等専門学校)

バスケットボールのゲームにおける速攻では、状況の分析やプレイに関する意思決定にも速さが求められるので状況判断能力は極めて重要である。そして瞬間的で複雑なゲーム場面を的確に把握する認知的要因では、作戦や戦術などの競技力に関わる基本的知識の有無が競技中の状況判断やプレイの正確性に深く関わっていると言われている。速攻における状況認知については、これまでその状況の類型化がなされているに過ぎず、それらに関連する基礎的な知識を規定する包括的な要因を明らかにすることは、チーム戦術やトレーニング方法を計画・立案する上で重要になると考えられる。本研究の目的は、バスケットボールのゲームにおける速攻の様々な場面における状況認知に関する知識テスト(八板ほか, 2022)を実施し、速攻の場面における状況認知に関する潜在的な因子構造を明らかにすることである。さらに、抽出された状況認知因子とチームの競技水準、性との関連について検討する。対象標本は、大学のバスケットボール部に所属する250名(男子115名、女子135名)であり、全国大会出場の有無と性によって4つの群に分類した。27項目の「状況判断と戦術行動に関する知識テスト」の正誤から主因子法、斜交回転プロマックス法による探索的因子分析を行ったところ、「F1:ボールマン近くに相手ディフェンダーがいる状況の認知」「F2:サイドレーンでボールを進めている状況の認知」「F3:ディフェンダーが2人以下のアウトナンバーにおいてボールがフロントコートに進入した状況の認知」「F4:ボール保持者がミドルレーンを進む3レーンブレイクの状況の認知」「F5:ボール保持者がドリブルで進んでいる4対3の状況の認知」の5つの因子を解釈できた。各因子の競技水準、性との関連を検討したところ、F3、F4、F5の3つの因子に有意な差が認められ全国大会群が高値を示した。性差による影響は小さく、競技水準による関連があることが示された。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

各種会議・ミーティング

2022年9月1日(木) 12:40 ~ 13:40 | 第9会場 2号館2階22教室

地域協力学会連絡会議

ランチョンセミナー

2022年9月1日(木) 12:40 ~ 13:40 | 第6会場 2号館1階11教室

ランチョンセミナー⑤／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

司会：菅野 昌明（JATI副理事長、Ph.D. JATI-SATI）

主催者：特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

[ランチョン5-1] JATI（日本トレーニング指導者協会）の活動とトレーニング指導の実際

*有賀 雅史[1,2,3,4] (1. 帝京科学大学医療科学部教授、2. JATI理事長代理、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

[ランチョン5-2] トップアスリートに対するジャンプパフォーマンス改善のためのトレーニング事例

*菅野 昌明[1,2,3,4] (1. 豊田合成Blue Falconストレングス＆コンディショニングコーチ、2. JATI副理事長、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー⑤／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（ JATI）

司会：菅野 昌明（JATI副理事長、Ph.D. JATI-SATI）
2022年9月1日(木) 12:40 ～ 13:40 第6会場 (2号館1階11教室)
主催者：特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

[ランチョン5-1]JATI（日本トレーニング指導者協会）の活動とトレーニング指導の実際

*有賀 雅史[1,2,3,4] (1. 帝京科学大学医療科学部教授、2. JATI理事長代理、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

JATIは、設立時より、日本から発信するトレーニング指導の専門職団体として活動している。科学的根拠を基に安全で効果的なトレーニング方法についての情報発信、教育研究活動に従事している。協会の主な活動と、トレーニングの実践例について紹介する。

＜略歴＞
早稲田大学教育学部教育学科体育学専修卒業、広島大学医学部生物統計学研究生、東邦大学医学部公衆衛生学研究生を経て、女子栄養大学大学院（臨床栄養学）修了。博士（栄養学）。帝京科学大学医療科学部東京柔道整復学科教授（2011年～現在）、帝京科学大学強化部（柔道部、女子駅伝チーム）アスレティックデイレクター。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー⑤／特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

司会：菅野 昌明（JATI副理事長、Ph.D. JATI-SATI）
2022年9月1日(木) 12:40 ～ 13:40 第6会場 (2号館1階11教室)
主催者：特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会（JATI）

[ランチョン5-2]トップアスリートに対するジャンプパフォーマンス改善のためのトレーニング事例

*菅野 昌明[1,2,3,4] (1. 豊田合成Blue Falconストレングス＆コンディショニングコーチ、2. JATI副理事長、3. Ph.D.、4. JATI-SATI)

球技系アスリートにおいて、ジャンプ能力は重要なパフォーマンスのひとつであり、近年では跳躍高だけではなく跳躍速度、パワー、フォース、反応筋力、負荷ー速度プロフィールなどの指標によって評価することがトレーニング指導の実践現場においてもできるようになってきた。本セミナーでは、国内トップレベルのアスリートに対する、ジャンプパフォーマンス改善のためのエビデンスを活用・応用したトレーニング指導の実例を紹介する。

＜略歴＞
博士（学術）。オリンピック代表、日本代表、プロ、実業団のトップアスリートのスポーツ＆パフォーマンスサイエンティストを務めると共に、愛知学院大学 心身科学部、東海学園大学 スポーツ健康科学部、愛知淑徳大学 健康医療科学部、至学館大学 健康科学部で教員を務めている。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

ランチョンセミナー

2022年9月1日(木) 12:40 ~ 13:40 | 第7会場 2号館1階12教室

ランチョンセミナー⑥／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）③

司会：田村 好史（順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター）

[ランチョン6-1] やせた若い女性の「食べない・運動しない」に潜む健康リスクとその課題解決へむけて

*田村 好史[1]、室伏 由佳[2]、門屋 悠香[2]、山口 紀子[3]、豊島 晴子[3] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 花王株式会社研究戦略企画)

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー⑥／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）③

司会：田村 好史（順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター）
2022年9月1日(木) 12:40 〜 13:40 第7会場 (2号館1階12教室)

[ランチョン6-1]やせた若い女性の「食べない・運動しない」に潜む健康リスクとその課題解決へむけて

*田村 好史[1]、室伏 由佳[2]、門屋 悠香[2]、山口 紀子[3]、豊島 晴子[3] (1. 順天堂大学大学院 スポーツ医学・スポートロジー/スポートロジーセンター、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部、3. 花王株式会社研究戦略企画)

順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）は、スポーツと医学の融合による社会課題の解決を目指している。
日本は、女性の「痩せ」（BMI18.5 kg/m2未満）の割合が先進国の中で最も高く、特に若い女性では、約20%と極めて高い。科学的根拠の乏しいダイエット方法や「痩せていれば健康」という誤った認識、過度な痩せ志向を助長する情報が多く見受けられる。
本セミナーでは、痩せていても「少食で運動不足」の若い女性は肥満者と同様に血糖値が上昇し糖尿病リスクが高いという昨年より注目を集めている本学の研究成果と、その対策となる若い女性へ向けて製作・発信したエクササイズプログラムを紹介する。また、花王株式会社が取り組む女性の健康問題や、女性の痩せへの課題意識についてお話いただき、総合討論として医学、スポーツ科学、健康問題に取り組む企業の立場から、若い女性の痩せ思考の背景に何があるのか、若い世代からの健康的な体作りと運動の必要性について議論する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

ランチョンセミナー

2022年9月1日(木) 12:40 ~ 13:40 | 第5会場 2号館4階4E教室

ランチョンセミナー④／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）②

司会：青木 和浩（順天堂大学スポーツ健康科学部）、窪田 敦之（順天堂大学 スポーツ健康科学部）

[ランチョン4-1] プロ野球と大学の連携が拓くスポーツ•イノベーション

*久村 浩[1]、佐々木 順一[2]、青木 和浩[3]、窪田 敦之[3]、 (1. 読売巨人軍編成本部フィジカルコーディネーター、2. 千葉ロッテマリーンズメディカルディレクター、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、)

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー④／順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）②

司会：青木 和浩（順天堂大学スポーツ健康科学部）、窪田 敦之（順天堂大学 スポーツ健康科学部）

2022年9月1日(木) 12:40 〜 13:40 第5会場 (2号館4階4E教室)

[ランチョン4-1]プロ野球と大学の連携が拓くスポーツ•イノベーション

*久村 浩[1]、佐々木 順一[2]、青木 和浩[3]、窪田 敦之[3]、 (1. 読売巨人軍編成本部フィジカルコーディネーター、2. 千葉ロッテマリーンズメディカルディレクター、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、)

順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構（JASMS）は、スポーツと医学の融合による社会課題の解決を目指している。
近年トップアスリートへのサポートに医師や科学者などの専門家の参画が進んでいるが、チーム独自の取り組みに加えて、他組織との連携を図ることで、それらをさらに拡充させることが期待できる。
順天堂大学では、強みである医学・医療とスポーツ科学を融合した体制を形成し、プロ野球・読売ジャイアンツと千葉ロッテマリーンズへの医科学サポートを行っている。
本セミナーでは、両球団との連携や取り組みを紹介するとともに、プロスポーツチームが大学等学術機関との連携に期待することについて両球団よりお話いただく。また、今後の医科学データの活用や人材育成など、プロスポーツチームと大学との連携によるイノベーションについて議論する。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

ランチョンセミナー

2022年9月1日(木) 12:40 ~ 13:40 | 第4会場 3号館8階801教室

ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

共催社名：アーカイブティップス株式会社

[ランチョン3-1] モーションキャプチャーを指導に活かす

*阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

2022年9月1日(木) 12:40 〜 13:40 第4会場 (3号館8階801教室)

共催社名：アーカイブティップス株式会社

[ランチョン3-1]モーションキャプチャーを指導に活かす

*阿江 通良[1] (1. 日本体育大学)

体育スポーツの指導は運動(動作)の指導なしには成立しない。動作を改善するための第1歩は客観的手段や感覚を含めて様々な方法により運動者の動作を観察することであろう。次に運動者の動作を動作モデルや手本と比較するなどして評価し、ねらいとする動作ができない原因、技術的な欠点などを明らかにし、練習やトレーニングを行う。その際の方法には①課題発見型、②短期課題チェック型、③課題解決型、④仮説提案型のフィードバックが考えられる。このうち③は即時的フィーバックと呼ばれ、ある動作の情報を即時的に運動者や指導者に示してその問題点や改善状況などを検討して、再度実施するというプロセスを繰り返すが、動作情報を得るため motion　capture　systemやビデオが効果を発揮する。

　セミナーでは、ビデオ、 motion　capture　systemを用いたフィードバックの例、標準動作モデル(動きの標準値)を組み入れた動作トレーニングシステムなどを紹介し、 Monitoring motion trainingにおける motion capture　systemの活用法を考えることにしたい。

©一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

展示

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 17:00 | 書籍展示会場 3号館1階

書籍展示

展示

2022年9月1日(木) 9:00 ~ 17:00 | 企業展示会場 第一体育館

企業展示